

525

25

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{6m} 1 2 3 4 5

始



工 1R-84

527-25



大正
12.12.28
内交

題自屋君
著書

本山松陰



達觀



題島屋君
著書

本山松陰



序

著者島屋政一君は、篤學にして實踐躬行の人である、同時に頗る愛國の念に強い、常に我が國威の揚がらざるを嘆じ、慷慨悲憤の文を書いて居る、先年歐米を漫遊して歸朝するや、直に『日英米の現状と帝國の將來』を著はして、大に我が國民の覺醒に力むるところが

あつた、併し君の思想にはごこごこなく餘裕があつて、感傷的なところがない、諄々として説くところに君の面目躍如たるものがある。

君は歐米の事情に精通して居る、従つて君の書く文章は彼此相照して甚だ要を得て居る外國の人情風俗に通ぜざるものが外國のごこご云へば、一にも二にも之れを貶すご云ふやうな風もなく、またむやみに西歐の文物制度

を謳歌し、所謂西洋かぶれの氣障なところもない、常に公平の言をなして、是を是とし、非を非とこなして居る、之れ島屋君の特長である。

君頃日本書を著はし、將に上梓せんごするに方り、之れを予に示して序文を求められた仍て繙き見るに、君が在來好んで筆にする評論の外、紀行文あり、偶感あり、人物月旦あり、

時訓あり、まここに面白く讀んだ。君は旅行が好きで、暇あれば、南船北馬、よく紀行文を書く、君の紀行文には屢々史論が伴つて居る、そして其の史論に於て、人の意表に出づるものがある、本書中『菅公の晩年を偲びて』の一文の如き、一の紀行文であるが、新らしい材料を捉へて史實の上に一發見をなして居る。

予は此書を江湖に推奨するに躊躇しない。

大正十二年十二月

大阪毎日新聞社編輯局にて

さるるるる

自序

不遇の裡に一生を終つた母が亡くなつてから、本年は恰かも十年目なので、妹の秋代と相談の上、母の小傳を編み、之れを生前お世話になつた人々に頼ち聊か母の靈を慰め、且つ亡き母の俤を偲びたいと思つて執筆する筈であつた。

ところが其の後妹の言ふには、子として母の小傳は誠によけれど、之れを人に呈したとて、つまらないものだ、それも賢婦人といふのならまだしもだが、凡人の傳記刊行なんか考へものだ、それよりも、何か少しでも社會の利益になることを書いた方がよからう、との提言である、成るほどそ

う言へばそうだが、殊に母の小傳などを配布するのは母の本意でもなからうし、一層之れは思ひ止まつた方がよからうと、妹の注意によつて執筆を中止することゝしたのである。

そこで又妹から言はれたやうに、何でも彼でも、多少社會を裨益するものを書いて見やうかと云ふ氣になり、手當り次第に書いたものが本書である。

元來技巧もなく、着想にも乏しい余に於て、世を裨益すると云ふやうなものは書けないが、右のやうな曲折で、兎も角本書が出来上つたのである、そこで讀者諸君の迷惑を察しつゝ、『亡き母を懐ひて』の一文を本書に收め、之れを母の靈に捧げさして頂くことゝした。

尙ほ余は先年來菅公の事蹟其の他を調査し、『菅公論』を公にしたい希望を有して居るが、仕事に追はれて、今に稿を續けることが出来ない、たゞ其の一端として本書中に『菅公の晩年を偲びて』の一篇を載せて、余が菅公の事蹟調査に對し、多大の厚意を寄せられつゝある各位に、聊か酬ひたいと思ふのである。

著者の光榮とするところは、本書の刊行に際し、大阪毎日新聞社長本山彦一氏は題辭を、同主筆高石眞五郎氏は序文を寄せられたことである、茲に深く其の厚意を感謝するものである、また親友肥田利男君に本書装幀の勞を深謝する。

本書の刊行は年末匆忙の秋に當り、充分推敲の暇なかりしを遺憾とし、

且つ誤植脱字等なきを保し難い、之等は讀者諸君の高教を俟つて漸次訂正
することゝしたい、幸に諒されんことを。

大正十二年十二月

島屋政一記

目 次

嗚呼一等國	………	一
一米人の日本觀	………	二〇
我が國民精神の中樞	………	二八
秩 序	………	三一
孫 哲 學	………	三三
日本と支那	………	四六
よし子さん	………	四九
八方美人	………	五三
電話に惚れる女	………	五六

黒田君の歐米留學を送る	五九
日本に於ける現代印刷文化の濫觴	六一
中田熊次氏と中田守雄氏	七〇
ABC訓	七八
大正の大震災	八一
琵琶湖遊覽	一〇九
經堂郡山君の渡米を送る	一一一
讃岐より一筆	一一五
日米職工の美點と缺點	一二八
フランクリント本木昌造翁	一二二
播州の風光	一三〇

亡き母を懐ひて	一三四
眞の偉人	一四三
時間の空費	一四三
松山と道後	一四六
避寒と避暑	一四六
河南遊記	一五四
努力論	一五七
現代法律用語	一七三
上海所見	一七六
小學兒童の群衆道德	一七七
共產黨の女	二〇一
	二〇二

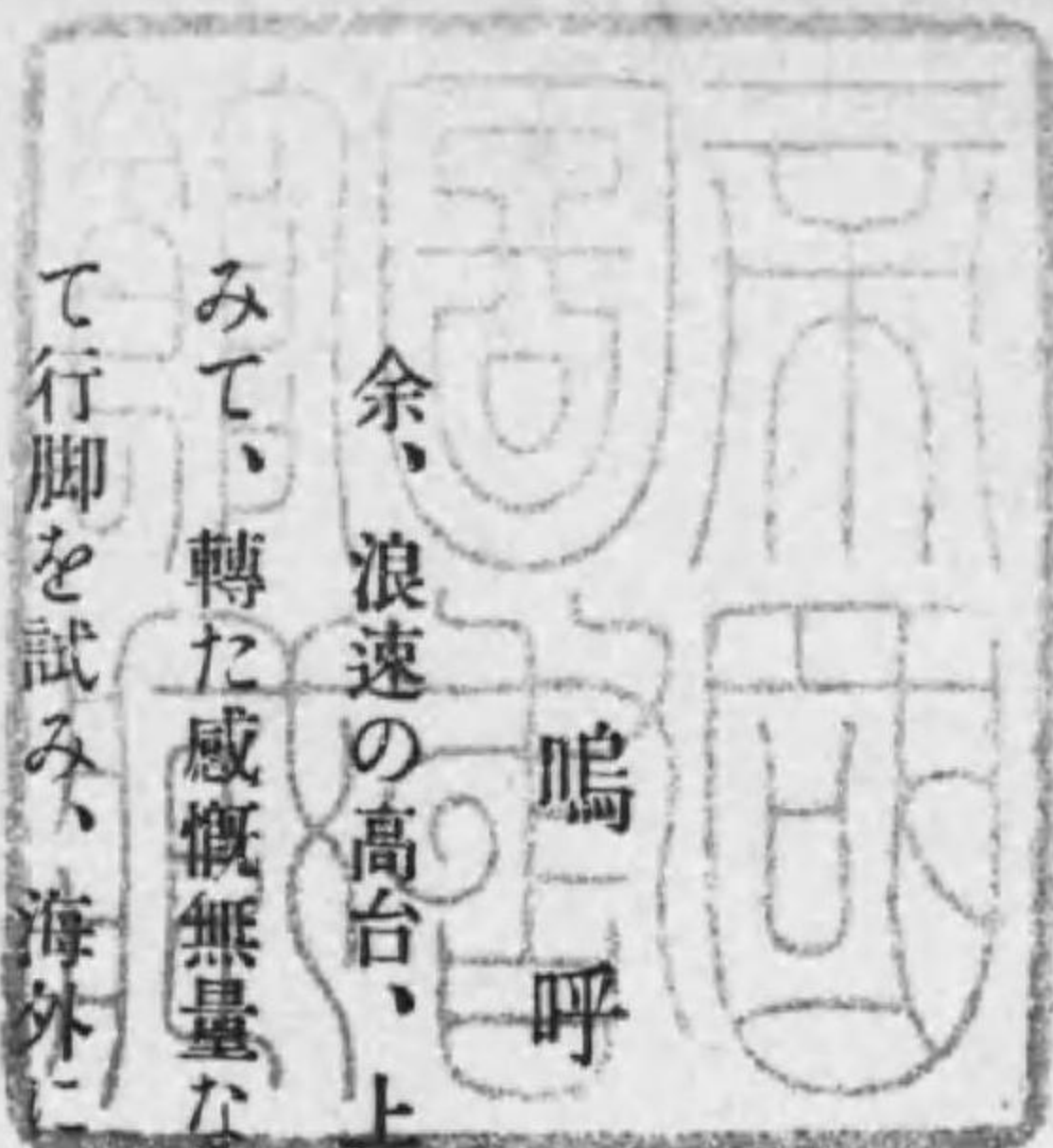
紐育は如何に大なるか	二〇四
天才を基礎とした力	二一六
長崎とバツテン	二一七
同情される人	二一九
滬上ローマンス	二二〇
世の中	二三六
菅公の晩年を偲びて	二三八
太陽	二八八
盲目なる哉現代の讀書界	二九六
敷島の空袋	三〇二
友を訪ねて	三〇六

芝居と芋と南瓜	三一
春	三一六
噫我が對馬先生	三一八
發明家を見殺しにする日本	三二二
特大博士	三二九
酒飲むべし飲むべからず	三三〇
皮よりも實	三四〇
便所と圖書	三四一
英雄好色史	三四八
現代的日本語	三五七

目次 (終)

高台に登りて

島屋政一著



嗚呼一等國

余、浪速の高台、上町に居を下して茲に十年、所謂世路の辛酸を嘗め、既往を顧みて、轉た感慨無量なるものがある。或は切齒扼腕し、或は噴飯解頰し、機に臨みて行脚を試み、海外に遊ぶこと既に二回、具さに社會の事相に觸れ、時に親しむべきあり、時に推考すべきあり、而して時に又默殺すべからざるものがある。

靜かに我國の現状を見るに、徒らに歐米の文化に心酔し、泰西の總てを謳歌して

嗚呼一等國

更に歸するところを知らざるもの、如き觀があり、我國刻下の趨勢は、眞に憂慮に堪へざるものがある、果して吾人は、東洋文化の悉くを放棄して、歐米のそれのみに信賴し得べきものであるか、聊か疑ひなきを得ない。

余をして卒直に言はしむれば、現時の歐米崇拜熱は、實に我が國民の一弊習である、今にして東洋文化の決して輕視すべからざる所以を覺り、この惡癖を矯正して、時代の風潮に掉すこそ、刻下焦眉の急務であると確信する。

佛蘭西大革命を誘起した所以のものは、げに東洋の學說に基因する。アダムスミスの自由貿易論は、經濟學上牢乎拔くべからざる一學說として、斯界に重きを爲して居る、然かも其の淵源は、東洋學說の粹を抜いたに外ならぬ。中世期に於て、歐洲の學說に大異動を來し、多大の感化を齎して、今日の文化を産んだものは、之れ亦東洋の學說である。

古來、東洋に遊んだ泰西碩儒の多くが、東洋文明の深遠なるを發見して、歸國後竊かに之れを研究し、更に之れを社會に發表して世人の讚仰を受けるもの其の例に乏しくない、古くはフランシス・ザヴィエーリ然り、ケネー然り、近くはバートランド・ラッセル亦然りである、然して彼等が斯くまでに、天下の耳目を聳動せしめた所以のものは、一に東洋文化の咀嚼にある。由來日本人は、何事も咀嚼せず、徒らに皮相の觀察の下に自ら彼等の長と妄信したものを採つて直に我が國民に強ひやうとする、國狀を異にせる我が國民に適せぬのは當然のことである。

我が國に、歐米崇拜熱の盛んなこと、恐らく今日ほど甚しいことはなからう、彼等は頻りに歐米を引用して、一にも歐米、二にも歐米、歐米を一巡しなれば、恰かも人間らしい人間でないかの感を懷き、随つて洋行熱は、益々熾烈を極めて居る、然して、一たび歸朝するや、鵜呑みの見を臆面もなく擴げて、盛んに歐米の文物を

有難がる、聞くもの徒らに眩惑されて附和雷同し、歐米文化に隨喜の涙を落すに至る。

安全第一セーフティファーストの語、一たび米國に流行するや、直に採つて我が標語とし、更に進んで、健康第一、信用第一、宣傳第一等總て第一づくめの流行語訛成し、單に名のみで、其の實少しも之れに伴はず、百害あつて殆んど一利なき結果を來して居るのは、之れ正に米國かぶれの餘弊と言はざるを得ない。

戀愛至上は歐米人の金科玉條である、彼等は戀愛の爲めには何ものをも犠牲にする覺悟をもつて居るが、之れ歐米に於ける社會制度の傳統的結果である、然して彼等には、之の戀愛至上なるものに對して、立派な理解があり、標準がある、彼等の唱へるところの戀愛は、即ちプラトニッククラブである、隨つて彼等の戀愛なるものは必ずしも道德上の罪を伴ふものでない。

然るに、翻つて我が同胞を顧るに、其の輸入されたる戀愛觀の結果は、果して何うであらう、眞に憂慮に堪へぬではないか。戀愛至美の觀念を履き違へたものに華族あり、富豪あり、學者あり、文士がある、而して彼等は現代日本の典型的新思想家と目されて居る、或は三角關係と云ひ、或は四角關係と云ふ、有夫の女が、妻ある男に走り、妻帯の男子が、現に歴とした夫ある婦人と手を握つて得意満面と云ふ體爲くで、戀愛純美を高唱し、恬として省みるところなく、世人は之れを見て忌憚嘲笑するどころか、却つて之に共鳴謳歌せんとする風がある、眞に浩歎すべき限りではないか。

戀愛は人生の華であり、結婚は人生の墳墓であるとは、歐米人の口癖にする信條である、試に米國を觀るに、其の社會生活たるや、一見甚だ自由のやうであるが、苟も両親の許可を得ずして結婚するものは殆んど一人もなく、而して一たび結婚す

るや、恰かも墳墓を築いたつもりで、彼等は堅く覺悟を決める、歐米人の家庭には、我等が想像するより遙かに厳格な規律がある。人生の墳墓を幾つも有つて居る邦人の或ものとは、大に其の趣きを異にする、兎角日本人は、敢て道徳を無視して置きながら、自然の運命に牽かされたのだと、苦しい口實を設け、やたらに自由戀愛主義を振り廻はして社會を欺瞞せんとして居るが、之れ實に所謂婦人解放の勘違ひより來る惡傾向で、之れ等は畢竟性慾に血迷つた罪惡の權化とでも云ふべく、正に唾棄するに堪へたるものである、日本の國體の今日ある所以のものは、一に家族制度の本義が、畏多くも、一天萬乘の君に初まり、下萬民に至るまで、夫婦和合の道を遵守しつゝ、あるのに原因する。

似而非自由戀愛説が旺んであれば、遂に家を滅ぼし、國家を失ふ因となる、平家の没落も、豊臣家が亡びたのも、支那、希臘の文明が衰へたのも皆之れが爲めである、尙ほ其の昔ローマが富者貧徒上下を通じて、歡樂の濁夢に狂醉亂舞し、酒池肉林の劣慾を恣にし、赤裸々に其の暗黒裡罪淫面を曝露するに及んで、さしもの榮華も槿花一朝の夢と消へたではないか。

近來、改造の聲を耳にすること、甚だ屢々である、此の叫びは、必ずしも悪くはない、併し上りのする改造熱に浮かされて、それが爲めに、歐米の所謂リコンストラクションなるもの、眞意を誤解せぬことを肝要である、充分に、脚下を研究しもせずして、徒らに頭の先きのみを考へるものがあれば、それは全く不具の改造と稱すべく、我が國民は、遂に永へに不具に終ることはないであらうか、世に西洋思想の鵜呑みほど危険千萬なものはない。冷靜に日本の現狀を觀察せよ、民心浮華輕佻に流れて、靜思深慮を缺き、政府は更迭せざるべからずと叫ぶものあれば、其の論旨を究めずして、直に之に雷同し、ますく其の聲を大にする。試みに我が憲政

史を繙くに、政府の更迭が、政策上の失敗の自認に胚胎した例は一もなく、淺薄にして、妄斷的なる所謂輿論なるものに壓迫されて、敢て更迭した事例が頗る多い。

また火災の如きも、江戸の華は愚ろか、日本の一名物である、其の數の多くして、其の損害の甚大なる、歐米に於て全く其の比を見ない。疫癘の猖獗甚だしいことも亦世界に冠たる姿がある、之れ全く衛生思想が普及せず、防疫施設の不完全なのに因る。尙ほ學校騒動の多いこと、汽車、電車の事故の夥しいこと、兇盜鼠賊の跳梁跋扈を極めること、殺人の頻々たること、實に枚擧に遑がない、之等の弊風罪惡を見て、頻に改造を絶叫し、改造の領分は、既に衣食住より、時間の勵行にまで亘り居るのは、誠に喜ばしきことであるが、徒らに聲のみ大にして、實行の更に伴はぬのを憾みとする、即ち此の改造の宣傳により、眞に改造せられたものが果して何ほどあらうか、實行に就いては、聊かも考慮せず、たゞ盲目滅法に、一にも改造、二

にも改造は、吾人をして改造は宣傳の代名詞かと怪しましめる。

我が國は、世界五大強國の一であると空嘯き、大道狹しと肩で風切り、横行濶歩するものは、實に我が國民である、自ら號して強國の民と稱す、其の自尊心は必ずしも咎むべきではないが、一都市が震災に襲はれたからとて、忽ち列國より鼎の輕重を問はれるものは日本より外にない。歐洲の大亂に際して、之れを極端に云ふならば、火事場泥棒も同然、些少の富を贏ち得ると、俄かに有頂天となり、果ては成金風を吹かして奢侈淫靡に流れ、しかも意氣揚々として世界の列強に仲間入りしたもの此所にありと、大言壯語するはまだしも、直に西洋の物質的文明中の最醜最惡の方面のみを模倣して、さも眞個の文明となり濟ました如く、誇り顔をするもの、之れ我が國民ではないか。

貧乏神の御宣託として、蜀山人は、藝者狂ひ女郎買ひすべし、成るべく大酒飲む

べし、金錢湯水の如く使ふべし、と云つて居る、而して貧乏神の御宣託を克く守るものは日本人である、徒に西化に熱中し、且つ奢侈を事として、國家を滅亡に導かんとして居るものは、果して何を目標として得意然たるか。茲に天戒めて震災を下す、誠に慎しむべきは驕傲であり、奢侈である。

敢て震災に祟られずとも、國力の充實及び精神的文明の見地よりすれば、我が國は依然弱國たるを免れず、到底列強に比肩すべくもない、其の家屋の建築は、支那にさへ劣るとは、外國の建築家の批判である。四面環海の國でありながら、設備の完成せる海水浴場の一ヶ所すら見ることが出來ず、其の道路は降雨の際、舟を浮べて交通すべしとさへ外人に揶揄されるほどである、我が外航船舶の船足の鈍いのも一名物に計へられて居る。日本では、大阪城内の巨石が物珍らしく考へられるに拘はらず、支那では幾倍大の石塊が路傍にゴロ／＼散亂して居る。劇場、公會堂、圖書

館、病院、ホテル、公園、其の他商業に將た工業に、一として歐米先進國に遜色なきものはない。

更に飛行機を見よ、歐米先進國では、我が國の如く小數専門家の搭乘飛駛に限られて、一般民衆とは全然没交渉であるかの觀を呈し、たま／＼郵便飛行の舉でもあれば、驚歎之を久しふする幼稚なる發達とは全く其の趣きを異にし、郵便物其他貨物の輸送は言はずもがな、公衆の旅行用として汽車汽船と毫ら異なるところはない、ドーバー海峡を横斷しての英佛間の旅行に飛行機の利用は一の茶飯事と見做され、僅かに二十餘時間を以て北米大陸を横斷する日日の旅客空中輸送に對し一人の驚く米人もない、偶々頭上に飛來する飛行機を物珍らしげに見上げて、度膽を引き抜かれる邦人は臺灣の生蕃と大差なく、歐米人の面前に於て正に愧死すべきである。

二三十里旅行するさへ歐米人が世界漫遊を爲す以上に大層がる、舊幕時代、道路

がまだ險難であつた時、世の中に旅行は最も困難なもの、一と考へられ其の首途に水盃を交はしたと云ふ餘弊が、都會は姑く措き、一寸田舎に行くも今も尙ほ存して、旅行と云へば、死出の旅立ちの如くに思はれるのは、時代錯誤も、實に甚だしいと云はざるを得ないではないか。

人口六千萬、如何にも大國らしく聞えるが、僅々七百萬町歩に足らぬ耕地を、唯一の頼りとして、敢て生活をなさんとして居る、畢竟國民共喰ひに終らすんば幸ひである、何れの國民と比較しても、實に日本は憐れな國である、それで居ながら、大言壯語、富強國民振る其の態度は、眞に片腹痛く、島國根性を脱せざる證左として、寔に憫殺すべきものがある。

凡て、邦人の思索力は、其の範圍極めて局限されたかの觀がある、歐米の思想、其の制度文物悉くを鵜呑みにしてかゝり、此の狭小な範圍内で、總てを解決せんと

企てるのが抑もの失敗である。

米國に勞働爭議頻發するや、資本家勞働者間の確執の風潮漸く我れにも亦影響し來り、今や勞資協調の聲ますます大であるが、更に歸結するところを知らず、全く持て餘しの状態である、蓋し「我等の關係は、全く取與の關係であつて、それ以上何物もない」と云ふ米國資本家の言をそのまま直譯して、我が資本家は之れを唯一の信條と楯に取り、溫情主義は皆無となり、遂に使用人側の不滿を馴致し、怠業また罷業到るところに演せられる。更に勞働者側を見るに、勞働問題の聲漸く囂しくなるに連れ、彼等の能率は、やゝもすれば低下の傾きがあり、賃金徒らに昂騰して、能率は却つて反比例の奇觀を呈して居る、之れ實にサリンデン・マカスセーの言を以てすれば、從來の勞働者は、自ら利せんが爲めのみならず努力したが、今や彼等の努力は自らを利するのみに止まらず、更に進んで他人の利することを虞れるの餘り、

自己の努力に自ら制限を加へんとする悪傾向を生じたものである、然して之れを最も露骨に示したものは、日本の資本家並に労働者の現状である、斯くて範圍の狭き觀察は、悪結果を醸成せんとして居る、眞に寒心に堪へないではないか。

尙ほ西洋の文化にかぶれた結果は、次に枚擧する幾多の實例が遺憾なく之れを表はして居る、即ち我が國に就いて何等の豫備知識を有せざる新來外人の眼底に先づ映するものは、獨立國にあらざるかの感を呈する日本である、彼等試みに汽車の切符を購へば和英兩文にて印刷され、驛前に出づれば、直に怪しげな横文字の看板を見る、殊にローマ字の看板は彼等に取りては更に判らう筈がない、紙幣の如きにも和英兩文が記入され、揭示板も和英兩文で書かれて居る、甚しきに至つては、呉服店の看板に Good story とあり、西洋洗濯店が Europe Washing などとてつものなことを書きつけて、物笑ひの種を播いて居る、看板の主は其馬鹿さ加減を知るや

知らずや、恥の上塗りとは、正に斯の如きを云ふのである。

西洋人の便宜の爲め、歐文を併記したとすれば、一應尤もな理屈に聞ゆるが、必要もないのに、何も彼も歐文を入れ、恰かも他國の領土然として濟まして居る國民が世界の何處にあらうか、余は嘗て或る西洋人と大阪市中を散歩して、出し拔けにいろ／＼のことを質問され、誠に閉口し、肩身の狭い感を深くしたことがある、のみならず、會話にも日本人は自國語を嫌つてかよく英語を混じえて話す癖がある、演説中にも頻りに英語や佛語を連發する、而して之れを混用せざれば、自己の價値が下がりでもするかと考へて居るものが尠なくない、ます／＼以て屬國然たる態度である。電車の中でも同胞の口から得意然たる英語交りの會話を聞かされる、之れほど唾棄すべきものはない、何れもこれ外國熱に浮かされた結果であつて、白人等が日本を目して野蠻未開の地か、乃至半開の國民位に多寡を括るのは、少しも怪し

むに足らぬ。

西洋の事物を研究し、他山の石を以て我が玉を攻くのは、甚だ結構なことであるが、西洋なればとて、悉くが善であり、美であるとするならば、それこそ大なる心得違ひである、西洋にも善いこともあれば、悪いこともある、要は彼れの長を採り、我が短を補ふにある。

西洋思想を研究するものは、概ね我が知識階級か、或は中産階級のものに止まり而して爲政者又は文學者に殊に多きを見る、日本の頽廢が、如何はしい文士によつて招來されんとしつゝあるのも、大いに憂ふべきことである、歐米にも文藝の墮落なるものがないとも限らぬのであるから、唯だ歐米の文藝道德思想なればとて、直に以て眞に美なるものとなし、之れを歓迎すべきでない、よく善惡長短を糺明し、然る後輸入採用すべきである、悉く善美なるものと見做して之れを迎ふるは、輕卒

不用意も亦甚しと言はざるを得ない。

様々の形式に於て、絶へず動搖しつゝあるものは我が文藝である、世人の多くは之によりて常に迷はされつゝある、我が國が、如何にして確固たる地位を得、文藝上世界に冠たる地盤を占むべきかに就いて思ふ時、吾等は多大の疑問を抱き、前途遼遠を啣たざるを得ない。

政治は生活なりと喝破した、スペンサーの言を援用すれば、我が國民ほど政治思想の貧弱さを示すものはない、家にあつては糞尿と同居し、出でゝは黃塵萬丈の巷に彷徨する、果して五大列強の一と誇るに足るであらうか、政治即ち生活なりとすれば、先づ手近かの所から改良すべきではないか、然るに衣食住の問題を閑却し去つた結果、日本は世界第一の病弱國となり、世界最高の死亡率を示すに至つたのである。

由來政治の眼目たるや、決して單なる支配のみではなく、國民生活の向上と、安全にあることを俟たない、國民が政治を一部少數の權力者に委して事毎に彼等に左右され、我が能事畢れりとなすものは、即ち自己の低能さ加減を正直に示すものでなくて何んであらう、斯かる國民が、果して一等國の民として洒々然と濶歩し得るや否や。

吾人は冷靜に、吾人の脚下を見ることを忘却してはならぬ、徒に西洋熱に魔されて、今日は五色の酒に酔倒し、明日はダンスに浮身を窺す、斯くて自らを傷け、社會を紊る、彼等の罪や誠に大である。日本の某雜誌に、東洋研究に關する論文が發表された當時、外國の新聞雜誌社は、争つて之れを翻譯掲載した、然してこの事あつたの知らぬ日本の新聞紙が、外國の誌上に東洋研究の論文が表はれたとて、好個の資料と、鬼の首でも取つたやうに、競ふて之れを翻譯掲載したことがあつた、

又或る好事家が、支那の骨董品だと勧められ、買ひ取つたる其の品は、後に支那の便壺であつたことが判り、友人間にも笑ひの種となつたことがあつたと云ふ、餘り、ものにかぶれた末路は、斯くまで憫むべきものである、凡て物の性質を辨へもせず、たゞ無暗矢鏢に外國にのみ憧がれ、之れを崇拜する結果、その藝術文化に眩惑し、遂には斯かる愚を學ぶに至るのである。

西洋の文化を知らんと欲せば、先づ吾人は、東洋の文化を體得しなければならぬ、自己の家具に如何なるものがあるかを知らず、事に當りて周章狼狽、隣家のものを借用せんとするが如きは、其の慌てさ加減も亦甚しと云ふべきである。

概して視界の狭小は、總ての事を誤認謬見する場合が甚だ多い、我が國民が、現に凡て物に行詰りの形にあるのは、職として視界の大ならざるに由る、之れを稱して島國的國民性と云はずして何と評しやう。島國的國民は獨占慾のみ多くして、共

同の精神に乏しく、大發展大成功をなすに最も不適當である、宏大なる庭園を獨占し、一流の藝術家を獨占し、美妓を落藉して獨占す、之れ皆極めて狭小なる島國的視界思想の發露に他ならぬ。

吾人は此の機に臨み、切に我が國民の覺醒を要求し、我が國が眞の一等國として、世界的雄飛の秋が、一日も早く到らんことを衷心より希望するものである。

一米人の日本觀

著者は今、一米人と共に、西航の途上にある、一米人名をジョン・ラザリアンと云ふ、航海中の退屈紛れに、種々の談話を交換した、ラザリアン氏は關東震災後、初めて日本に來遊し我が國に滞在すること二旬、或は風光を賞し、或は人情風俗を視察し、今や其の目的を達して、西航の途にあるものである。

其の説くところ極めて詳細に、其の批評は甚だお世辭的である、採つて以て日本の誇りと爲すには當らないが、又一種の参考となるべき點がないでもない、即ち此所に氏の印象を録して我が國民に告げたいと思ふ。

ラザリアン氏は、幼少の頃より、東洋の文物を研究することに頗る趣味を持ち、殊に米國で發行された日本及び支那に關する著書は悉く讀破し、且つ西海岸に住して、新聞記者たること十數年に上り、従つて他の人よりは日本を知ること甚だ大なるものがあると前提して、左の如く語つた。

一体日本人なるものは、祖先傳來の衣服を脱ぎて洋服を着、下駄を捨て、靴を履き、西洋の眞似をしてゐるが、心は矢張りジャツプだと貶なした著書もあり、又日本人は近來英米人以上の生活をなし、英米人以上の意氣を有してゐる東洋の第一人者だと、評してゐる向もある、而して自分としては、其の中間を取りて想像し、是

非一度日本を観光視察したいと云ふ希望を有して居たのであつた。ところが近來實業に従事したのを幸ひ、豫てより自分の憧れて居る東洋方面にも是非取引先を作りたい希望の下に日本、支那及び印度を視察すべく此の行を企てたものである。

日本に初めて着して、最も驚いたのは、風光の明眉といふことである、日本の景色は優美で、恰かも仙境に遊ぶの感があると、嘗て或る書物で、讀んだことがあるが、實際に目撃して更に驚いた、斯程までに清く麗はしい國とは露ほご知らなかつたのである、殊に水に映る風景を望む時、誠に氣も心も樂園にあるの思ひがある、日本は山國と聞いてゐたが、山河を跋涉するにも、豫想以上に完備した鐵道があり電車ありて、何の雜作もなく、欲する所へ旅行することが出來たのも非常に愉快に感じたところである。

國の優美なるに加へて、貴重なる美術品が到るところに散在し、行くところ必ず

藝術の精を竭くした有様を見るべき、賞讃せざらんとするも能はないほどである、

自分は美術を愛し、且つ日本は世界の美術國であることを音に聞いて居て、日本の藝術に憧憬れること久しきに亘つたが、今初めて立派なる國民藝術に接し快感を惹起した、天然の優雅に配するに、人工の至美を以てする日本の尊さは、眞に譬ふるに何物もない。

日本の人達は、口癖の如く、ベル

リ提督が門戸を叩いて、覺醒を促し、今日の文明に導いたと稱して居るが、こは謙



船中のアリザン氏と著者

遜も亦甚しい言である、日本の今日の文明は、決して其の源を五十年や六十年以前に發したものは思はれない、あの古い、千有餘年の古美術を鑑賞した自分の眼には、日本の今日あるは宜なるかなと首肯かされたのであつた。

汽車に乗つて、車窓から眺める田畝は如何にも整然と耕作され、津々浦々、山の谷間に至るまで、殆んど空地なきまでによく開墾されて居る、其の農業に従事してゐる農夫の何れもが、如何にも眞面目に、一生懸命に精勵して居る様は、眞に國家の爲めにと云ふ風がある、諸所にある宏大なる製造工場の煙筒からは黒煙濛々として如何にも威勢があり、場内には多くの威力ある機械を設備して、盛んに必要品の製造に従事して居る。

然して更に感すべきは、日本では如何なる工場を參觀しても、技師から職工に至るまで悉く日本人のみであることである、英米の各工場に於ては、其の國民丈けの

工場員と云ふのは頗る稀れである、米國にあつても、其の工場によりては技師として獨逸人があり、英國人が居る如く、英國に於ても米人あり、佛人が居ると云ふ有様なるに、日本の工場に於てこのことなきは、實に意外とするところであつた。

由來日本人の性質は、初めは模造にあるやうである、即ち外國の文化なり、又は政體なり、其の總てを模造する國民である、而して更に進んでは、其の模造したところのものを、日本の國民または、國體に適當するやうに改良修正を加へて、これを應用することに努力する、そして眞の日本の文化を作り出す、其の意氣は寔に素晴らしいものであつて、東洋否世界に斯かる意氣込を有する國民はないと言ふも敢て過賞でない。

震災後の狀況を一瞥するに、政府國民共に協力一致し、復興に絶大の努力を拂つて居る、其の衝天の意氣を以て事に當つて居る有様は、全く世界人類の好模範と稱

すべく、斯くて震災以前にも勝る帝都を築き上げんとして居る、實に日本の國民こそ敬服に値ひする國民である。

今日の日本を視察したものは、或は都市の不完備を説き、國家として、如何にも幼稚なるかの如き言を弄するものもあるが、日本として今日斯くまで發達したことは、寧ろ驚嘆すべきである、然して此の調子を以て進みつゝあるが故に、二三十年後に於ては、必ずや歐米の都市を凌ぐに足る設備が整頓されるものと思つてゐる、鐵道の敷設、道路の改造、その他生活上の施設も着々として進行しつゝある、或は歐米のそれの如く急速でないかも知れぬが、最も着實に従事し、孜孜として倦まざる跡が歴然として過去の歴史に遺つてゐる、商工業に於ても亦然りで、駁々として國家の爲め最大努力を傾倒しつゝあるは、只管感心の外はない。

尙ほ國民は上下の別なく、何れも人に對して頗る親切で且つ禮讓の正しいことも

列國に其の比を見ない、のみならず、日本人はよく清貧に甘じ義に勇むと云ふ美點を有してゐる、これは特に西洋人に取つては珍らしいことである、政治に於ても、日本の代議政体の如きは東洋にありて、各國の模範ともなるほどに發達せりと聞くが、成るほど日本の國民としては、善政を布き得る民であることが、種々の方面より觀察して窺ふことが出来る。

斯く觀じ來れば、將來世界の檜舞臺に立つて、其の覇を唱へるものは、實に日本國民である、自分は日本の國民に對し深く敬意を表すものである。

斯く語り續けて、ラザリアン氏は莞爾として微笑した、余は氏の言の當らざるを云ひ、尙ほも談話は次から次へと續けられたのであつた、要するにラザリアン氏は徹頭徹尾日本を賞揚し其の國民を稱賛したのであつた、我が國民は氏の言を聽き果して如何の感あるか。

我が國民精神の中樞

世界何れの國民を問はず、皆それ／＼國民精神なるものがあり、其國民精神には中樞となるものがある、而して我が國民精神の中樞なるものは新年より發して居るものと考へられる。

今日に於て、最も盛んに唱道されつゝあるデモクラシーの如きも、我が國の新年に於て、初めて眞のデモクラシーを見ることが出来ること云つても敢て過言でない、デモクラシーは米國の專賣品の如く考へて居るものがあるかも知れぬが、デモクラシーは其の實日本が總本家であることは、日本の新年氣分によつて充分に知ることが出来る。

元日や昨日の鬼も禮に來る

で、昨日までは、社會の競争場裡に立つて、大激戦を續けて來たが、一夜明けて新年となるや、門毎に引き廻はした注連繩や、綠濃かなる松飾りに、人の氣もなんとなく長閑である、貴賤貧富老若男女の別なく、芽出度し／＼で祝ひ樂しむに我が新年の如きものはなく、而して日本の新年氣分は、何れの國に於ても之を味ふことは出来ぬ、其の津々浦々に至るまで、六千萬同胞擧つて之れを祝し合ひ、喜び合ふもの、日本の新年以外他に之を求めんことは出来ぬ、實に日本の新年は一般的であり民衆的である、此の位いデモクラチックなものはない。

此のデモクラシーな我が新年氣分は、實に我等が祖先傳來のものであつて、實に我が國民精神の中樞をなして居るものである、太古の穴居時代にありては、我が祖先の門先きには齒朶あり、交讓木が繁茂して居た、また注連繩を引き廻はして、他人の家と自分の家との區別をして居たのであつた、徒然草に「松は千歳を契り、竹

は萬代を限る草木なれば、年の初めの祝ひ事にたてはべるべし」とあるに見ても、随分古くから我が國民の習慣となつて居ることが判る。蕨と梅干と水母とを以て山海の珍味と稱した我が國民には、傳統的質素な風習がある、貧富の差別なく、數の子と田作りで新年を祝ふ氣分も亦格別である、近來外來思想の惡弊に藉られて、動もすると豪奢に流れんとする風あるは歎すべきも、元來日本人は質素を旨とする國民であることは、祖先の傳統的生活に徴して明かである。

質素簡朴を旨として、心から新年を祝ふと云ふ精神には、思想の統一があり、眞の平和がある、この眞の平和こそ、我が國民精神を支配して居るものである、「北斗廻りて東風轉じ、雙闕曉けて五門春なり」と古人が賦した元旦の光景は、我が國民一般の享有するところで、舊事は總てを新にし、更に潑刺たる生氣を奮ひ起して勇往邁進するところに、我が國民性の美點が存する。

『ひとゝせをみな今日の心地して、のどかに世をも過してしかな』とは我が國民精神を代表するものである。

一年の計は元旦にありて、其の元旦の清き心をもつて精勵に、いつものどかに世を過ごし行くものは我が國民である、この心掛けありて一家の團樂があり、社會の結合がある、吾人は我が國民精神の中樞がこの類ひなき我が古き祖先の傳統的精神の表徴よりなる新年にあるを思ふ時、常に元旦の精神を復活しつゝ、其の國民精神の發揮に力めたいと思ふものである。

秩 序

世に秩序ほど大切なものはない、いくら兵士が多く、武器が澤山あり、兵糧は山と積まれて居ても、秩序が整然として居なくては、結局敗軍たるを免れぬ。正成が

小兵を以て八十萬の大軍を引き受けて、能く之を惱ましたのは、正成の軍に秩序が立つてゐたからである。

都市としても、如何に宏大なる建築物があり、人口も相當にあり、いろ／＼之に伴ふ設備があるとしても、秩序がなかつたならば、混亂の状態に歸して何等の用にもならず、地上に存在する價值さへ無いものである、農夫が田を耕すにしても、工業家が工場で製造に従事するにしても、學生が學問するにしても、秩序を立て、かゝると云ふことが、何より緊要なことである。人と約束して、其の約を履まないのも、即ち秩序がないこととなる、秩序を保持して行くところに總ての勝利があるのである。

昔の英雄豪傑と呼ばれ、或は學者技藝家と稱されて居るほどの人の行ひには、何れも立派な秩序があつた、而して秩序を保つものは法律である、法律は即ち人の心

にある、この心を以て秩序を樹て、之れを守ることは甚だ容易のことである、常に冷靜なれば自ら秩序も備はるが、熱し易き人、怒り易き人には秩序が破壊され易い秩序に重きを置くことの必要を感じるものは、先づ自己を反省し、理非曲直を辨へて靜かに世に處するにある。

孫 哲 學

孫ほど世に可愛いものはない、とは社會の通用語であるが、孫を可愛いがるなら猫の子を可愛いがれ、と云ふのも亦社會の常套語となつて居る、茲に於て孫可愛いがるべきか、疎んずべきか、祖父母たるもの、その岐点に彷徨せざるを得ないこととなる。

然かし、一步退いて、冷靜に觀察すると、孫に對する愛、乃至孫が祖父母に對す

る敬愛心なるものに、頗る意味深長な、そして一種言ふべからざる或る愛がある、強ひて之れを解剖批判せんとするもの、即ち孫哲學である。

余は常に親友某の家庭に出入する、そしてその家庭に、可愛らしいお孫さんが居る、お祖母さんと云ふ人も却々上品な、おばアさんらしい態度で、いつも何かとお孫さんの面倒を見て居る、おばアさんの名はお光さんとかで、お孫さんは三郎さん／＼と呼ばれて居る、余は某氏の家庭を訪問する毎に、このおばアさんとお孫さんどをいつも目撃して、祖母の孫に對する愛、孫の祖母に對する敬慕の念とを稍や深く研究することが出来た。

儲て、息子が成長すると、時代思想を異にしてゐるところから、親と意見の衝突が初まる、親はだん／＼思想が古くなるに反比例して、息子の方は益々新らしくなる、それで衝突は愈々嵩じて来る、これはどこの家庭でも皆そうである、娘にして

も女學校を卒業する頃には、親とは大分變つた頭腦を有つやうになる、いくら可愛い一人娘でも親の自由にはならぬ、老いては子に従へど云ふ言葉さへあるが、親は親としての權利を振り廻はしたいばかりに、子に従ふどころか、飽まで親の權威で我が子を壓迫しやうと力めるが、全然思想が違つてゐるから、絶へずお互にいがみ合つて、家庭の不和は彌増長する、此の時に當つて息子に嫁を貰ひ、或は娘に婿を取ると、親は家庭に生ずる自己の煩悶を、孫によつて消滅し少くとも輕減せんと先づ試みることゝなる。

そこで、早く孫産れかしと祈るものは、若夫婦でなくて、却つて其の親である、さて孫が産れると非常に嬉しがつて、下にも置かぬ有様となる、せめて孫がヨチ／＼獨り歩きする位いまで長生きがしたいと希望するやうになり、歩き出せば、せめて學校へ通ふ位いまで世に居たいと思ひ、學校へ行き初めると、嫁を貰ふ位いまで生

きて居たら、どんなに幸福だらうと、だん／＼慾望は延長される。

一人として、孫の顔を見るのは、先づ五十歳か、それ以上である、中には六十歳以上になつて初孫を見るものも少なくない、若い時分に充分働いてもうそろ／＼老期に入ると、何となく寂寞を感じるに至るのは人の常である、淋しさを感ずるやうになると、芝居にも行きたい、活動寫眞も見たい、お寺参りもしたいと云ふ心が自然に起るものである、と云つて若夫婦の手前や、近所隣りの外聞にも、そう度々物見遊山に出掛けるのは老人の身として濟まぬやうな氣もする、そこで何か一つの口實が要る、その口實の種にされるものが孫である、「孫が活動を見たがるので」とか、「孫に芝居を見せてやりたい爲めに」とか、頗る尤もらしい口實の下に、孫の手を執つて出かけるのが、おぢいさんやおばアさんの一慣用手段となつて居る、勿論若夫婦にしても、我が子たる孫を斯くまで庇ふて呉れると思ふから、腹の立たう道

理はなく、何れも大喜びで二つ返事、何事もおばアさん／＼で、再びおばアさんが家庭の中心人物たるかの觀を呈して来る、孫にとつてはがみ／＼叱り飛ばす両親よりも、萬事言ふことを聽いてくれるおばアさんの方が餘程よくなつて来る、それで祖母と孫との親善の度はますます／＼濃厚となるのである。

我が子が成長して、手に負へぬことゝなり



お婆さん三郎さん

親として権力を振ふところが六ヶしくなつたところへ孫が出来て、新に支配權を握ることが出来た祖母には云ふに

言はれぬ喜びがある、孫はおばアさんの云ふことなら大抵なことを聽く、そこで專制的態度を持つことが出来るのだから、おばアさんも大層氣持がよい。おばアさんは孫に對して獨占慾を満たすことが出来ると同時に、獨占主義の有り難味を知る

ことが出来るのだから、一にも孫、二にも孫、孫でなければ夜も日も明けぬやうな氣になつてしまうのである。

次におばアさんとして、新知識の吸収に孫が最も有要の人物であることも、孫と仲好しになる一原因である、五十六乃至七十もの高齡になると、自分の若い時とは大分に世の中が變つて居る、瀛關なしで走る電車が飛び出したり、機械が物と言ふ蓄音器が出来たり、鳥のやうに空中を飛び廻はる飛行機が現はれたり、見るもの聞くもの悉く驚嘆の種ならざるはない、しかし威嚴を保つ上に於て、あれも知らぬ、これも存せぬでは、估券が下がるから、之等に關すること、其の他いろ／＼の新知識を極く内幕に——と云ふよりも寧ろ質問的に、いや威壓的に——孫に聞く、孫は學校で習ひ立ての事柄を試験されるやうなつもりで、べら／＼と喋る、心の内で成るほど、感心しながら、試験官の態度でおばアさんは種々の新らしいことを孫から

教へられる、自尊心に強い子供時代のこと、て、孫はうまくおばアさんの質問に及第したのだから、鼻をうごめかして喜ぶ、斯くておばアさんと孫とは相互に至極都合よく出来上つてゐる、こんなことも孫が可愛くなり、孫の方からも慕ふやうになる一原因である。

老いては子供に還るとき云ふ語がある如く、年が行くに從つてだん／＼淋しくなつて子供のやうな氣になるのは、人間の通有性である、甘いものが好きになつたり、物見遊山に出かけたくなるのも、この子供心と云ふことが餘程手傳つてゐる、子供に還つた以上、玩具も欲しくなるに決つてゐる、と云つて年老いたお婆さんが、まさか人形や、おもちゃの電車や、自働車をいぢくり廻はして遊ぶわけには行かぬ、そこで自分の意のままになる孫を相手に遊ぶこと、なる、遊び友達を欲しがつてゐる孫にしても、おばアさんが快く遊んで呉れるから、これに越したことはなく、そ

れに普通の友達だと金銭まで出して遊び相手になつてくれるものはないが、お婆さんごくと、ときどき臍繰りと云ふものを出して、いろんなものを買つて呉れる、子供同士の遊びには無理言つて我儘を通そうとすると、頭の一つも殴られることもあるが、相手がお婆さんだとその心配はない、大抵のことなら、はい／＼と承知してくれる、無理を言つて若しその無理が通らぬと見て取ると、一つ駄々を捏ねると向ふの方から機嫌取りにかゝる、頗る興みし易いのは、お婆さんだと見て取つて子供は益々お婆さんの近づきとなる、これらもお婆さんと孫との仲の好い一原因である。孫を頭から軽蔑してかゝつてゐるお婆さんが、孫の制御の甚と容易なのに喜ぶと同時に、孫も子供心にお婆さんのいと興みし易いのに心から惚れてしまふ、つまり弱いもの同士の意氣投合だから、萬事が柔和で、萬一こた／＼が起つたにしてもどちらからか直に我を折つて出るのが、益々親善の基となる。

今一つは、お婆さんの自慢心を満足させることである、それが爲めに必要に迫られて、大に孫を可愛がることとなる、元來人と云ふるのは、長生きすると、何歳まで生きましたとか、この高齢で尙ほ壯者を凌ぐ概がありますとか云つて、大に自慢するものである、その証據に五十歳位までは、人から若く見られるのを非常に喜ぶのは人の癖である、五十歳とは嘘でせう、四十五六歳位いかと思つて居ました、など、云はれると、お世辞とは知りつゝ喜ぶ人の多いのは此の世の習慣とでも云ふ位いなものだ、ところが、六十以上になると高齢の方を喜ぶこととなる、お婆さんはお幾つですかと聞くと、もう七十になりましたと云つて、其の高齢を自慢する態度に出る、即ち七十になつてもこの通りだと、自己の健康體を見せつけると云ふ心持ちで人に接するやうになるのである、此の時に當つて孫があると頗る意の強い、そして都合のよいことがある。

どんなに若く見られても、孫の手を引いてゐる以上、六十かそれ以上に見てくれる、この位大きい孫があつて、しかも自分は此の通り壯健だと、口に云はずして人に見せつけるのが、お婆さんの自慢心である、この自慢心を社會に發表するには、どうしても孫の手を引いて歩くに限る、お婆さんに連れられて歩く孫は、道で又何か買つて貰へると云ふ希望がある、お婆さんの行く方へ唯々諾々として ついて行く、此の位い具合のよい、しかも面白くて楽しみなことはない。斯ふ考へるとお婆さんの欲望を満足せしめながら、孫にとつても亦非常に嬉しいことである、一舉兩得の仕業であるから、これが破壊されやう筈がなく、祖母と孫とは切つても切れぬ親しみの深いものとなる、祖母が孫を愛し、孫が祖母に懐く理由は此邊にもある。抑も人と云ふものは、人に面倒をかけるよりも、人の世話を焼く方に趣味の多いものである、少し有福になると、いろ／＼に人の面倒を見てやつて、人から親分と

呼ばれて敬はれる身分になつて得意然たる人も決して少くはない、しかし他人から親方と尊敬され、旦那様と敬意を拂はれるやうになるまでには相當の金銭も費はねばならぬ、そして相當の頭腦の所有者でないとい寸出来ぬ藝當である、ところが、別に大した錢も要らず、絶対権力を振り廻はし、且つ自己の欲望も充分に達することが出来るのは孫に對して、ある、おぢいさん、おばアさんと尊敬せられて見ると悪くはない、そこで人間の通有性たる人の面倒を見ると云ふ面白味も味ふことが出来る、茲に於て孫の有難味も自然に判つて、孫なくて何の己れが人間かなと云ふことゝなる。

いくら壯健な人と雖も、老年に及ぶと、氣力が衰へて生氣潑瀾と云ふやうなところがなくなる、凡て物には調和の必要なことを言を俟たないが、人に於ても調和と云ふことが第一必要條件の一になつて居る、氣力の衰微した老人に潑瀾たる生氣ある

子供を好くのは理の當然である、子供は何事も積極的であるに對して、老人は何事も消極的である、ポジティブに對してネガティブの必要なのが理の當然である以上、老人と子供と相寄つて、其所に一つの調和を見出すのに何の不思議もない、ところが老人に取つて如何に調和劑だからと云つて、他人の子供を自由自在に征服し自己の意に従はしめることは不可能である、それには頗る都合のよい自分の孫と云ふものがある、食事のことから、學校行きのことまで無料で面倒見ることが出来る、其の上氣力のない老身を寢床に横へる時、傍に寝かした孫は暖かい活氣を放射して老人の體を温める、斯くて老人と孫とは物理的見地よりして最も調和のよいものとされてゐる。

斯く觀察すると、中には頗る得手勝手な言を爲すものだ、孫と云ふものは先天的に可愛く出来てゐるものだと異論を挾む人が有るかも知れぬが、余の觀察の正確な態度である。

ることを立証する上に於て、一の例を挙げたいと思ふ、それは朝鮮人の孫に對する態度である。

余は嘗て京城に於て、孫のある朝鮮の一富豪の家庭に暫く滞在したことがある、現代の朝鮮人の多くは略日本の内地人同様の生活状態に這入つてゐるが、元來朝鮮と云ふ國は、非常に早婚の行はれる所である、男女が十歳そこ／＼で嫁に行つたり婿入りをしたりするところである、十七八歳に達すると、一かどの子の親と成り濟まして居る、従つて三十歳足らずで孫の顔を見ることがゝなる、此の時祖父母と孫との情的關係はどうであるかと云ふに、甚だ水臭いものである、我が子以上に邪魔物にし、我が子以上に無愛想な取扱ひを爲して居る、世に孫ほど嫌なものはないと云ふ有様である、全く日本人と反對の立場にある、これは日本と比較して祖父母と孫との年代が著しく相違するからである、之を以て見ても日本の祖父母が孫を愛し孫

が祖父母を敬慕する所以が奈邊にあるかを窺ふことが出来やうと思ふ。

日本と支那

歐米の新聞紙及び雜誌上に於て、近時頻々として傳へらるゝものは、白色人種の同盟である、而して白人同盟の語は、黄色人種に對する、一種重大なる意義あること言ふまでもない。

然して、一方に於て、彼等は、盛んに同族の結合を叫びながら、一方に於ては、猛烈に東洋の天地に喰ひ入らんと試みつゝある。米國が沿岸航海法を、比律賓に適用せんとし、英國がシンガポールを海軍根據地とするが如き、何れも皆然るものである。

支那に於て日本品粗惡の聲を大にするものは、支那國民自身にあらずして、實に

歐米人である、余は我が國の製品が、歐米のそれに比して遜色あることは、之れを否定するの勇なきも、彼等が事毎に日本品粗惡の名の下に、支那國民を惑はし、更に日支間の交渉に對して、窃かに干渉がましき行動に出で、排日を煽動して、遂に支那國民の歸するところを誤らしめつゝ、あるを思ひて憤慨に堪へぬものである、支那の商人が日本の製品を粗惡と貶しながら、或は英國のマークを押し、或は米國のレットルを貼付して、恰かも歐米の製品なるかの如く見せ掛けて、之れを販賣する手段は、その原因の奈邊に存するか、こは寧ろ言はずもがなである。

將來我等が開拓の地は支那である、支那を除いて他に之れあるなしと、暗に爪牙を研きつゝあるものは、歐米人である、近き過古の歴史に徴し、又現に支那に蟠る諸問題に就いて見るも、彼等に何等の誠意もない、唯彼等の私慾を満さんが爲め、甘言以て之に臨み、胸底深く奸策を逞しふしつゝある、支那國民の多くが、之れに

惑はされんとしつゝあるは、我が同種民族の爲め、眞に遺憾とするところである。支那に對して、誠心誠意、同情を有するものは我が國民である、支那發展の爲め東洋平和の爲め、最も忠實に其の行動を取りつゝあるものは、唯日本あるのみである。支那國民にして、若し日本の同情を得る必要なしとし、國際の情義に戻り、人類共存の理を覺らず、之れを侮蔑すること、ならば、支那の滅亡は期して待つべきものがある。

近時支那政府並に國民の態度は、遠交近疎策を事とする風がある、然れども、遠き親類よりも隣りの同情である、將來支那が、我が國を敵とするが利益か不利益かは、智者を待つて初めて知るべきことでない。

支那の國情に最も精通するものは我が日本である、支那國民はよく我が情義を解し、速かに善隣の修交に覺醒すべきである。

よし子さん

小學校を出て、今女學校の一年に通つてゐる好子さんは、お母さんに似て、背のすらりとした、色のくつきりと白い、鼻筋のよく通つた、目元の愛らしい、所謂明眸皓齒の少女である。あの娘さんは實に美しい、そして氣のやさしい方だと近所の褒めものになつてゐる。

或る日、此の好子さんのお父さんを、用があつて訪問した、この家庭では、好子さんを、よつちやん／＼と云つて可愛がつてゐる、たつた一人しかない令嬢のこと、て、人一倍の可愛がりやうで、他の見る眼も羨ましい程である。訪問したのは夕方だつた、勿論好子さんも両親の側に居た、邪氣のない好子さんの美貌は、いつ見ても麗はしくて尊い、其の仇氣ない姿は、いつまでもこのまゝにしておきたいものだ

と希つた。

好子さんのお父さんと云ふのは、大阪に於ける立派な紳士で、學問もあり、世故にも長けてゐる、ふとつ腹のところもあり、細かいところにも注意もすると云つた風の人である。假りに此の人をN氏と云つて置く、此のN氏と約三十分間ばかり話をして居ると、好子さんは横合ひから、『明日は學校の運動會なの、やつて頂戴ね！』と口を開いた、好子さんの顔には快樂の波が漂ふてゐる、お母さんも、『アラ運動會なの、何んだか學校から歸るなり、大變よつちやんが嬉しそうにしてゐると思つてゐたんですよ、何時に内を出るの……』此の時僕も二人に同じて、それや愉快です、どこへ行くんです、と一旦二人を振り向いて、又元の視線へ戻つて、N氏の顔を覗いた。

我子の運動會と聞き、N氏も嘸や嬉しいだらうと思つて居るに反して、聊か不安の面持ちである、おや變だと思つてゐる間に、N氏は早や二人の方に向いてゐる、折角だがお止め、運動會なんか行くものでない、とN氏は斯う云つた、好子さんの驚きはさることながら、お母さんの顔も心配氣に見へた、こうなつては僕だつて沈黙して居る譯に行かなくなつた。學校行きは皆運動會を楽しんでゐるのだから、そう云はないで、おやりになるがよいでせう、と好子さんの味方になつて、N氏の説伏に取り掛つた、すると、行くのなら行つてもよい、が併し、お辨當をお母さんに持つて貰つて一緒に行きなさい、と條件附の讓歩である、お母さんとなら厭やだと、今度は好子さんが承知せぬ、これも無理からぬことで、苟も女學校の生徒ともあらうものが、お守役に母の同伴は一寸氣不味いと思ふのも考へねばならぬ、そこで又僕は、あんなに云はれるのだから、一人でお上げになつては如何です、とN氏へ交渉の態度を取つた。

N氏は僕に、膝詰談判のやうな口調で、日々の新聞に報道されてある如く、何々海邊では運動會で二人溺死したとか、何々遠足會では三人轢死したとか、此の頃の運動會に死傷者は全く付きもの、如くである、斯んな危険な運動會へ大切な一人娘は遣れません、危険を知りつ、これに臨む愚はしたくない、となか／＼の權幕である、こゝなつては、お説御無理御尤もである、成るほどそう聞けばそうである、此頃の運動會は餘程危険である、一面命懸けのやうなところもある。

室内に陰鬱の氣は充滿した、いつまでもこのまゝにと希つた好子さんの美しい顔も不愉快氣である、幸にして伶俐な好子さんは、お父さんの言をよく辨へて、運動會行を中止すること、した、が僕の考へを以てすれば、事小なりとも多大の遺憾が伴はぬでもない。

實に平和を破るものは、現代社會の缺陷である、N氏の家庭に、たとへ少時たり

ども、此の問題の起き上るは、慥かに社會の罪である。N氏の宅を辭して歸途に着けば、空には星がキラ／＼と、恰も嘲けるかの如くに輝いて居る。

八方美人

八方美人ほど、世にいやなものはない、一寸つき合つた時など、如何にも氣持ちよく感ずれど、だん／＼飽きが來て、とても辛捧し切れなくなるものなり、八方美人に限り常に曖昧の言を弄し、兎角責任を避けんとするの風あり、随つて功あれば己に歸し、過あれば他に轉嫁せんとする横着心を有す。

概して八方美人は、度量大ならず、いつも小心翼翼々、つまらぬことに拘泥して失敗を招くこと多し、何れかと云へば、八方美人は小金を貯へるに成功するものなり、終生大を成すに至らず、もがき通して一生を送るものなり、八方美人は、或る點ま

では人の頭に立ち得るものなり、これ其の人が豪き故にあらず、かゝる人を祭り上げて置けば便利なるが爲めなり、八方美人は高等小使として一寸融通の利くものなり。

八方美人の行爲は、笑殺すべく、憫殺すべきこと往々あり、餘りに小策を弄すればなり、如何にも初めの程は、御尤もなりと人を感動せしむるも、追々窟が剝げ來りて、非常に其人の人格を傷けるものなり、こは殆んど病的なり、否常に小策を弄して我が目的達せりと蔭にて喜ぶが八方美人の常なり、大阪に某同業組合の組長に此人あり、一寸政治家らしい肌合を有し、一見好紳士の如くなれど、つき合つて行くに随つていやな感を有たせる人なり、面前に於ては、組長殿と人之を敬するも、蔭にて彼れは幫間なりと稱し、人彼れを侮辱す、彼の不徳の致すところなり、餘りに小策を回らす結果なり。嘗て或る議員選舉のありたる時の話なり、組長は某氏の

爲め參謀格の一人として各部の幹事一人々々に訓示して曰く、他の部内は既に我が手に歸せり、希くは汝の部内を速に我が手に歸せ、汝の部内にして我のものたらば當選確實なり、當落は汝の働きやう一つにありと、某幹事大に恐縮せり、然るに或る會合に於て、各幹事何れも同一の訓示を得たりと語り合ひぬ、小策は曝露されたり、餘りに馬鹿々々しいと又語り合ひたりと、この遣り方は一寸うまい手段なり、恐らく彼にとりては智慧の有り丈けを絞りたるつもりなるべし、然し彼の方法は之にて盡きたり、彼にして此上の手段ありとは思はれず、全く行き詰りの姿なり、誰れが聞きても成る程と感ずる丈けの策略が欲しきものなり、八方美人たる彼れには、到底出來ぬことなるべし。

電話に惚れる女

所用を兼ね、且つ二三の親友を訪問せんが爲め、上京したる時の話なり、日比谷公園の一角にて、珍らしくも一舊友と邂逅したり、互に久闊を舒して喜び合ひたり、既に正午時なれば、晝食を共にして、大に語らんと友に勧めらる、ま、一料亭に案内されぬ、亭主は洋行歸りとかにて、なか／＼のハイカラ男なり、随つて仲居の五六名、何れも皆ハイカラと稱して然るべき態度なり、初めてこゝに上りたる余の眼には、總てのもの異様に映じたるなり、こゝの仲居は、西洋のウエートレス（女給）と、仲居とを搦き混ぜたるかの如くに感じたり。

舊友と云ふは、此の料亭の馴染客と見え、誰彼れとなく、いと懇意に見受けたり、仲居共と、英語混りに、他愛もなく頻りに喋り合ひぬ。今宵は是非とも、君の旅宿

を訪れたし、所は何處と友は尋ねたり、余は靴の中に印刷せる旅館の名刺二三枚あるを取り出し、一枚を興へぬ、當時余の旅宿は木挽町の岡本旅館なりしなり、仲居の一人同伴せんと云ひ出しぬ、如何に舊友の知合ひとは云へ、仲居同伴は聊か恐縮なり、余にとりては多少の迷惑も伴ふ話しなり、茲に於て、余は大に逡巡せざるを得ざりき。斷然余は之を拒絶したり、但し拒絶と雖も、頗る圓滑に態よく之れを避けたるなり。

余が上京の目的を達して歸阪してより、約一ヶ月後のことなり、東京よりとて、一婦人が訪れ來りぬ。海老茶袴に靴を履き、頭髮は所謂當世のハイカラなり、一見紛ふ方なく女學生の風体なり、主人にと云ふに、誰れかの紹介なるべしと思ひ、余面接せり、婦人はさも心易さうに語り出しぬ。余に於て聊も心當りなし、よく／＼聞けば、某日東京にて、舊友と共に晝食をした、めたる料亭の仲居なり、先づ來阪

の意を糺しぬ、彼女曰く、大阪にて大に英語を勉強する考へなり、然るべくお世話をお頼み申す、とのことなり、余は彼女に言ひ聞かせたり、東京には相當の學校も數多し、態々大阪に下りて英語を學ぶにも及ばざるべし、殊に東京には親兄弟もあるとのことなり、疾く歸京するこそ得策なれど、彼女は之を肯かざりき、實はお宅に書生となり、研學したさに親にも無斷にて來阪せるなりと、余は力もなき癖に、人の面倒を見ることが大好きなり、家には常に四五の書生あり、皆の勉學を見て樂しめり、然れ共女書生は考へものと思ひたり、嘗て信書の整理にもと、學生上りの女を二人雇ひ入れたることあり、然るに男學生の中に混りて、女性の存在は、好結果を來さざることを認め居たり、此の故に余は彼女の希望を拒みたり、兎も角いろいろに言ひ聞かせて、歸京せしめたり。

それより二ヶ月ばかり後のことなり、曩に東京にて邂逅したる友人來阪して余を

訪れぬ、余は女の件につき、嘗てありしことを話したり、友人の曰く、君より旅館の名刺を貰ひたるとき、其の女は旅館の住所を、しきりと覗き込み居たり、四五日經て、又晝飯を認めに行きしとき、其の女は君の噂し居たり、電話の三本もある旅館に泊る人ならば、定めし富める方なるべしとて、電話の三本に甚く惚れ込み居たり、電話の爲め彼女は態々來阪までせしなるべしと、余之を聞き、呆然たらざるを得ざりき、輕卒と云へば餘りに輕卒なり、殆んど常識にて、判斷すべきにあらず、而して今の世、斯かる者多しとか、まことに浩嘆すべき哉。

黒田君の歐米留學を送る

郵船宮崎丸は、九月三十日、親友黒田鶴次君を乗せて、神戸を解纜す、歐洲に向はんとするなり、黒田君は岡山の出身なり、幼にして伶俐、學術殊に衆に秀ぶ、少

壯にして醫學に志し阪都に笈を負ひ、勤勉甚だ力めたり、業を卒へて醫學專門學校助教授たること久し、其の子弟を見ること、極めて懇切、終日孜孜と倦まず、師範の典型として推賞されぬ。

君、後ち神戸に赴き、病院に副長となりて、今日に及ぶ、君夙に海外遊學の志あり、遂に其の機を得て發す、君の得意思ふべきなり。余君を知ること久し、曩日君の雄圖を聞き、余大に賛同し、君の企てを壯とせり、將に發せんとするや、君一日余を訪ひ、會談す、而して君の旅程は、獨逸に二ケ年を費し、米國に一ケ年を學びて歸朝すべしと、由來君は知識該博、經驗豊富を以て聞え、且つ一般の信望甚だ深し、錦衣歸朝の曉に於て、更に君の爲め一層の光彩を放つものあらん。

君人となり、資性頗る溫良、嘗て人と爭論せず、友情極めて細やかなり。君獨語に通じ、英語を話す、君の洋行は眞に鬼に金棒と謂ふべし、君が三ケ年の留學は、

他の五年、十年の留學にも優るべし、君又洋書を能くし、音樂に秀づ、歐米の斯界は君を迎へて嬉々すべし、君の目的とするところ、勿論醫術の研究にありと雖、餘技の蘊奧を究むるに甚だ便なるべし、余や君を欽慕して止まず、離別に臨み愛惜の情轉た禁せざるものあり、然れども邦家の爲め、君の行を壯とし、之を祝福するに躊躇せざるべし、希くば身心共に健在なれ、一言以て君を送るの辭となさんとす。

日米に於ける現代印刷文化の濫觴

伊太利のロンブスが、亞米利加大陸を發見し、一四九二年の十月十二日、キャット島に上陸した以來、歐洲人の企業家と、好事者の心機を唆つて、米大陸に注目するものが、尠くなかつたが、何様航海術未だ幼稚なりし時代のこと、て、渡航を苦にし、俄かに渡米するものもなく、約一百年間は、彼地此地に少數の移民があつ

け、事業の蹉跌を來たしたりなどするを以て、今一息と云ふところにて、米大陸に手を染むるものなく、誤多々の裡に、早くも又百餘年を経過した、それでも此の百餘年間に、歐洲から米大陸へ移住した人口は、總て、百五十萬と稱せられ、主として、ボストン、ニューヨーク、ヒラデルヒヤ、費府が中心地であつた、當時にありては、今日の如く統計といふものがなく、正確には判らないが、一七一九年に、ハーマンモルと云ふ人の記述によると、ボストンは當時米國第一の大都市であつて、人口壹萬二千とあり、一七二六年に、ナザニエル・ユーリン船長の著書中にはボストン一萬八千、紐育六千、費府四千五百とある、これらを中心として、到る處に三百、五百、或は千と云ふ風に、移住民の部落が散在して居た。

偕て本木翁は、事實上我國に於ける活版印刷術の鼻祖であるが、其の以前にも活版印刷術が行はれて居た如く、ベンチャミン・フランクリンは亞米利加に於ける印

刷文化の始祖と仰がれて居る、フランクリンが印刷業に従事した以前に於ても、我々に過ぎなかつた。

一六〇七年、稍や大仕掛けの移民が、ゼームス河口の一島に上陸して、當時歐洲人の爲めに氣を吐きしも、土人（亞米利加インディアン）の爲めに、種々の迫害を受が國と等しく、勿論活版術はあつたのである。

即ち、歐洲から米大陸へ渡つて來た者の中に印刷業者もあつて、之等の人々は、適當の場所を見付けて、印刷業を開いて居た、其の最初の印刷業者と云はれて居るのは、ステイヴン・デーキと云ふ人で、彼れは當時米國に於て富有者と稱されて居たジース・グローバー僧正に傭はれ、アメリカ印度人の土語で、宗教に關する書籍や、其の他の物を印刷することを業として居た、デーキが印刷に従事したのは一六三五年からだと云はれて居るが、確かとした記録は存してない、一六四〇年にマサチュ

セッツ州のケンブリッジで印刷した竪六時に幅三吋四分の一の書籍の扉は、正しく彼の印刷したもので、1640の年代までも明白に記載されて居る。

一六五六年には、サミュエル・グリーンが印刷業を開始し、これ亦主として聖書印刷に従事して居た。一六六〇年に、英國からマーメデューク・ジョンソンなるものが、米國に移住したが、印刷に經驗を有して居た爲めに、エリオットといふ者に頼まれて、土語の聖書印刷に従事すること、なつた。

是等の人々は、何れもマサチユセッツ州の植民地に於て、印刷業に従事したもので、ばかりで、悉くケンブリッジに居住してゐたのである。

米國の古都ボストン市に於ける、最初の印刷業者と云はれて居るのは、ジョン・フォスター、サミュエル・シウォール、ジェームス・グレン、サミュエル・グリーン、リチャード・ピアス、ベンジャミン・ハリス、バーンローム・グリーン等の諸氏であ

る、其の後右の内ベンジャミン・ハリスの外は、いろいろの事業に轉じて、印刷業を繼續するものはなかつた。

一六九〇年、ベンジャミン・ハリスは一月一回以上といふ振れ込みで、『ニュー・レター』と稱する新聞紙を創刊した、之れ米國に於ける新聞紙の濫觴である。次いで一七〇四年、『ボストン・ニュー・レター』が週刊新聞紙として、バートローム・グリーンによりて創刊され、一七二五年ウキリアム・ブラットフォードは紐育に『ニューヨーク・ガゼット』を創刊して同市に於ける、新聞紙の魁をなした。

斯の如く、各方面に印刷事業は起つたが、活字の鑄造に、組版に、印刷に幼稚な時代であつた爲め、其の發達は頗る遅々たるもので、印刷工業の體を成さず、所謂お慰みの事業てふ觀を呈して居たことは、我が國に於ける本木翁以前の狀態と比較して、稍や勝るところありとしても、大差はなかつたものである、ところが、ペ

ンジャミン・フランクリンの出現によりて、米國に於ける印刷術は、頓に發達し、遂に今日の如く印刷萬能の時代を産み出す基を築いたのであつた。

日本は米國に比し、其の歴史は非常に古い、米國は一七七七年十一月、英軍を破つたワシントンがニュー・ハムシャー、マサチューセツツ、紐育、ニュー・ジャーシー、ペンシルバニア、デラウエア、メリーランド、バージニア、ロード・アイランド、コネチカット、サウス・カロライナ、ノース・カロライナ、ジョージアの十三州を永久に聯合して、國名を亞米利加合衆國と定めて以來今日まで、漸くにして百四十六年にかならぬ、假りにコロンブスが亞米利加を發見した一四九三年から起算しても、米國は四百三十一年の歴史を有するに過ぎぬ。

之に反して、日本は神武天皇が大和の橿原に御即位あらせられし以來、今日では既に二千五百八十三年を閲し、若し神代をも算入するならば三千年の遠き歴史を有

して居る、斯く古き歴史を有する我が國には、何物にも、又何事にも、随分古い歴史が存して居る、印刷物の如きも、世界最古のものと云はる、千有餘年前の遺物が存して居るが、此所に云ふ現代印刷文化とは、其の出發點を異にし、其の系統を異にして居る故に、此等に關しては云爲するを避くること、し、現代印刷文化に餘程近寄つて居る活字版のことから研究して見るに、我が國の寛治活字なるものは、寛治元年の製造と傳へられ、寛治元年は西曆一二四七年に相當するから、今を去ること實に六百七十六年の昔のものである、此の外圓光寺活字、叡山活字、高野活字等何れも古いものである、殊に慶長年間、豊臣秀吉が、朝鮮を征伐した當時、朝鮮から持ち歸つた、朝鮮活字に源を發して、我が國の活字印刷は俄かに時めいて來たかの觀がある、即ち活字版として慶長四年（一五九九年）には『元亨釋書』十冊の刊行あり、慶長五年以來『徒然草』、『五家正贊』、『雲門匡眞禪師廣錄』を初め數十種の

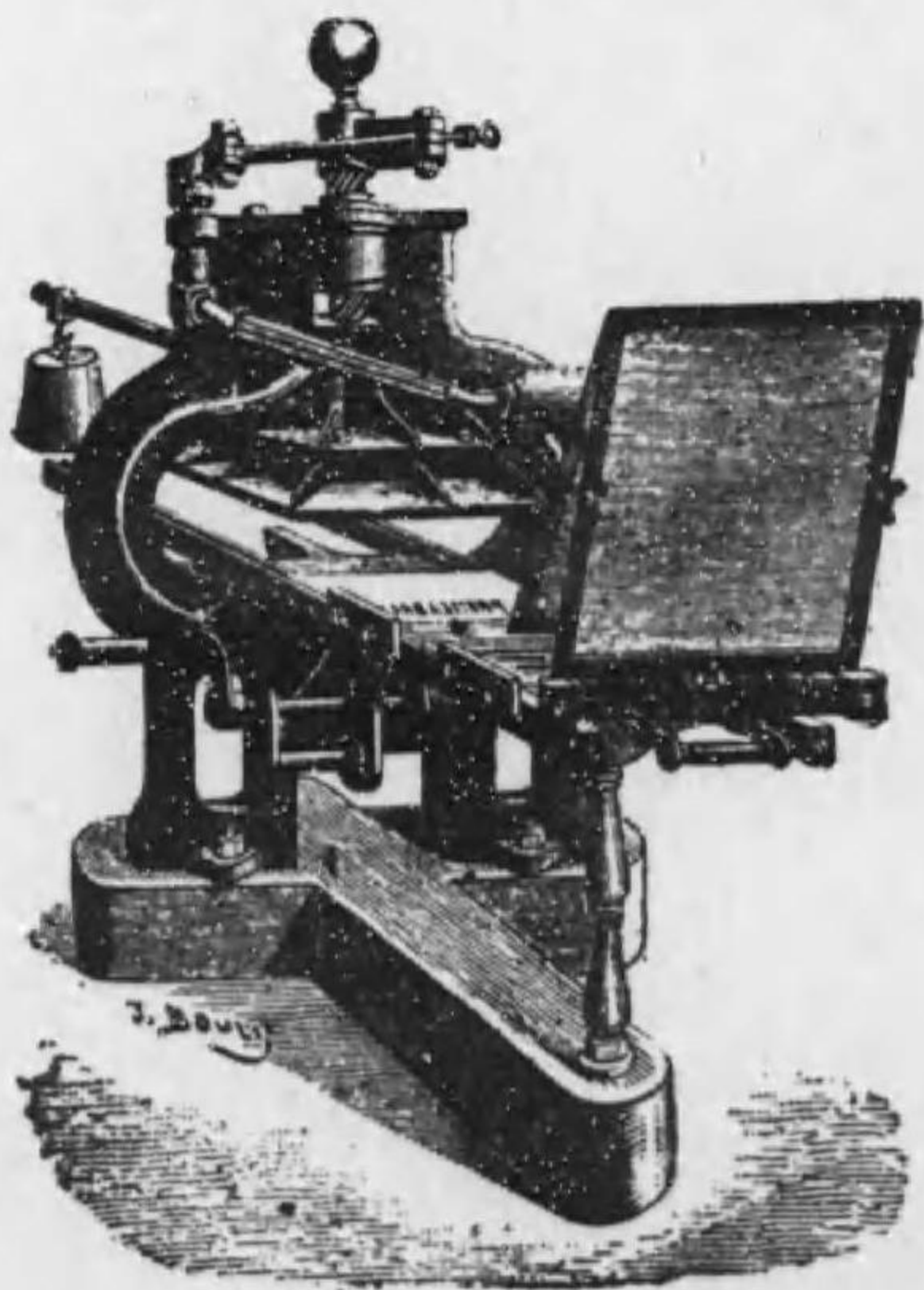
大冊ものが刊行されて居る、更に下つて寛政八年には『東西韻會』十三卷の活版印刷が完成し、弘化三年には『群書治要』が活版印刷に附せられて居るが、大體に於て何れも、今日の活版術の如き、組織立つた器用のものでなく、其の作業は頗る迂遠且つ幼稚なものであつたことは疑ひない。

嘉永二年、和蘭政府より我が徳川幕府にスタンホープ式ハンド印刷機一臺、歐文活字數種、込物、罫線、輪廓、花形、インテル等を献上し、我が國に於て現代式印刷術に多大の刺戟を與へたに拘はらず、俄かに發展の曙光も見えなかつたが、長崎の通詞役であつた、本木昌造氏によりて、大に發達の機運を得、今日我が國に於ける印刷事業の盛大を見るの根柢を築いたのであつた。

之を要するに、米國にありては、今日と同じやうな系統にある、印刷術の幼稚な時代に其の源を發して今日の隆盛を致し、我が國に於ては今日の印刷術とは異つた

系統にある印刷術の工風と發達に努力した爲めに、長き年代を経過したに拘らず充分の發達を見ることなく不相變の状態にあつたものが、泰西の現代式印刷術の優れるを知り、之を輸入習得することによつて、現今の發達を見るに至つたものである。

機刷印ドンハ式プーホンダス



和蘭政府
より我が
徳川幕府
に献上し
たもの

中田熊次氏と中田守雄氏

西岡主任と木村支配人

近來我が國の工業は、發達の跡著しきものがある、殊に歐洲大亂後に於て、工業と云ふ工業は誠に目覺ましい發展を遂げた、就中特に發展を示したものは印刷工業であらう。印刷は文化の先驅と云ひ、商工業發展の魁と稱して居るが、我が國にありては、歐米諸國と異り、印刷工業は、他の工業に比し、遅々として振はず、甚だ後れて居たかの觀があつた、然るに近代に及びて、印刷工業は、實に偉大なる發達を示し、我國有數の大工業の一として數へらるゝの域に到達したことは、文運の上から見ても、亦商工業の將來にとりても、眞に慶賀に堪へぬ次第である。凡そ何業を問はず、社會に地位を占めるに至るには、之に關聯する中心人物の出

づるを常とする、國家の政治は、政治に關する中心人物があつて初めて統一せられ、政治が發達するもので、此の中心人物、即ち言を換へて云へば、其道の偉人が現れて初めて事業は大成するものである、此点に於て印刷工業界にも所謂中心人物がある、而して吾人は、印刷工業界の偉人として、中田熊次氏と中田守雄氏を擧げねばならぬ。

中田熊次氏は印刷業者であり、中田守雄氏は印刷材料業者である、一方は直接印刷物の需要家に關係を有し、他は印刷業者と直接の關係を保つて、印刷物の需要家には間接の關係を有するものである、兩氏共今や印刷界の二大重鎮として社會の視聽を集めて居る。此の二人者は共に中田姓なるを以て、或は兄弟と云ひ、或は親戚と思つて居るものも尠くないやうであるが、全然何等の關係もない、熊次氏は讃岐の産で、守雄氏は伊豫を故郷とす、共に少壯阪都に出で、獨力以て今日の大を成し

高台に登りて
たのである。

七一

斯く守雄氏と、熊次氏とが、何れも四國の産であるのも一奇であるが、成功の經歷及び性格に至るまで、殆んど同一のタイプであることは、更に奇とすべきである、守雄氏は元來醫を業とし、門前市を爲すの殷盛を極めたが、印刷材料たるローラーの不完全なるを見て醫を廢して大成し、熊次氏は畫伯として尊敬を受けて居たが、印刷事業の不振を嘆き、彩管を投じて成功した人である。醫師と云ひ、畫伯と云ふ、共に工業界に乗り出すべき關係は極めて薄いやうであるが、現に何れも工業界の花形として活躍しつゝ、ある有様は、一種の不思議であらねばならぬ。

然し、両氏の經歷を精探するに及んで、此の不思議は忽ち氷解さるゝのである、守雄氏は曩に日常手にする新聞印刷の不鮮明なるを見て、之を研究し、遂に完全なる着肉ローラーを發明し、大阪朝日新聞に採用せられて以來、全國の新聞社は勿論、

活版印刷業者の悉くがローラーの供給を氏に仰ぐこととなり、遂に印刷材料界の巨人として天下に覇を唱ふるに至つた、熊次氏は將來平版印刷術の必ず發展するを豫想し、着々として其の準備を進めた、果せるかな氏の先見は誤らなかつた、殊に氏は印刷に寫眞術應用の時代來るべきを確信し、此方面に多大の注意を怠らなかつた、今や氏が印刷王國を形成するに至つたのは、其の不斷の努力と先見の明とが然らしめたことを首肯することが出来る。

熊次氏は默考寡言の人であり、守雄氏も沈思熟慮の人である、此の点に於ては兩者其の軌を一にして居る、然れども一度口を開けば滔々數萬言、事理自ら明晰、何人の追従をも許さぬ概がある、熊次氏は府會議員の職にあり、守雄氏は營業稅調査委員の椅子を占めて居る、前者は飽迄直情徑行の人であり、後者は志操最も強健を以て知られて居る、然かも誠心誠意業界の爲めに盡くし、國民の爲めに努力を吝ま

ざる精神に至りては、両氏の間何の逕庭があらう。

熊次氏は中田印刷所を經營する外、精版印刷株式會社の社長として、多年に亘り拮据經營の任に當り、嘗てはアルモ印刷會社を買収合同し、最近に於て市田オフセツト印刷を併合して、我國最大の印刷會社たる、精版會社を出現せしめた人である、尙關係諸會社の重役を兼ね、支那上海に一大工場を有して、斯界の爲め異國に萬丈の氣を吐いて居る、這次關東の大震災は、印刷局を初め帝都の印刷事業をして大半其作業を不能ならしめた、茲に於て政府は精版會社に托するに各種の印刷を以てし、其の數量何十億、最も敏捷に且つ確實に、其の使命を全ふし得たのは、一に氏が非凡の手腕によると稱せらる、氏は業務に頗る忠實、事に當つて裁斷流る、が如く、且つ部下を綜攬するに天稟の才能を有して居る、資性甚だ温厚篤實、斯界より推されて大阪印刷同盟會長となり、斯業の向上と發展に多大の貢獻を齎したのも怪しむ

に足らぬ。

ローラーの製造より出發した守雄氏は、爾來印刷機械を初め、有らゆる印刷材料の製造販賣を以て、躍進又躍進、大阪に宏大なる三工場を有する外、京都に、東京に、各專屬工場を起し、内地は勿論、支那南洋印度を初め露國にまで廣く業務を擴張し、今や歐米に向つて販路を開拓中である、其の準備の整然たる、眞に旗鼓堂々たるの觀がある、由來守雄氏は彌縫を忌むこと蛇蝎の如く、隨つて氏の行動に一点の胡魔化し主義を見ることが出事ない、而して氏は克く人の説に耳を傾ける、學者然たる態度を持って、默然と人の議論を聞いて居り、聊かたりとも隙あれば、微笑して『それはいけませんまい』と云つた調子で反駁する、しかも其反駁するところ總て急所を突き、誰れしも之れに對して異論を挿む餘地がない、以て氏の人と爲りを窺ふことが出来る。

四十五は鼻垂小僧、と云ふ米國人の意氣を以てすれば、両氏共漸く小僧上りの所である、守雄氏は年齒五十九歳に過ぎず、熊次氏は五十三歳の働き盛りである。暫く吾人をして、家庭に於ける両氏を語らしめよ、元來事業に大成功を爲すものは、必らず其の家庭は平和である、両氏共夫人との間は伉儷極めて睦じく、琴瑟相和し、一家團樂の樂しみがある、和氣霽々、春風駘蕩の如しとは、蓋し両氏の家庭を指すものであらう、両氏共に子福者である、令息は何れも高等の教育を修めたもの、みである、而して何れも早稲田大學に業を卒へたのは、これ亦一種の奇縁と稱すべきである。

股肱の臣として、守雄氏に西岡音次郎氏があり、熊次氏に木村壽茂氏がある、西岡氏は守雄氏が經營する中田瑞穂堂の主任で、木村氏は熊次氏の經營する中田印刷所の支配人である。西岡氏は實に經營上の大偉才である、守雄氏を補け、其の營業を

統轄して、一糸をも紊れしめない。事業を見るに極めて精細、而かも大局を忘れず事を處するに甚だ敏捷明快である、曩に東都の震災に當りては、全力を擧げて、業界の救済に従事し、且つ犠牲的廉價を以て材料の供給を斷行したるが如き、斯界の一美談として話柄に上つて居る、其の處置頗る同情に富み、且つ疾風迅雷的である。若し夫れ木村氏に至つては忠實無垢の人、然かも數理に長じ、かつ高潔の士である、情實を排して、事理明確、之れ氏が今日の信望を致したる所以である、一種用心深き所あると共に、また頗る放膽なる素質を具へて居る、克く之等を調節按排して進むところに氏の面目躍如たるものがある、西岡氏の豪壯洒脱に對して、木村氏は高雅温籍、事に當りて水火をも辭せぬのが氏の氣象である、蓋し中田家の柱石として、眞に適材適所たるを失はぬ。

惟ふに印刷工業は、將來益々進歩發達をなすべき運命にある、智識の糧は、之れ

悉く印刷によりて注入せられ、商工業の發展も亦印刷物を通して實現さる、場合が最も多い、殊に平和戰の武器として、印刷物の利用は、一日も之を忽にするには出來ない、此の間に處して、兩中田氏の存在は、誠に吾人の意を強ふするに足るものがある、之れ吾人が切に兩氏の健在を祈る所以である、乞ふ、兩氏たるもの幸に邦家の爲め自愛自重以て益々奮闘されんことを。

A B C 訓

A_ア 榮達を望むものは勤勞を厭はず。
B_イ 敏捷に働けば辛必ず來る。
C_ウ 眞のニコ／＼には邪念なし。
D_エ 丁稚を侮るものは主人たることを得ず。

E_イ 一滴の水も、一粒の米も粗末にすべからず。
F_エ 繪筆取る前に先づ色彩の研究。
G_ウ 人生の競争には須らく勇敢なれ。
H_エ 叡智時に愚鈍の結果を見ることあり。
I_イ 愛に生くるより幸福なるはなし。
J_ウ 贅澤と橋慢は身を破る基なり。
K_エ 經驗は金錢にて購ひ難し。
L_エ 得ることのみを知る者は失ふこと多し。
M_エ 笑む者必ず心美しきにあらず、腹中に荆棘あるを知れ。
N_エ 椽の下の舞なりとて放棄すべからず、陰德臆て廻り來る。
O_エ 應接に當りては、何人にも叮嚀なるべし。

A B C 訓

P ^{ピラミッド} 金字塔は一朝にして成らず。

Q ^{キエ} 窮餘の神頼みは効驗なし。

R ^{アール} 有るに任せて浪費するは至愆なり。

S ^{エス} 繪姿の美は當てにならず。

T ^テ 手強く困難に耐ゆる者は成功す。

U ^{ユー} 猶豫なく斷行せよ、優柔不斷は機を逸す。

V ^{ヴィ} 撫育の恩を忘れる者は終生大成せず。

W ^{ダブリユ} 駄振るほど見悪きはなく、惻口振るほど聞苦しきはなし。

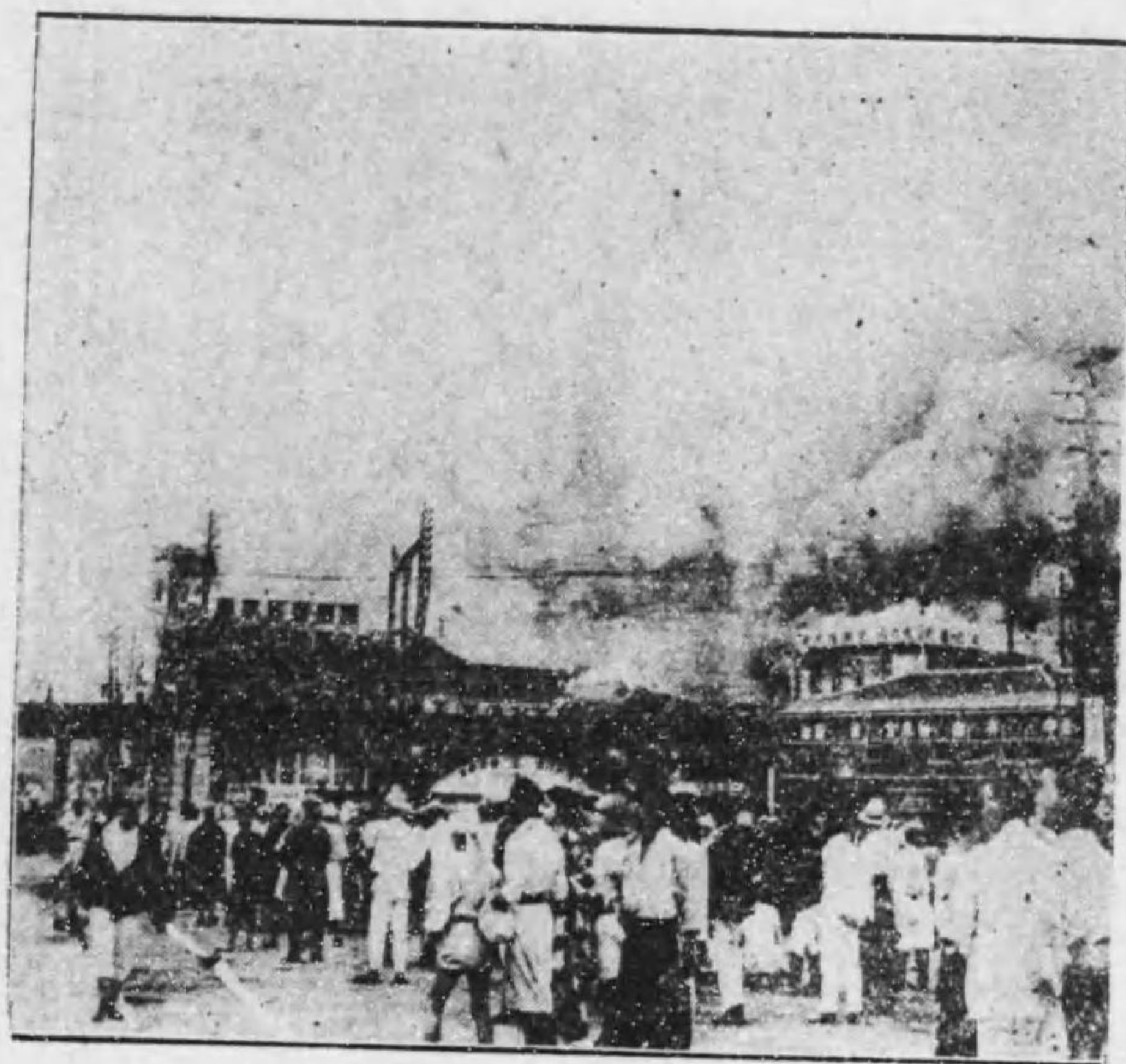
X ^{エックス} 益するに敏なるものは損して撓けず。

Y ^{ワイ} 賄賂の金は身に附かず。

Z ^{ズイ} 隨喜の涙は虚偽を装ふことあり。

大正の大震災

關東に大地震があつてから、約二十日ばかり経つた後のことである、突然訪れて来た一人の男がある、初秋とは云へ、可なり肌寒い日であつた、白地の浴衣一枚で、しかもところ／＼裂けて居る、帯も帯らしくは見へぬ、甚だ以て見すばらしい風態である、誰かと思れば西村二郎君である、西村君とは嘗て東京の下宿屋生活時代からの舊友である——君は帝大を出ると直ぐ拔擢されて京城のソール・プレス (Seoul Press) に記者として赴任した、内地に戻つてからは、ジャパン・アドバタイザー (Japan Advertiser) の記者となり、また通譯として警視廳に職を奉じて居たこともある、一高時代の秀才で、頭腦の明晰なことには稀である、此頃では英佛語の翻譯や其他の著述に従事して居た——余は西村君であることを知つたと同時に、罹災者の一人で



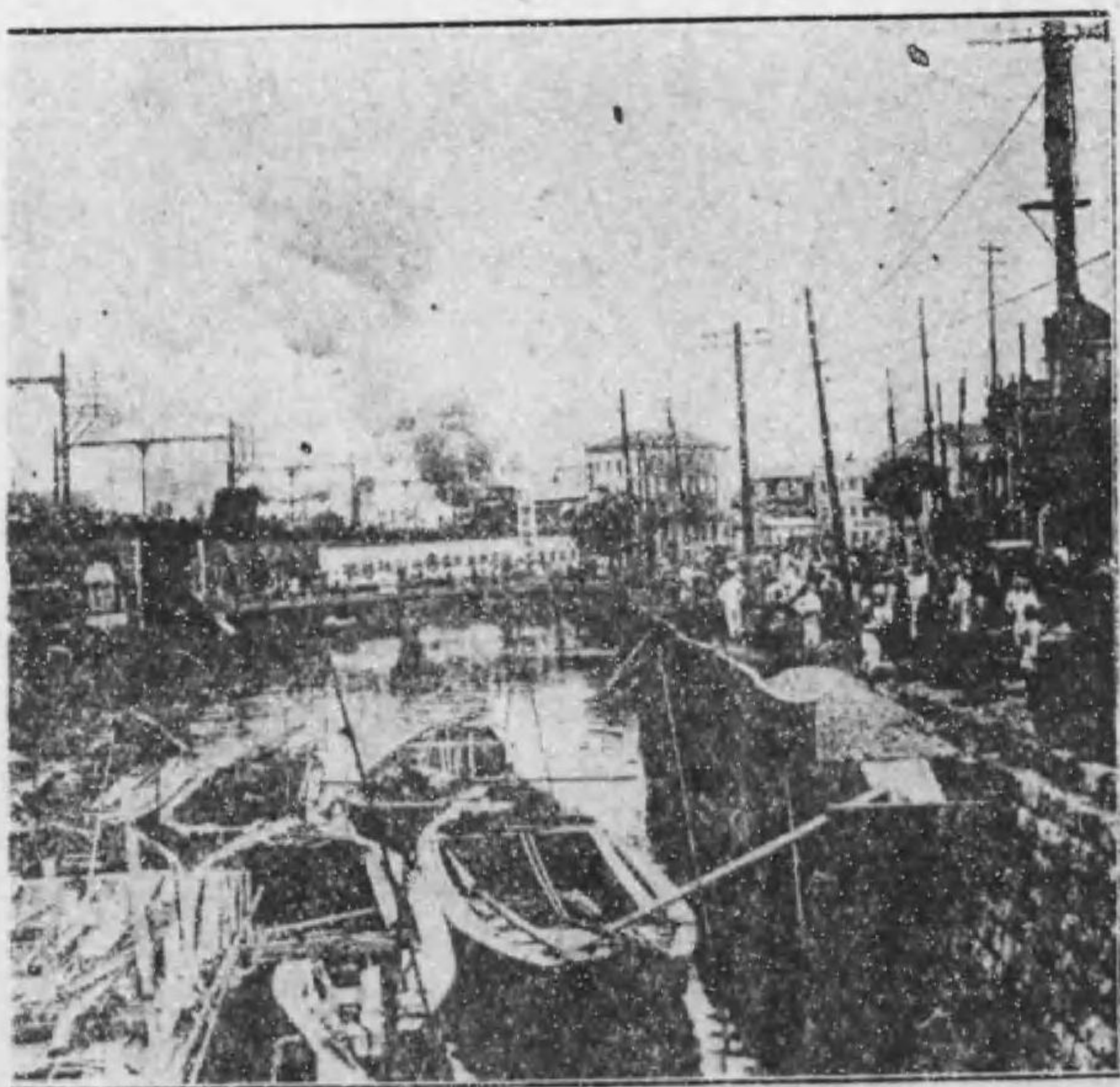
数寄屋橋附近の猛焔

あることを直覺的に感知することが出来た、友あり遠方より來る又樂しからずや、であるが、此時ばかりは、樂しいと云ふよりも、寧ろ同情が先に立つた、其の姿を一見して、實に氣の毒だと思ふより他に何ものをも考へる餘地がなかつた。

茶を出し、菓子を侷めて、いろいろと當時の模様を聞いた、地方に出たとして仕方がないから、是非東京に踏み止りたいと思つて居たから地震後

も色々に工風したが、どうにもならないのでどう／＼來阪した、と前提して、西村君は大震災に就いて、ぼつり／＼と語り初めた……

二百十日を明日に控へた九月一日（土曜日）は朝から妙に生暖かく、風も可なり吹いて居た、八時過ぎと思ふ頃、一天俄かにかき曇つて忽ち豪雨となつた、雨は約一時間ほど降つてから、太陽は煌々と輝いた、しかし非常に蒸し暑い嫌々な日であつた、



穴に狂ふ群衆を

或雜誌社から急がれて居た原稿が、今少しで出来上るので、氣は進まないが、赤坂溜池の自宅で兎も角机に向つた、すると急に家が揺れ出した、机上の花瓶が倒れ、置計時が顛げ出す有様に驚いて、柱に寄らうかと思ふ間もなく、又も大きく一揺り、メリ／＼と云ふ音を聞いた、それと同時に、四邊の壁がポタ／＼と崩れか、つた、粉塵舞上つて屋内は濛々咫尺を辨せず、死力を盡して見たが、逃口すらも判らない、恰かも盲人の手探りと云ふ恰好である、殆んど無意識のまま、素足で街路に飛び出した、此の刹那に家は潰れてしまつた、實に間一髪を容れぬ、きはごい所だつた、と淋しく笑つて西村君は語を續けた。

街路はもう避難者で埋まつて居る、あの頑丈な東伏見宮邸の高い石垣が、滅茶々に崩れて居る、向ふ側の米國大使館は、怒濤に翻弄される小舟の如くに揺れて居る、震動が激しくて、とても直立して居られないで、避難者は皆街路に四ツ這ひとな



軸中の都帝たし化さ土焦

つて居る、地割れを怖れて、成るべく身体の面積を廣くし、四肢を出來得る限り伸ばして居る、其の慘憺たる光景は、體驗者にあらざれば、到底想像も及ばぬことである。

一時間ほどして、もう強震はなくなつたらしいので、近くの靈南坂へ登つて見る、日比谷の交叉点の一角は既に焼失し、火は警視廳へ移つて居る、大手町の内務省大藏省の邊でも焼けつ、あるのか、紅蓮の焰は渦を巻いて天を焦して居る、益々強くなる風の爲め四方八方から火災が起つて居る、遠く下谷、本所、深川、淺草方面は煙でよく見えないが、京橋、日本橋、神田の諸區は到る處に大火が起つて居ることが判つた、最初の強震と共に水道も電氣も止つてしまつた、市中の電車は停つた所でそのまゝ、立往生、日は暮れた、寝ねるに家なく、食するに何物もない、朝から喰はずで、腹は空つてゐるが、當時そんなどころでない、漸く麻布の親友を訪れて一



宮城前の大混雑

泊を乞ふた、其夜は電燈なき爲め東京市中は眞の暗黒化され鬼哭愁々として人に迫るを覺えた。

本所の被服廠跡で三萬五千の人が焼死したことが、二日朝になつて初めて判つた、いつもなら、五分と経たぬ間に報道される事柄が、しかも同じ東京市内で、此の一大悲惨事が翌日になつて初めて知れたのであつた、被服廠跡は、人口稠密せる本所にある故、そら地震と云ふが早いのか、

われ一番にと附近の人が皆避難したのである、聞けば一時は十五萬からの人が詰め掛けてゐたと云ふ、ところが周囲が火の海と化したので、多くは此處を逃れたが、三萬五千の人達は重なり合つて焼死を遂げたのだ、死屍累々酸鼻の極、實に有史以來の大惨事であるとして、西村君は眼を濕ほした。此日深川、本所に海嘯が起り、隅田川は氾濫して流失家屋多數に上つた、水攻め火攻の悲惨なる状況の中に人は食を漁り、水を求めて彷徨するといふ、生地獄その儘の慘狀で、饑餓に瀕するもの二十餘萬に達した。

三日の午前八時になつて、市中の火災は漸く鎮まつたが、夕刻頃立派な多くの建物が焼失したことを知つた、其の重なるものは、高輪の東宮御所を初めとし、帝室林野局、内務省、大藏省、印刷局、稅務監督局、警視廳、帝國大學、商科大學、砲兵工廠、目黒火藥庫、帝國劇場であつて、更に東京日日と報知新聞を除く新聞社は悉く焼失した、



像の瀬廣神軍る残った

畏多いことながら、宮城内にも火災が起り、學習院も一部焼けた、其の他各學校、銀行、會社、商店等で、焼失した家屋戸數及び人口は此の通りだと、西村君は手帳に書附けた公報を示した、それによると、

區名	焼失倒潰家屋戸數	罹災者數
麴町	二、七九二	一二、五六〇
神田	四五、九五二	一六二、九八九
日本橋	二六、〇七七	一五二、三二六
京橋	五〇、四七九	一五八、四八〇
芝	一六、二七八	七二、四二九
赤坂	三、八五一	一六、七八七
四谷	一、六〇四	六、七九四

小石川	一、三六五	四、四三二
本郷	八、七九〇	三〇、〇三五
下谷	四八、〇七〇	一七一、九八六
淺草	八一、八七二	二八四、二九〇
本所	七四、五八八	二七七、四五九
深川	四九、〇四七	一九七、〇七八
合計	四一一、〇二五	一、五四七、三五二

右の如くで、東京市の戸數は六十三萬八千四百六十五戸、人口二百四十七萬七千五百三人であるから、之を百分率で示すと、焼失戸數並に罹災者の數は、何れも六割四分に當る譯である。

手帳を懐に引ッ込めて、西村君は更に話を續けた……三日になつてから、不逞

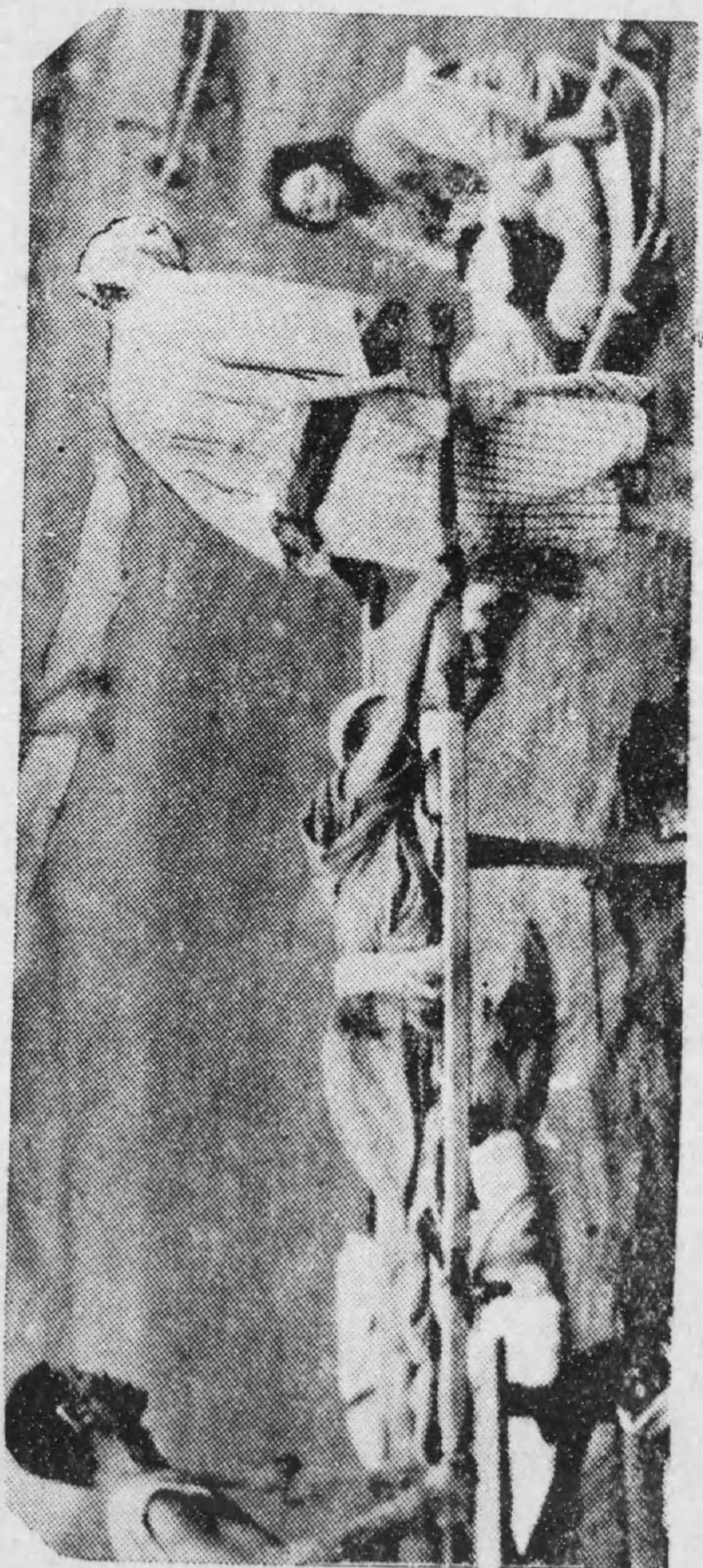


火の煙に合掌

九二
の徒が市中を徘徊して居る、
と云ふ噂がバツと傳はつた、
所謂一犬虚に吠へて、萬犬其
實を傳へて、噂は噂を産み、何
れも戦々兢兢の態である、何
處では不逞團の包圍を受け何
十人塵殺されたとか、或は爆
弾を以て放火し廻る徒がある
とか、なか／＼の騒ぎである、
男子は夜毎に日本刀や、短銃
又は竹鎗を携へて戸毎を警戒

すると云ふ有様である、——丁度三日の午後十一時頃であつた、親友の安危に就いて是非見舞ひたいと思ひ、暗を衝いて六本木の方に出た、警察のつい側^{そば}まで來ると、大變な人だかりである、やツつけろ、殺してしまへと罵つて居る、見ると一人の巡查が手を振り／＼多くの人々を制止して居る、すると群衆の中の一人が懷中電燈を取ら出して包圍されて居る者の顔を照した、此奴こそ本物の不逞漢だ、やツつけろと叫んだ、巡查は必死に制して居る、グザツと音がしたかと思ふと忽ち不逞漢と稱される者の臍の上と思ふ處に、竹鎗の穂先が現はれた、ばったり倒れると群衆は散つてしまつた、誰れか背後から突き刺したものと見える、思ふに、こんなことが到るところに演じられたらしい。これ以來夜の歩行は危険千萬と考へ、一步も出なかつた。

四日になると、大阪地方から糧食其他救助品が續々到着しつゝ、あると云ふ報を得

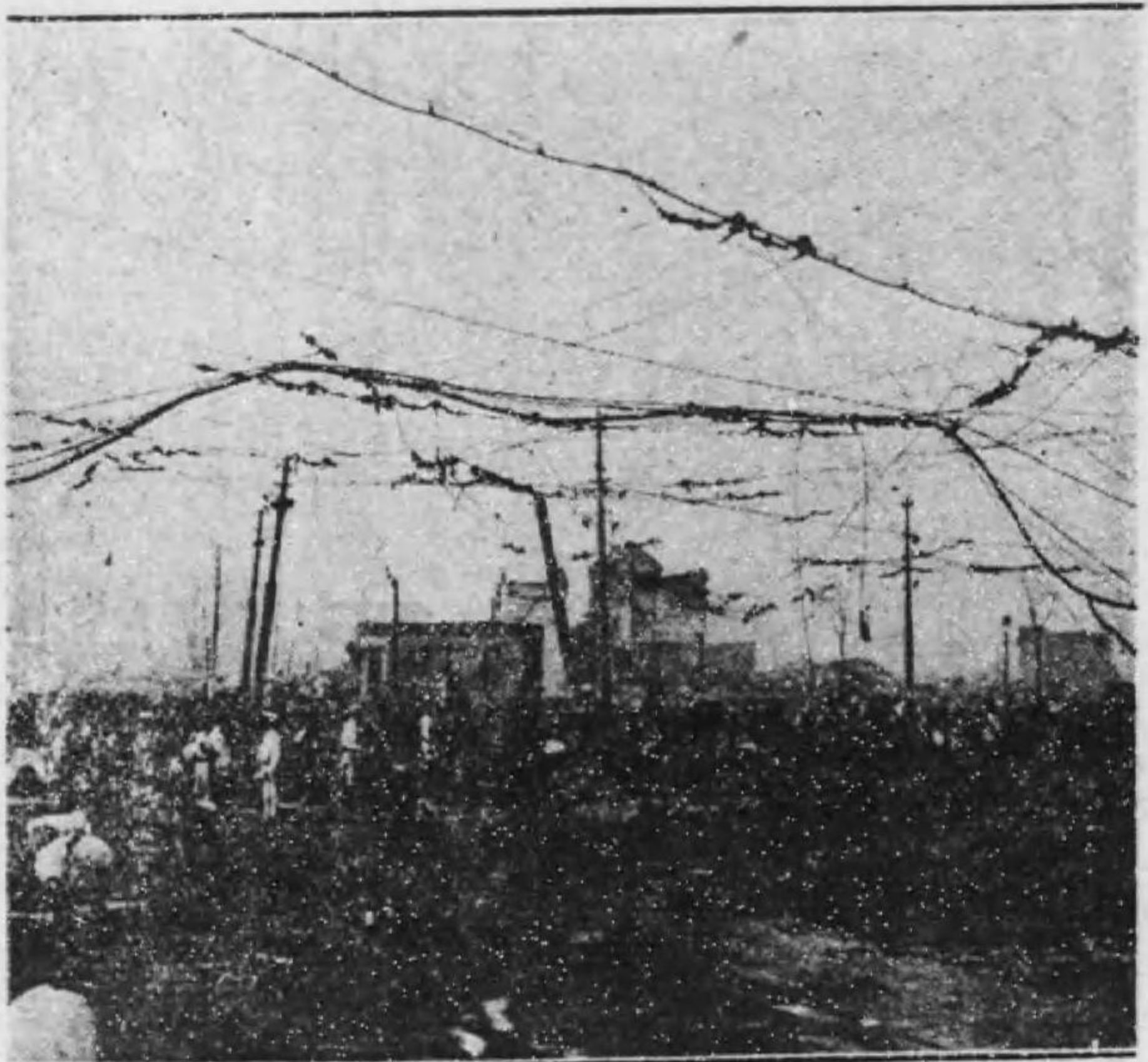


煙突の上へ登る

た、何れも聊か安堵したもの、いつ又も強烈な餘震が来るかも知れぬといふので、生きた心地とて更にならない、殆んど總ての市民は屋外生活をして居る、何しろ一日の正午から六日の午前六時までの餘震数は千三百九十回に上り、其内一日から二日にかけて三百六十五回、三日には二百八十九回、四日には百七十三回、五日には百四十八回、六日には六十三回といふ風に餘震が續いたものだから、何どころでなく、汽車の屋根に上り、汽鐘車に取り縋つてでも一刻も早く恐い東京を脱出しよう云ふ一般の考へは無理からぬことである。世に安政の大地震とか、尾濃の大地震とかを喧しく云つてゐるが、記録に徴するに、關東の大地震に比しては誠に小事である、安政の大地震と云ふのは安政二年十月二日夜十時に江戸に起つたもので、市民の死んだ数は三千八百九十五人、武家に關する分を合つして約七千人である、地震後深川、本所、淺草、吉原等三十餘ヶ所より火事が起り、翌午前十時鎮火した、焼失面積は十

四丁四方あつた、これとて大災害には相違ないが、大正の大地震に比しては惨害の程度は遙に低い、尾濃の大地震は、明治二十四年十月二十八日の出来事で、明治年間の最大地震と稱され、劇震を感じたのは美濃、尾張、越前、加賀、近江及び伊勢の一部であつて、家屋の倒壊したものの十四萬二千百餘、死者七千二百七十三人であつた、以上の二大震災に對して、大正の大地震は、東京を除いても左の災害を蒙つた。

地名	焼失倒潰家屋戸數	罹災者數
横濱	六九、三九八	六四、八〇八
神奈川	一一五、八四六	二六、八二六
静岡	一、八五五	一、三八一
千葉	五五、五四九	二、八九七
埼玉	五、七六三	五、八二二



大正の大震災

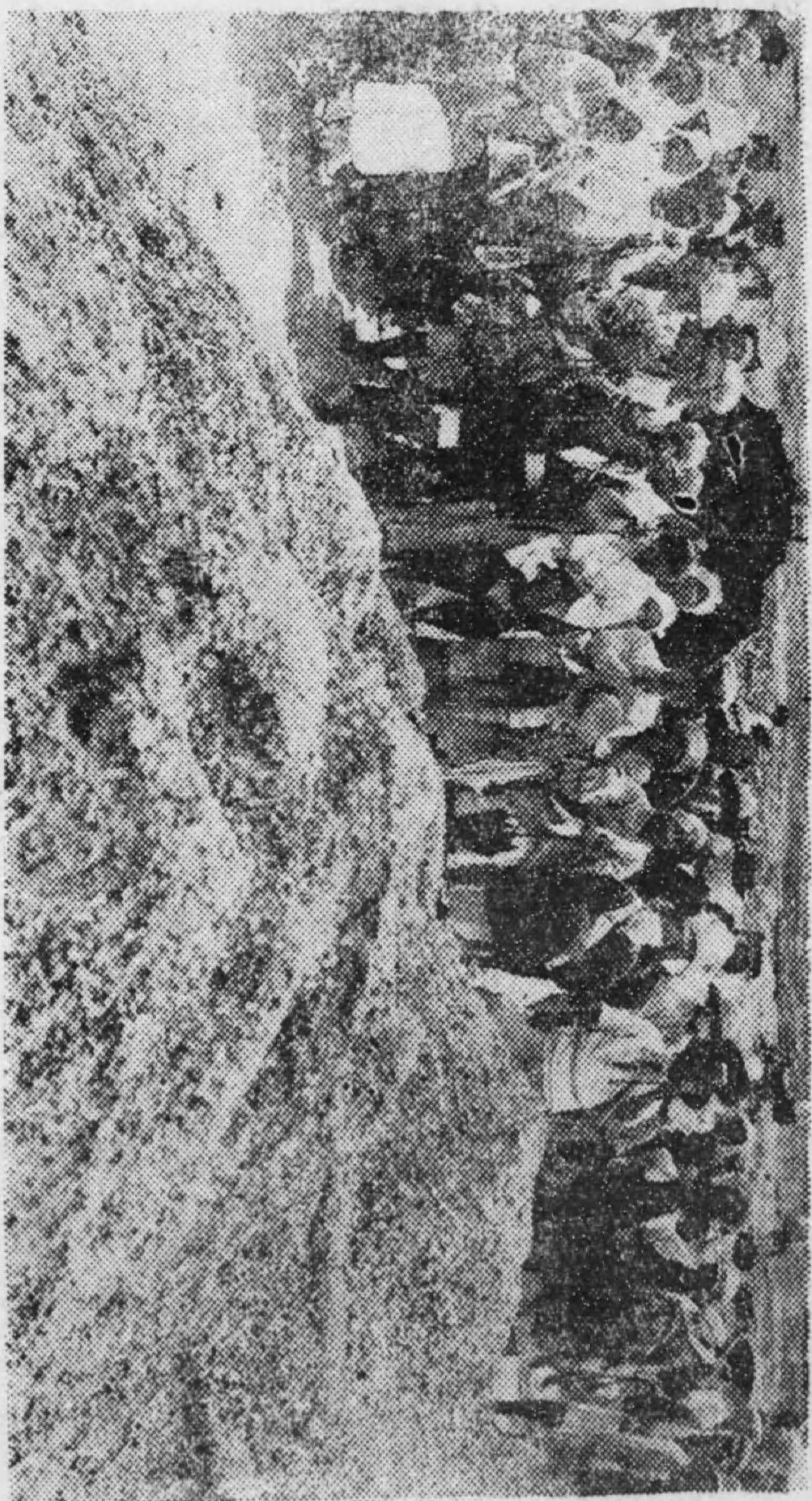
銀座の街のまい何處？

罹災者中に死者二萬九千九百八十五人を出して居る、そして東京市の收容死体が、八日までに八萬四千十四人に達したと云へば、總計十一萬三千九百九十九人死んだのである、眞に夢のやうなそして嘘のやうな話ではないかと、西村君は身を慄はした。

一口ぐつと茶を飲んで、今度は氏一流の感想談をやりだした。今度の震災で、女の力強さが充分に認められたよ、と頻りに女を賞揚した、若し常に女が

男より弱いものとすれば、男よりも、女の方が餘計に斃れたに違ひないが、男女それ／＼必死の力で地震と戦つた結果、必ずしも女の方が非常に澤山斃れたとは見えない、寧ろ織手よく男を扶け家族を護つて、あつばれ勇婦の譽れを揚げた女は澤山ある、あの大害に遭遇して、男女の別を超越して、皆一個の人間として、それ／＼平等の力を盡して居るこの際、誰れかよく女に向つて、弱きものよ、汝の名は女である、と公言し得るものがあらう。斯くて東京の焼跡には資本と男性と、其他あらゆる権力から解放されやうとする女の力が潑瀾として芽生えてゐる、實に喜ばしいことだ、と西村君は欣然とした。

震災に遭遇して、國民は有ゆる方面に多大の教訓を得ただらうが、先づ第一に建築に關する教訓を得たことは夥しいものだ、西村君は語調を高めた、震災にも火災にも無事であつた建築は、帝國ホテル、海上ビルディング、日本銀行、司法省、海軍

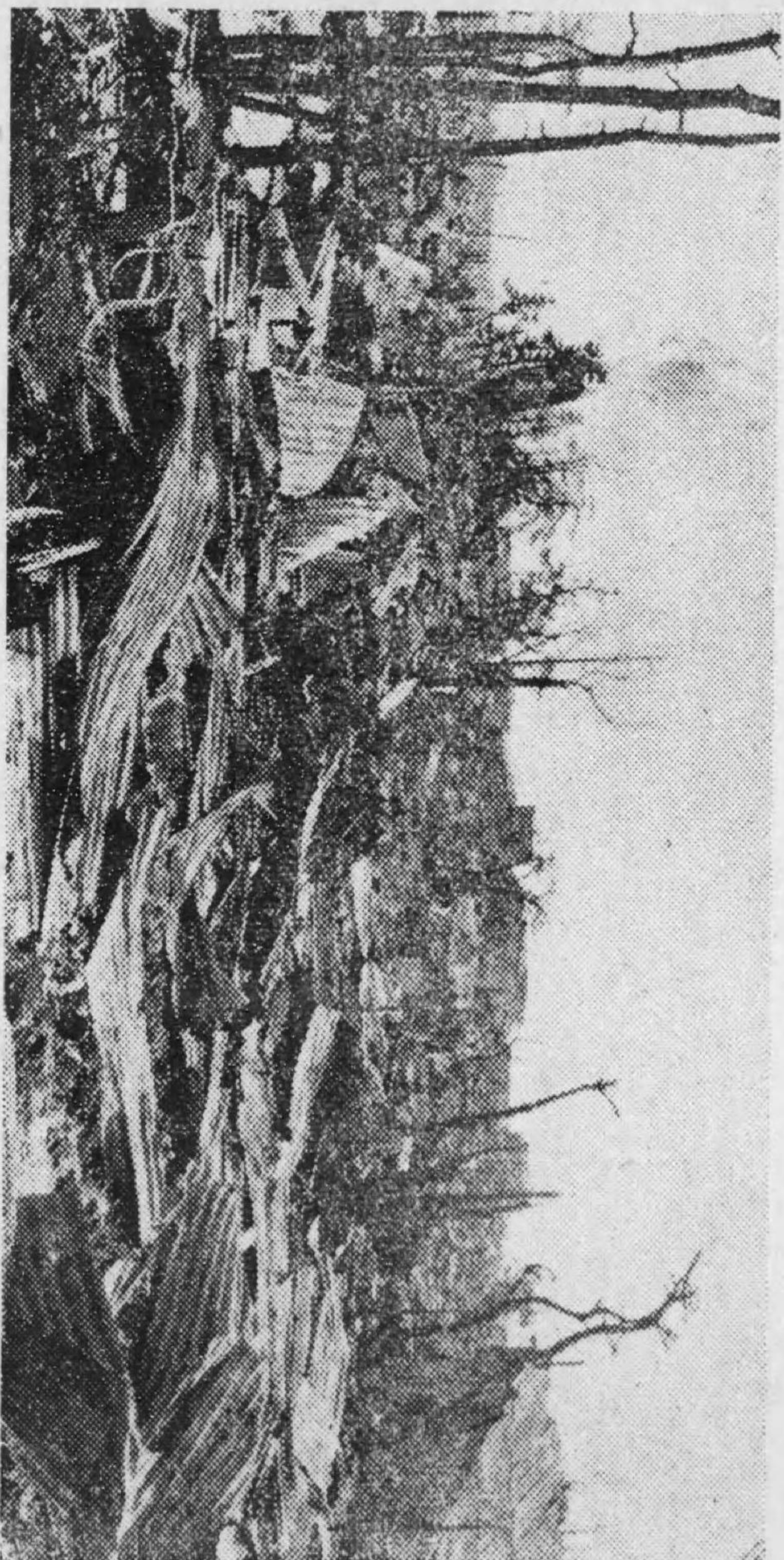


群の親肉ふ形を灰中

省等で、帝國ホテルは伊太利の技師の設計である、伊太利は地震國である丈けに其邊のこともよく研究して建設したものと見え、びりッともしなかつた、海上ビルも、あの宏大な、高い建物が損害なく、全く不思議なほどである、日本銀行や司法省や、海軍省の如きは皆故辰野博士の設計したものである、辰野博士の價値は非常の場合に際して、大いに發揮されたのである、博士は經驗を主として飽まで堅固に、最も忠實に設計した人である、一揺れで倒潰した建築物は何れも外觀の美を主としたものであつた、どうしても人は萬事眞面目であらねばならぬことが適切に判つたのは何よりの教訓である。

斯く語り續けた西村君は、不圖傍に置いたバスケットに手をかけた、大ぶん話したから、この位で止めよう、後はこれを見て呉れ給へど、差し出したのが、日記である、震災に就いては委曲を盡くして居る、其の内より重なること柄を簡單に抜萃し

辰野博士の設計



大正の大震災

て大正の大震災記を終ること、する。

二

大震災日記

九月一日(土曜) 午前十一時五十八分、關東に大地震勃發し、關西各方面より東京に通ずる電信、電話鐵道等全部不通となる。東京は七十六箇所より火災起り、終夜鎮火せず。横濱、小田原方面にも亦大火災を起したる由なるも一切不明。鎌倉に御滞在中の山階宮武彦王妃佐紀子女王殿下(御年二十)、賀陽宮大妃好子殿下(御年五十八)、鶴沼に御滞在中の東久邇宮稔彦王第二王子師正王(御年七歳)、小田原別荘に御滞在中の閑院宮寛子女王殿下の御四名は地震の爲薨去された。

九月二日(日曜) 東京、横濱の火尙消えず。戒嚴令發布。陸軍飛行隊にては大阪、各務原間の聯絡飛行を開始す。宮内省より攝政宮御無事のことを日光御滞在中の

両陛下に奏上す。夕刻亦阪離宮の芝生にて山本内閣親任式舉行。米國東洋艦隊全部を擧げて救援事業に従事せんことを申來る。

九月三日(月曜) 午前八時、東京の火全く熄む。大阪商船會社にては横濱、大阪間の臨時航路を開始し、第一救援船シカゴ丸大阪府より白米二千七百俵を積載し來る、一同稍や安堵す。全國師團特科部隊に帝都警備のため出動令下り、高田、宇都宮、金澤師團等出發の報あり。御内帑金一千萬圓下賜仰出さる。救援品無賃輸送開始。政府は救護資金として九百五十萬圓を支出す。

九月四日(火曜) 大阪毎日、大阪朝日の救護第一船アゼンス丸白米二百石を積んで入港す。東京大阪間直通電話一部開通。新宿、名古屋間鐵道電信開通。

九月五日(水曜) 中央本線不通箇所、與瀬、鳥澤間を除きて開通す。參謀本部第二部大阪に移る。鮮人暴舉風説取締に關する内閣の告示出づ。支那政府、日本の震災救

助の爲の米穀禁輸令の撤廢を可決す。

九月六日(木曜) 東京市内罹災民の電報取扱を開始す。御殿場に於て救援貨車顛覆即死者七名、重軽傷者十名を出す。今秋の陸海軍大演習中止と決定。支拂猶豫令、暴利取締令、流言浮説取締令等臨機の緊急勅令出づ。

九月七日(金曜) 淺草、本所、深川、芝の四箇所臨時火葬場を設けて死體の焼却に従事す。東京市内公設市場にて玄白米を賣り始め、玄米一升四十錢なり。芝離宮内約二千坪及び御料地全部開放さる。

九月八日(土曜) 東京、横濱間汽車開通。諸所に惡疫現る。山の手方面市電の一部開通す。

九月九日(日曜) 米穀輸入税免除の件、生牛肉及び鶏卵の輸入税免除の件告示決定。小屋掛の小賣店出初めたり。

九月十一日(火曜) 本日より郵便取扱開始。

九月十二日(水曜) 左の大詔煥發さる。

勅語

朕神聖ナル宗祖ノ洪範ヲ紹キ光輝アル國史ノ成蹟ニ鑒ミ皇考中興ノ皇謨ヲ繼承シテ肯テ愆ヲサランコトヲ庶幾シ夙夜兢業トシテ治ヲ圖リ幸ヒニ宗祖ノ神佑ト國民ノ協力トニ頼リ世界空前ノ大戰ニ處シ尙克ク小康ヲ保ツヲ得タリ曷ソ圖ラン九月一日ノ激震ハ事咄嗟ニ起リ其ノ震動極メテ峻烈ニシテ家屋ノ倒壞男女ノ慘死幾萬ナルヲ知ラス剩ヘ火災四方ニ起リ炎燄天ニ冲リ京濱其他ノ市邑一夜ニシテ焦土ト化ス此間交通機關杜絶シ爲ニ流言蜚語盛ニ傳ハリ人心恟々トシテ倍々其慘害ヲ大ナラシム之ヲ安政當時ノ震災ニ較フレハ寧ロ凄愴ナルヲ想知セシム

朕深ク自ラ戒慎シテ已マサルモ惟フニ天災地變ハ人力ヲ以テ豫防シ難ク只速カニ

人事ヲ盡シテ民心ヲ安定スルノ一途アルノミ凡ソ非常ノ秋ニ際シテハ非常ノ果斷ナカルヘカラス若シ夫レ平時ノ條規ニ膠柱シテ活用スルコトヲ悟ラス緩急其ノ宜シキヲ失シテ前後ヲ誤リ或ハ個人若クハ一會社ノ利益保障ノ爲メニ多衆災民ノ安固ヲ脅カスカ如キアラハ人心動搖シテ停止スル所ヲ知ラス朕深ク之ヲ憂惕シ既ニ在朝有司ニ命シ臨機救濟ノ途ヲ講セシメ且ツ焦眉ノ急ヲ拯フテ以テ惠撫慈養ノ實ヲ擧ケンコトヲ欲ス

抑モ東京ハ帝國ノ首都ニシテ政治經濟ノ樞軸トナリ國民文化ノ源泉トナリテ民衆一般ノ瞻仰スルトコロナリ一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其ノ舊形ヲ留メスト雖モ依然トシテ我國都タルヲ喪ハス之ヲ以テ其ノ善後策ハ獨リ舊態ヲ恢復スルニ止マラス進ンテ將來ノ發展ヲ圖リ以テ巷衢ノ面目ヲ新ニセサルヘカラス
惟フニ我カ忠良ナル國民ハ義勇奉公朕ト共ニ其慶ニ賴ランコトヲ切望スヘシ之ヲ

慮リテ朕ハ宰臣ニ命シ速ニ特殊ノ機關ヲ設定シテ帝都復興ノコトヲ審議調査セシメ其ノ成案ハ或ハ之ヲ至高顧問ノ府ニ諮ヒ或ハ之ヲ立法ノ府ニ謀リ籌畫經營萬遺憾ナキヲ期セントス在朝有司克ク朕カ心ヲ心トシ迅ニ災民ノ救護ニ從事シ嚴ニ流言ヲ鎮壓シ民心ヲ安定シ一般國民亦克ク政府ノ施設ヲ翼クテ奉公ノ誠悃ヲ致シ興國ノ基ヲ固ムヘシ朕千古無比ノ天殃ニ會シテ郵民ノ心彌切ニ寢食爲メニ安カラス爾臣民夫レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名 御璽

攝政名

大正十二年九月十二日

内閣總理大臣各省大臣副署

九月十五日(土曜) 攝政宮御乘馬にて焦土の東京市中を御巡視遊ばさる建築に關す

大正の大震災

高台に登りて
る勅令發布さる。

一〇八

九月十六日(日曜) 帝都復興院議會の職制發布さる。

九月十七日(月曜) 政府第二回救護資金として一千六百萬圓支出。

九月十八日(火曜) 帝都復興院審議會委員左の如く決定す。

山本權兵衛、後藤新平、井上準之助、田中義一、財部彪、平沼騏一郎、岡野敬次郎、田健治郎、犬養毅、山之内一次、高橋是清、加藤高明、大石正巳、伊東巳代治、市來乙彦、澁澤榮一、青木信光、江木千之、和田豊治

琵琶湖遊覽

我が國に於ける自然の公園として名ある、琵琶湖上を遊覽せばやと、四月十六日大阪を發し、京津電車三條停留所に集ひたる一行は、電車にて大津札の辻に下車、直ちに太湖汽船會社の埠頭に到れば、遊覽船と銘打つたる『白石丸』はその準備全く整ひて、雄姿を湖上に浮べ、一行を待ちつゝ、あり、定刻九時に及ぶや、一聲の汽笛を合圖に、船は進行を初めぬ、三井の寺々を太古其ま、の森林鬱蒼たる中に眺め、右手には煙波浩蕩たる裡に、瀬田の邊を望む、比叡比良の秀峰、彌生の空に清出して翠黛の色麗はしく、見渡せば湖上一帯の水の色、いとゆるやかに、恰かも一行の清興を欣ぶに似たり、音に聞く唐崎の松、堅田の浮御堂を近く左に望みつ、十一時近江舞子の稱ある雄松へと上陸す、陸上には白砂青松の中に會場を設らへ、幹事役が

心を盡くしたる晝飯に舌鼓を鳴らし、模擬店に立寄るもの、湖邊の清澄なる空氣に俗腸を洗ひつ、餘興の舞踊を樂しむもの、時の移るを忘れつ、遊び興じ、最後に記念撮影をなして再び船中の客となる、午後一時更に船は進行を初めぬ、願望すれば湖邊一帶の櫻花今を盛りと咲き誇り、其の水にうつるところ白雲の搖曳するに似て其の光景婉として一幅の畫題を呈す、白鬚神社を左に遙拜しつ、揚梅の瀧を望見し、走ること二時間、午後三時白石丸は竹生島に到着す、一時間の停船を利用して一行は探勝に上陸し、西國の札所として名高き辨才天に賽せば、薰風樹葉を渡つて氣自ら清々し、見渡せば乾坤蒼茫として春の湖水の一入おだやかなるを見る、汽笛に驚かされて、一行は三たび船の人となる、船は竹生島を一周して更に多景島に向ふ、伊井大老の記念碑を懸崖に眺めつ、こゝを一巡して歸路に就く、白石、沖ノ島、長命寺を展望しつ、進む程に、暮氣漸く蒼涼を罩む、斯くて午後七時三十分船は大津

港に歸着す、思ふに琵琶湖は單り水のみにあらず、山水を賞するもの、必ず一遊すべき所なり。

經堂郡山君の渡米を送る

現代に於て世界の大勢は、之れを一言の下に解決することが出来る、即ち歐米の文明を最も巧に採用したるものは榮え、然らざるものは衰ふ、蓋し名けて歐米の文明と云ふも、その實はいへば、之れ悉く人類知識の必然なる發達が、或る機會により歐米に集まり、而して發達したるに過ぎぬ。

文明を利用すべきは、人類の共通に欲する所であつて、文明は必ずしも歐米人の私すべきものでないことは、今更事新らしく云ふまでもない。

文明の西漸はいつしか文明の東漸となり、人類文化に必須の印刷術が我が邦に輸

入せらるゝに及びて、我が國の文明に寄與したるところ頗る大なるものがある、由來我邦の印刷は最も古き歴史を有し、世界に誇るに足るべしと雖も、近代印刷文化の發達は獨創的のものに乏しく、其の多くは假借に出づと稱しても不當でない。

假借と模倣を事としたる我國にありては、人工の力によりて、兎も角も時代の大勢に順應し能ふだけの素質を具備するに至れるも、未だ歐米の工藝に比して、一籌を輸せざるべからざるもの多々あるは、吾人の等しく認むるところである、殊に印刷工藝に於ては我の彼等に遠く及ばざること多きは言ふまでもない。

故に印刷術の進歩を圖り、發達を企つるものは、先づ第一に歐米の斯術に着眼し、彼等の特長を輸入して、我が印刷文化に貢獻したるものも尠くなく、歐米に自ら渡航して眞に彼等の精髓に觸れ、其の粹を捕へ、美を携へて歸朝し、我が印刷界の發展に盡くした人も亦決して尠くない。が之等の人々は自らを便宜するもの、語を換へ

て言へば營利的の渡航でなくば、極く小さく制限せられたる専門的學術研究のものであつて、廣くを利するの意に悖つて居るものである、吾人は多年の久しきに及んで、眞に國家を益し、斯業を利する人士の渡航を希望して居たもの、一人である。然るに、何ぞ幸なる、經堂郡山君筆を載せて渡米の途に上る、吾人豈に祝福せずして可ならんや。

經堂郡山君は、印刷雜誌社々長として尙ほ同誌の主筆として精勵奮闘、該博の智識と文才に於ては斯界にまれに、加ふるに德行の人である、一たび君と語を交すれば何人も其の才徳に服せざるものはなく、殊に有ゆる印刷術に通じて居ると云ふ點に於て、我が印刷界の唯一人者と稱するも敢て過賞でない、更に君の慧眼と快筆を以て一度斯界に臨めば、爲すとして成らざるなく、行くとして可ならざるはなき概がある、然してかりに斯界より君を除けば、恰かも暗夜に燈火を失ひし如く、我が

印刷界の不利不便は計り知るべからざるものがある。

幸に、印刷局長並に業界有志諸君の大なる後援の下に、多年の宿望は達せられ、十二月八日横濱解纜の大洋丸は君を載せて渡米の壯途に上らんとす、この文の紙上に現はる、頃、君は米國の土を踏み、シャトルに祖國の月を偲びつゝ、あるであらう、余は君と平生頗る懇意であるばかりでなく、常に多大の便宜を受けて居る一人である。今俄かに君と別る、に於て、無量の寂寞と不便を感ぜざるを得ない。

しかし、余の寂寞と不便は誠に小なる私事である、二ヶ月乃至三ヶ月の後には君が椽大の筆は誌上を賑はし、斯界の心あるものをして熱狂せしめるであらう、余亦其の日を待つて充分の快を食らうと欲する。今や印刷の事業は愈々大ならんとし、印刷の技術は益々精緻を致さんとす、君が渡米後の消息は正に金玉に値ひすべく、斯界を利益すること決して小ならざるを思はゞ、双手を舉げて君の行を盛んならし

むるに躊躇しない。

唯だ余をして憂へしむる事には、君は蒲柳の質である、君が期する二ケ年の歳月は異國の風雨に堪へ得るや否やである。されど君は至つて攝生家である、世の所謂行當り主義者と選を異にするが故に、余の此の憂ひは幸にして杞憂に過ぎぬべしと雖も、君亦大に此點に深甚の注意を怠らず、よく自愛自重二ケ年の長きに亘る視察と研究を了へて錦衣歸朝の日を斯界の爲め、君が家庭の爲め、切に祈りて已まぬものである。

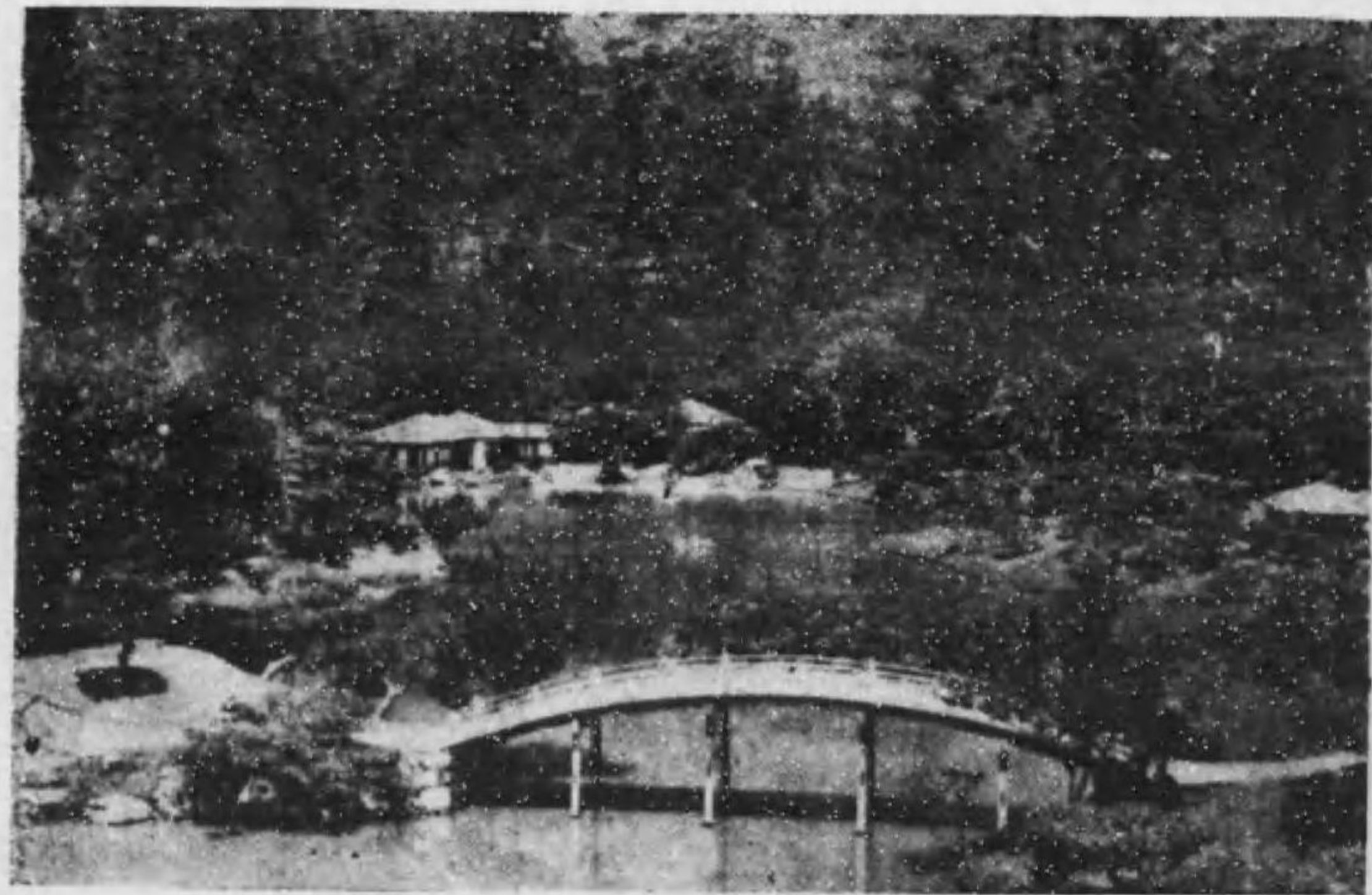
讚岐より一筆

小南兄……………

朝夕は大に凌ぎよく相成候へども、日中はまだなか／＼酷しく候、お變りなく候

哉伺上候、小生事去る二十四
日大阪發、宇野經由高松市に
上陸仕り讃岐の各地を彼地此
地と經巡り申し候。

高松市には御存じの栗林公
園有之夏の公園として納涼に
最も妙に候、玉藻城の月影清
きところ老松綠滴る風情誠に
捨て難きもの有之候。高松に
來つて屋島を訪はざるは、奈
良に遊びて大佛を訪はざると



高松栗林公園

等しこのことに有之一日を屋島に費し候、公園前より遊覽電車の客となりて進めば
車窓鹽田の烟空に爨き、續く松原風薫る郊外僅か一里半、相引川を渡れば屋島に候、
面行法師が

宿りしてこ、にかり寢の疊石

月ぞ今宵の主なりけり

と詠じたる梨の茶店を過ぐれば四國八十四番の札所南面山千光院に到着仕候、史上
に物すごき古戰場も今や波靜かにして眠るが如く、五劍山八栗の諸峰を正面に壇の
浦を脚下に見て元暦二年の昔を追想しつ、談古嶺に上り高松市に引き返し申し候。

高松市より西して丸龜、善通寺に立寄り、琴平に到り、象頭山に登りて金刀比羅
神社に參詣し、諸君の御清健を祈り候。歸途は多度津に立寄り瀬戸内海の風光を賞
し、讃岐富士に飽かぬ眺めを惜しみつゝ、歸途につき申し候。

讚岐下りの序を以て隣國道後温泉に遊ぶ考へに御座候ところ、よんどころなき用件の爲め之を中止するの止むなきに立ち至り候は返すくも遺憾の極みに候も何れ機を見て所志を果たしたく存じ居り候、先は右御一報まで如斯に候殘暑去り難き折柄折角の御自愛祈上候 敬具。(八月二十六日讚岐にて)

日米職工の美點と缺點

太古の人民の如く、遊惰なるもの、多き社會の、不健全なるは茲に述べるまでもない、さりとて働くのみにて、全く遊ぶことを知らざるもの多き社會も亦健全でない、健全なる社會にありては、多くの人々能く勤め、又能く遊ぶものである、即ち勤勉と休養と、各其の宜しきを得て、初めて最も健全なる社會を作り出すものである。

現代世界の職工中、最も能く勵み、又能く遊ぶものは、米國の職工である、米國の職工は老幼男女の別なく、一生懸命に働く傍ら決して遊戯運動を廢することがない、即ち勤務の間に僅かでも時間の餘裕があれば、必ず遊戯をなし、運動をなす。何事もなさず、唯漫然として、時間を徒費するものは殆んど無いと云つてよい。米國の職工は、必ず所定の時間に出勤して、直ちに受持の仕事に着手し、勤務中は孜孜として働き、終業時間となれば、忽ち其の仕事を切り上げて倉皇として我が家に歸り、衣服を更めて己れの欲する所に向ふのである。米國の職工は仕事と遊戯と食事と睡眠との必要なるを知り、同時に遊戯と睡眠との前後に於て讀書の必要なるを知つて居る、此の故に前日の勤務より來る身心の疲勞は、翌朝に至つて全く恢復せられ、再び充實したる元氣を以て、仕事に従事することが出来る、故に米國の工業界では、勤務時間の短かきに不拘、仕事の成績は、却つて時間の長き他國の工業界

に優つて居る。

斯く仕事はよくするが、米國の職工には、融通と云ふ頭が毫もない、そして手先の器用がない、一つ間違へば権利義務を主張して、なか／＼口喧ましい、今二時間繼續すれば、仕事を終るからと思つても、所定の終業時間が來れば、遠慮會釋なく、ごし／＼家に歸るを常とする、強いて頼んでも、客易に聽入れるものでない、又機械力を應用する國丈けに、職工は手先の器用がない、例を擧ぐれば甚だ多いが、概して日本の職工ほど器用でない。

ところが、日本の職工はどうであるかと云ふに、第一融通がよく利く、夜業もすれば、徹夜までもする、一ヶ月休日なしでも働く、二時間や三時間の居残り位は何んとも思つて居ない、居残り位でない、まだ暗い裡からでも出勤して働く、性質も概して柔順である、指先のこと至極器用である、又権利義務を無暗に主張

することもなく、大抵の事は我慢してしまふ風がある、随つて主従の關係も何となく温か味が深い。實に日本の職工は理想に近いものであるが、其の反面には缺點も亦多い。

日本の職工はよく出勤時間に遅刻する、早引することなども敢て意に介しない、勤務中にも煙草を吸ふ、茶を飲む、戲談を言つては巫山戯る、其の結果喧嘩もする、他の迷惑を意としない、執務の合圖があると、ぼつ／＼便所へ行き、煙草を吸ふて仕事に取掛ると云ふ情けものも居る、随つて時間の長い割合に能率が上らない、總てに對し、比較的無責任で、間違いが頗る多いやうである。

米國の職工が立派な遊戯運動に熱中して居るに對して、日本の職工には惡遊びが多い、近來大に改良されて、日本の職工も、野球團や旅行會などを設けて、大に面目を一新しつゝ、あるが、米國の職工が組織して居るやうな、大學のチームに天晴れ

勝を占めるやうな立派なものはまだ見ない、日本の職工は何事をするにも個人的で團體的でない、随つて一致の精神に缺け、大に利すると云ふ點に、不便を免れない。要するに日米の職工には、お互に一長一短がある、其の長を採りて短を補ひ、大に自覺するところがあれば、日本の職工は、將來有望と稱すべく、我が工業界の發展期して待つべきものがある。

フランクリンと本木昌造翁

フランクリンは米國工業界に於ける大立物であり、本木翁は日本の工業界に於ける大立物である。フランクリンが米國の工業界に盡くしたる功績が、本木翁が日本の工業界に貢献したる功勞に譲らぬとすれば、本木翁の功績も亦決してフランクリンに劣るものでない、故に何れをより大にし、何れをより小にすることは出来ぬ、

勿論是非の區別を附せらるべきものではないが、人と物とは、時代の懸隔、四圍の状態によりて、種々相違して居るところもある、茲にフランクリンと本木翁の人物に就いて、記載せんとするものは、決して人物の評論に亘らんとするものではない、唯兩者の徳を慕ひ、其の事蹟に就いて、一言せんとするまでのことである。

偕てフランクリンの生れしは、西曆一七〇六年で、本木翁は、文政七年の生れである。兩者が生れた年代に於て、百十八年の相違がある、フランクリンが逝去したのは八十四歳であつたが、本木翁は五十二歳であつた、故にフランクリンは、本木翁よりも、三十二年間此の世に長く居たわけである。

若し本木翁をしてフランクリンと等しく、一七〇六年に生れしめて居たならば、如何であつたらう、一七〇六年は、恰かも我が國の寶永三年に相當する、而して我が國が活版印刷に、多大の注意を拂ふに至りしは、慶長年間のことである、慶長元

年は西暦一五九六年に相當し、慶長十四年、幕府和蘭人に通商を許し、更に十八年英吉利人の通商を許せしも、慶長元和の頃大阪冬の陣を経、夏の役豊臣氏亡び、元和九年家光征夷大將軍となるや、洋書の舶載を禁じたが、和蘭との通商は許されて居た、洋書舶載の禁弛みしは、享保五年で、一七二〇年である、本木翁をして、フランクリンと時を同うして、此の世にあらしめば、一八四五年の頃洋書を見て其の精巧に感歎した翁は、一七二〇乃至三〇年代に此の事ありしは疑ひなき所である、さすれば我が國の印刷界は、慥かに百二三十年早く發達して居たこと、信じられる、日本の印刷事業が、新興國の亞米利加に、遙か後れしは、國家の事情によること勿論なるも、又一面に本木翁の出生が、後れし爲めとも言ひ得るであらう。

フランクリンは電氣學者、農藝學者としても亦大に知られ、殊に電氣に關しては造詣頗る深く、當時電氣協會の理事をも勤めて居たに對し、本木翁は製鐵業に造詣



本木昌造翁

深く、嘗て長崎製鐵所主任として令名を馳せた、又航海術にも通じ、橋梁の建築家としても當時我が國に於て、翁の右に出づるものはなかつた。文久三年御用船チャールズ號に船長となり、元治元年御用船ゾキクトリア號の船長となり、活版業研究の傍ら航海の業に従ひ、國家の爲め大に盡くしたのは本木翁である、長崎の鐵橋、大阪の高麗橋を鐵橋に改め、本邦最初の鐵橋を架設したものは實に翁であるフランクリンは、

公共の事業にも随分手を出して居る、ヒラデルヒヤ費府圖書館を創設し、これに多數の書籍を購

入寄贈した、又ペンシルバニア大學を設立し、多くの私財を擲つた、其の他費府病院の維持費を負担したり、道路の修築などのことは、一再にして止まらず、一般より慈母の如くに慕はれたが、本木翁も亦公共の事業には非常に盡くして居る、阿蘭陀通辯書を印刷して希望者に之れを無料配布し、長崎の新町に、新街私塾を開きて、學生を教養し、しかも塾費を徴收せず、専ら人才の養育に努めた、八丈島に疱瘡流行し、罹病者多きを聞くと、直に醫を遣し種痘せしめて、島民を救つたこともある、其の他公共事業に盡瘁せしことは、枚舉に遑なく、時の人悉く翁を慈父と尊び敬ふた。

フランクリンは米國の獨立を呼び、獨立宣言書に署名し、ワシントンと共に今日の米國を作り出した偉人である、晩年にはペンシルバニア州知事となり、加奈陀及び英佛等に全權公使として駐劄し、國家の爲め貢献するところ多大であつた、本木

翁は嘗て、我が國政を憂ひ、改革を呼び、遂に獄に下りしことさへあつた、我が航海權の動もすれば、外人に奪ひ去られんとするを座視するに忍びず、大隈參議（大隈重信侯）に建議して、之れが防備に力めしめた、翁にかすに更に二三十年の天壽を以てすれば、翁は和

蘭に、英國に、將た米國に公使として駐劄し、尙ほ國務大臣として、大に其の敏腕を揮はれしならんに、早世したるは、かへすくも遺憾である。

フランクリンは能書家として、詩人として、同時に又讀書家として聞へて居た、



フランクリン

其の書は飽くまで、流麗で、其の文は飽くまで鋭いが、其の内にも斷腸の思ひあら
しむる運びがある。

Studious of Ease and fond of humble Things,
Below the Smiles, below the Frowns of Kings:
Thanks to my Stars, I prize the Sweets of Life,
No sleepless Nights I count, no Days of Strife.
I rest, I wake, I drink I sometimes love,
I read, I write, I settle, or I rove;
Content to live, content to die unknown,
Lord of Myself, accountable to None.

彼れの文は、實に斯くの如きものである、物に觸れ、景に應じて、常に其の錦心絲

腸を動かすの概がある。

本木翁も、能書家として、詩人として、將た又愛書家として誰知らぬものはない
能書家であり、且つ達筆家であつたことは、翁が七歳にして書を能くし、時の人を驚
かしたに徴して明かである、詩人として又歌人としての彼には左の如き作がある。

〇七 夕

多情願華寢 遙心逐奔龍

〇故郷の露

むぐらおふるわが故郷も白露の玉ばかりこそむかしなりけれ

〇古戦場

いまも猶ほ袖にかゝりてぬる、かなやしまのうらにたてる白波

以上によりて斯道にも非凡であつたことが窺はれる。

フランクリンが亞米利加の恩人である如く、本木翁は日本の恩人である、しかし両者は唯單に其の國の恩人と云ふよりも、世界文明の恩人であると云ふを至當とする。一九二〇年フランクリンは、米國に於て上院下院の決議により、同國最高の名譽館の内に名を列し、永久に崇敬せらるゝの榮譽を荷つた。本木翁は明治四十五年、其の功績を認められ、至上陛下より從五位を贈られて、翁の功勞は永遠に光り輝くの光榮に浴したのであつた。

播州の風光

梅雨に祟らるゝこと既に三句、飽き／＼したる雨もいつしか歇みて、曇天とは云へ、いつになき心地よき朝である、今日は友人諸氏との約を履んで、播州の風光を

賞でることにする。

一行は午前七時十八分、大阪發の列車に辛ふじて飛乗りの藝當を演ずれば、早や神崎も打ち過ぎて西宮、芦屋に差しかゝる頃、歡談笑聲は既に車中を壓するの概がある。右には低山性の峰巒起伏する裡に六甲の頂き一際高く聳えて一行を送迎するが如く、左には大阪灣の洋々たる、心氣正に一轉の感がある、溪流潺湲たるところ自ら初夏の快樂を覺えしめる。

汽車はすでに神戸市に入る、車中より楠公社を遙拜しつゝ、更に走れば兵庫、鷹取を過ぐるころ、風光忽ち一變して、眼に映するもの、悉く之れ優艶明媚を以つて評すべく、紀泉の山、遠く左に煙を爲し、宛然油畫を見るが如き心地する、須磨に入れば、平門一時の夢など自然の勝景に史的の趣味を添へ、人をして轉た懷古の情に堪へざらしむるものがある。此地水碧くして沙明に甚だ優雅の趣きがある、汽車は

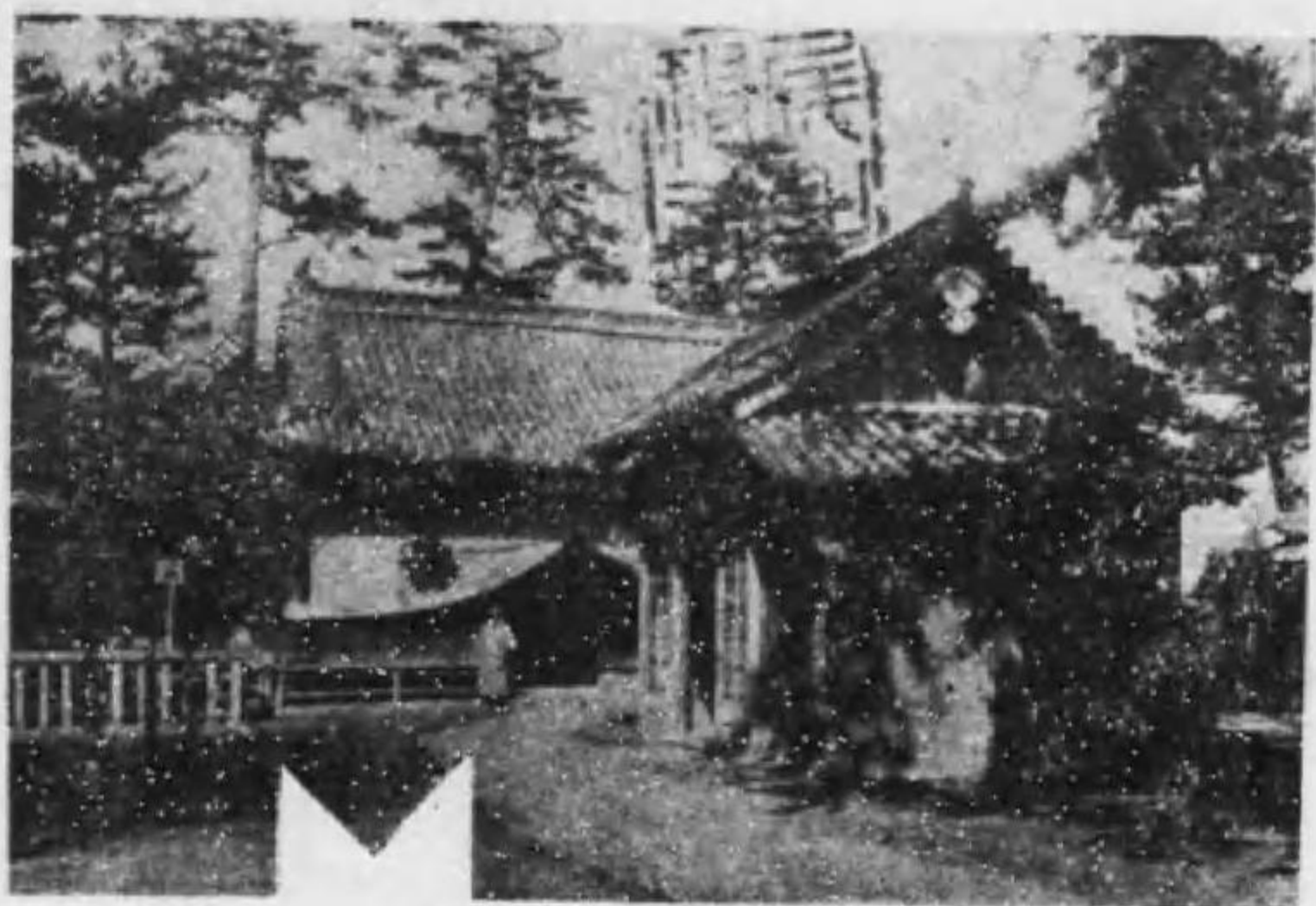
青松の間を縫ふて益々西すれば右には一帯の翠巒屏風を樹てたるが如く、一の谷の

激戦に思を寄せざるを得ない、淡路島指呼の内に出現して、呼べば將に應へんとす、塩屋、垂水、舞子の邊、松樹概ね其の梢を齊ふして、枝幹屈曲し、臥するが如く蟠るが如く、一樹に各々特殊の趣味を存す、山陽の詠じたる

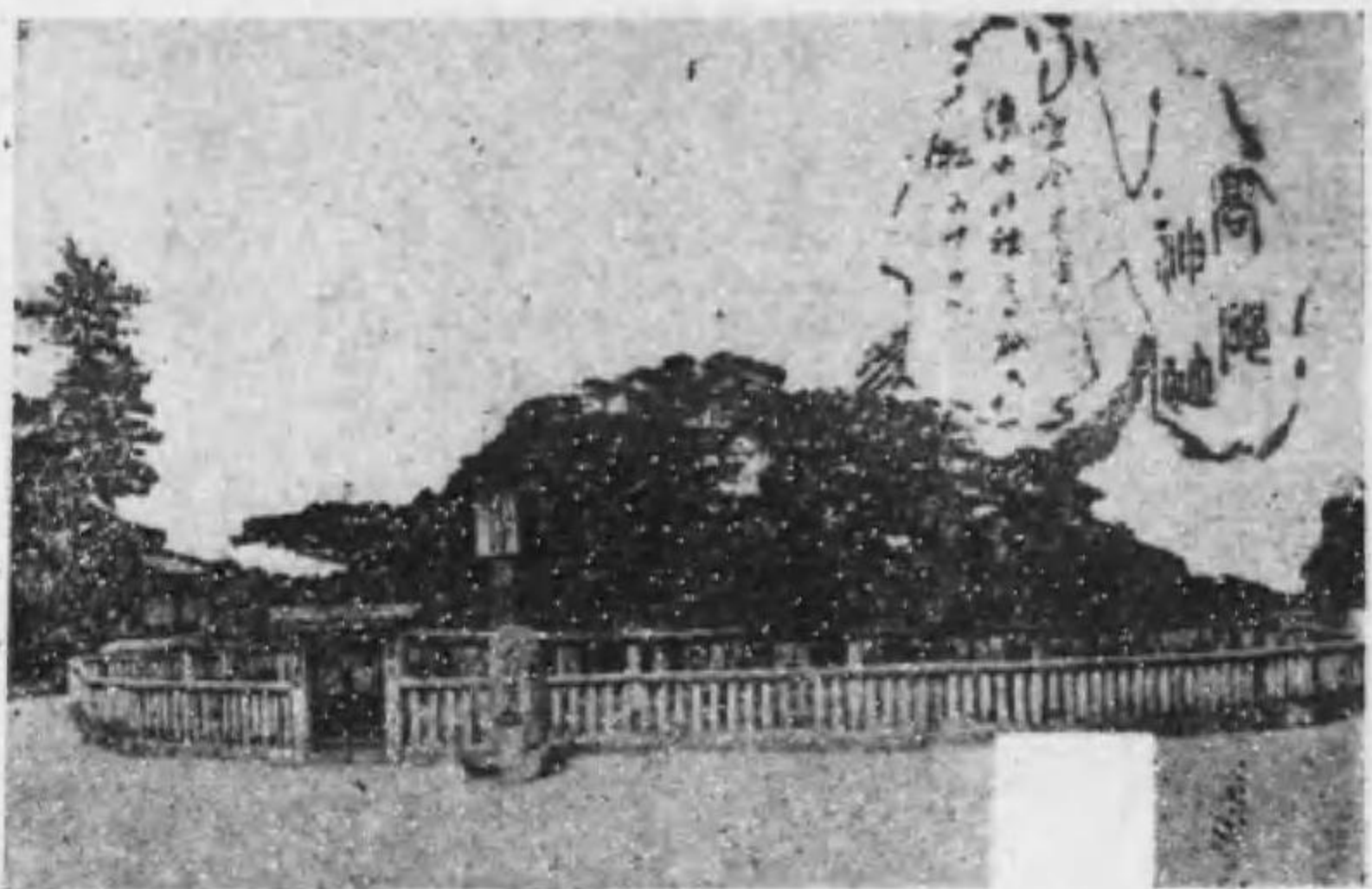
松翠沙明數戸村 鮮鱗上店佐匏尊

每過一醉終成例 不記泥鴻第幾痕

を知らず口づさみつ、明石に入れば、老樹の鬱叢たる間に、壘壁城樓の聳ゆるを見る、海邊に白帆の點々たるどころ、風光又更に美なるを覺えしむ、



高砂神社



相生の松

斯くて吾等の目差す加古川驛に到着したのは午前九時廿分であつた。
驛に相川氏が態々一行を迎へられしは感謝措く能はざるところであつた、相川氏の厚意により自動車中の人となり、音に名高き高砂神社に賽すれば、身心自ら爽快にして、『高砂や、此浦舟に……』の謠曲に思を浮ばしむ。有名なる相生の松を見、それより材木町尾上樓にて晝食を取り、更に市中を逍遙し、到るところに其の風光を賞しつ、薄暮頃一行は歸途に着いたのであつた。

亡き母を懐ひて

好く晴れた、氣も清々しい三月二十五日、今日はいつになく、母も心地よげに、朝から床を離れて、拭き掃除を手傳つたりして居る、母は昨年から腸を患らつて、永らく緒方病院の厄介になつて居た、此の春になつて病氣も非常によくなり、自宅で氣儘に養生をして居たが、追々順調に快方で、時折醫師に診て貰つて、服藥して居ればよい程度にまでなつた、長い間愁氣に閉された家庭は陽春と共に、部屋の隅々まで輝いて見えた。

此頃の氣分は如何です、身体の調子は？、と尋ねると、もう大丈夫、此の病が本復したら、一度故郷に歸つて、親戚の人々にも挨拶して來たいと思つて居る、などと大變な元氣であつた、久しく患つた其の間に、國元では心を置いて、或は氏神様

に御祈禱を捧げて呉れたり、或はお守りを贈つてくれたり、伯父の彦術氏や從兄の嘉吉氏を初め多くの人々が多大の厚意を寄せられたのであつた、全快したら、母の言ふ通り、世話になつた國の人々へ禮かたぐ、又一方には轉地の意味で余としても母の歸郷を賛成し、且つ之れを勧めて居た、全快の日が近づいてから、氣分のよい時を見計らつて、母もちよいと散歩に出かけては、土産物など買つて來て嬉しそうに荷拵らへなごして居た。

併し、故郷は山海萬里を隔て、居る、壯健なものも、此の旅行には疲勞を感じる位である、況して病後の母にとりては、餘程氣遣はれる、それで、今少しすれば、時候も甚だ暖かくなり、海も穏かで、航海も安全だから、四月の末頃まで大阪で保養してから出發すること、なつて居た。當時余は東京に職を奉じて居た、嘗て母の病重しと聞くや、急遽歸阪して病床に侍した、然るに母は段々快方である、東京に

於ける仕事も其儘となり居る故、一度上京して各種の用件を形付けて置きたいと母の意向を聽いて見た、母も之に賛意を表してくれたので、愈々上京することにしたのが、三月二十五日であつた。

久しく打ち遣つて居た東京の仕事を思ひ出すと、これ亦一日も猶豫ならぬ氣がした、母も非常によくなつて時に笑ひ聲すら發するやうになつたのを幸に、上京することに決心したもの、後には妹唯一人である、聊か不安の伴はぬでもない、依て之を親友の小川太仲君に計つた、友誼に厚い小川君は留守宅の萬事を引受けると云つて呉れた、加之夜間は寢泊りまでしてやるとの親切である、余も大に力を得た、心置きなく上京することが出事る、それで早速行李を整理し夜行列車で出發することゝなつた。母と妹と余の三人で楽しく睦まじい夕食を濟まし、不在中のことどもなご互に話し合つて、偕て暫しの別れを告げた、中間で上京の挨拶をすると母は非常

に機嫌よく、微笑を湛へて『道中を無事に』と病後の自分を忘れて余に注意をして呉れた、腕車に乗り、街の廻り角を曲るまで母は門先に立つて見送つて呉れた。車は梅田を差して走つて居る、車上で又いろいろのことが頭に浮ぶ、今上京するのは未だ少し早い、今半月も母の側に居る方が母も心丈夫だし、妹も嘸ぞ用の多いことだらう、など、考へると、東京行を延期しようかと云ふ氣も起る、梅田へ着いて、待合室に入つてからも、種々のことを思ふと、どうも上京は氣が進まぬ、いつを引返そうかと心を碎いて居る際、知人の武田君に邂逅した、聞けば名古屋へ行くとのことである、同車しようかと勧めらるゝまゝに、初めて上京の決心が定まつた。

翌二十六日早朝東京へ着いた、社に一寸落着いてから、平常母の嗜いて居る洋菓子を求め、其足で日本橋の水天宮に詣で、お守を受け、之れを一纏めに小包で母に贈つた、母は水天宮に信仰厚く、久留米の水天宮にも嘗て參詣したことがあると話

に聞いて居たからである。此日は社務に追ひ倒されて眼の廻るほど忙しかった、信書其他の整理を終ると、其の夜は疲れて前後不覺に眠つてしまつた、二十七日も多忙を極めた、何様二ヶ月餘も萬事放任の態であつたから、母のことも考へる暇がなく、次から次へと用が有つた、其夜は知人を訪れたりなどして、寢に就いたのは十二時を過ぎて居た、いつもならこの位の遅くなると、直にぐつすり眠られるのだが、一時が來ても、二時が打つても眠られない、何を考へるともなしに、いろ／＼の事柄が腦裡を襲つて容易に眠られなかつた、いつしかうと／＼すると激しく門の戸を叩く音がする、それも自分の家とは思はず、またうつら／＼と眠る、すると又けた／＼ましい戸を叩く音に連れて叫び聲がする、耳を澄ますと『電報！電報！』である、咄嗟に母のことを考へ、跳ね起きて門口に走つた、見ると配達夫は二通の電報を握つて居る、引き裂いて見ると、こは如何に、『ハ、キトクスグカヘレ……』、餘

りのことに茫然自失せざるを得なかつた。用意の爲め大阪から同文電報を二通發したものでらしい、何れもウナー至急報一であつた。

洗面もそこ／＼に、東京出發の用意に取りかゝつた、驛に着くと惜しや朝の特急列車は發車後であつた、十一時發下關行列車を撰むより外なかつた、時間潰しに京橋から銀座あたりをぶらついた、定めし陰鬱氣な態であつたであらう、朝のこと、て街は何處も淋しい、又驛に出て、カラーやネクタイを按排し、漸く下關行に乗込んだ。危篤か死か？、冀くば危篤の方であれかしと祈つた、危篤にしても今一度母に面會し、今一度言葉を交はしたいと希つた、そして妹はどうして居るだらうと考へた、歸心は矢の如くである、車窓に仰ぐ富士の秀峰も、今日に限つて憂多く見へた、皚々たる白雪は白衣を纏ひたるに似て物の憐れを感せしめた。

もごかしかりし列車は二十八日早朝梅田驛に入つた、腕車で家に驅け着けると、

門口の簀戸には白紙に『忌』の字が貼り出されて居る、出迎へて呉れた多くの人々は無言のまゝ、余の顔を凝視して居る、もうこうなつては騒いでも駄目だ、萬事世の廻



母 七 七

り合せと諦めるに如かずと考へつゝ、車を降りた、靴を脱いで集つて居る人々に挨拶したが、先立つものは涙であつた、妹を見ると眼を泣き脹らして居るが臺所の手傳ひをして居る、時に妹齡漸く十六、其の健氣なるに且つ感じ、且つ不憫を感せしめた、そうこうする内に國元からは、母の兄に當る彦衛氏と兼五郎氏が來られた、母には姉が二人あるのだが、妹は住所を覚えて居らぬ爲め電報することが出來なかつたと云つて居る、姉達には會へずとも、兄二人までが遠くより訃を聞いて

驅せ附けてくれたのは異郷に客となれる母も定めし満足に思つたことであらう。

母名は『つき』、伊豫松山の産である、兄二人姉二人の五人兄弟で、母は末子であつた、十九歳にして分家し婿を貰つたが、余の父は放蕩者であつたのであらう、家屋敷は勿論のこと、親から分與された田地までも人手に渡してしまつた、余に妹が一人ある、母はこの男女二人の成長を楽しみに不安な日を送つて來たのである、しかも常に其教養に資の足らざるを慨き、窃に拮据するところがあつた。

母人となり柔和、人之に反する莫く、勞して倦むを告げず、家貧に陥つて愚痴を並べず、我等を撫育するに至情を以てした、余少壯にして笈を負ひ帝都に遊ぶ、母愛惜、しかも亦敢て之を留めなかつた、蓋し余の志を察し、其の成る有るの日を庶つたのである、次で余歐米に遊ぶこと數年、爲めに母の心身を勞したること幾何なるを知らぬ、然れ共常に余に致すに激勵の文字を以てし余に教ふるに諄々、身は貧苦

に惱まされつゝ、余が教養の任に當りし母を思ふ時、涙自ら滂沱たらざるを得ない、余未だ志成らず、地下に眠れる母の英靈を安んずる能はず、懼愧交々臻る。

母は幾んど一生を輾轉落魄の間に過し、晩年殊に悲慘を極めた。惟ふに、人生には悲哀が多い、而して山海萬里の地、遠く兄弟を離れ、知己に遠ざかりて、空しく異域の鬼となるより哀しきは無からう、況んや臨終にありて教養怠らざりし我子の傍に侍せざるに於てをやである、覆翼の恩、涓埃いまだ報せざるに忽焉として長く世を辭せんとは、享年五十有三、嗚呼悲しい哉。

余をして直言を許さる、ならば、整肅温容、氷清玉潔は實に母の全豹である。壁間に掲ぐる亡き母の小照、我れ終生尊敬し、子孫永く欽慕すべし、『妙光鏡眞信女』の靈を安置するところ、香煙たゞ靜かに上る。

眞の偉人

人として非常に腹の立つた場合、無暗に昂奮すると、賢者愚者無差別に、事理の判断力を失ふのが通例であるが、一步退いて考へると、これらの人々は何れも慙れ至極のものである、此時に當り、よく冷靜を持し得る人、事理の判断を誤らぬ人、而して問題を達觀する人こそ眞の偉人と稱すべきである、平常如何に賢者であり、智者であるとも、急に臨みて周章狼狽するが如きは何等の價値なき人である。

時間の空費

時間を空費するほど馬鹿氣たことはない、とは誰しも口にするところである、口にして居て尙且空費して居るのだから餘程の馬鹿である。『光陰矢の如し』とか『寸陰を惜しみて』とかいろ／＼昔から時間空費を戒めた句は可なり澤山あるが、現代

に及んで何等の効果をも示して居らぬかの觀あるは誠に慨歎に堪へぬ次第である、時代は益々多忙を極め、爲すべきことの多くを有して居る、徒に時間を空費し恬として省みざるが如きは、國家の將來を思ひて誠に憂ふべきことである。先年『むだせぬ會』の起るや、著しく世人の注目を惹き、頗る緊張味を示せるも、悲しい哉、一時的現象であつて、今日では殆んど葬り去られしかの觀がある、三時の集會が五時となり五時の集會が七時となり八時となるは、通則なるかの如く考へられ、多くの人が多くの時間を空費して、平然たる今日の状態は、飽まで之れを打破せねばならぬ、仄聞するところによれば、府會と云ひ市會と云ふも、其の議員の出席するは必ず規定時間の二時間乃至三時間後にありと云ふ、時間の勵行を約し偶ま定時に出席するものあるも、開會は常に二三時間後にありと云ふに至りては寧ろ笑止の極である、斯くて多くの人々は貴重なる多く時間を空費し、國家の大損失を招きつゝある。

聖德太子は聰明に在らせられ、秩序の維持と産業に奨励に多大の努力を致された、太子制定の十七條憲法は燦として萬古に光輝を放つて居る、其の憲法第八條に

群卿百寮、早朝晏退、公事靡監、終日難盡、

是以遲朝、不逮于急、早退必事不盡。

とある、時間の貴重なるを示し、仕事に忠實ならざるべからざるを教へて餘りあるものである、早く朝してをそく退け、公事はもろきことなきを以て終日も盡し難い、遅く朝すれば急におよばず、早く退けば必ず事が盡くされない、と敏活にして精勵ならんことを訓誡せられたのであつた。

此の尊き制定を得てより時を経ること茲に一千三百有餘年、尙ほ未だ國民が時間の勵行を期し得ざる其の弱行は、眞に遺憾とすべきである、吾人は貴重なる時間の裡にありて、國民皆勤を高唱せんとするものである。

松山と道後

伊豫の首都、松山は、街區の整然と、勝山城の優美を以て天下に鳴り、道後は温泉を以て、其の名海内に轟く、然して松山と道後、相隔つること十數丁、恰も道後は、松山のサバールたる趣あり。

道後に就き、古き歴史を物語るは、餘りに贅言なり、余は唯一片の紀行を試みんとするに過ぎざるなり。余幼にして伊豫地誌を読み、愛媛史蹟を繙きて、道後は實に懐かしき土地なりしなり、別府に有馬に將た城崎に、關西の名泉は更なり、塩原、伊香保、草津等、關東の諸泉に杖を曳きしかど、就中道後は余にとりていとも慕はしき温泉なりしなり。

道後に赴かんには、先づ高濱港を経由するを至便とす。高濱は北豫唯一の良港な



松山と道後

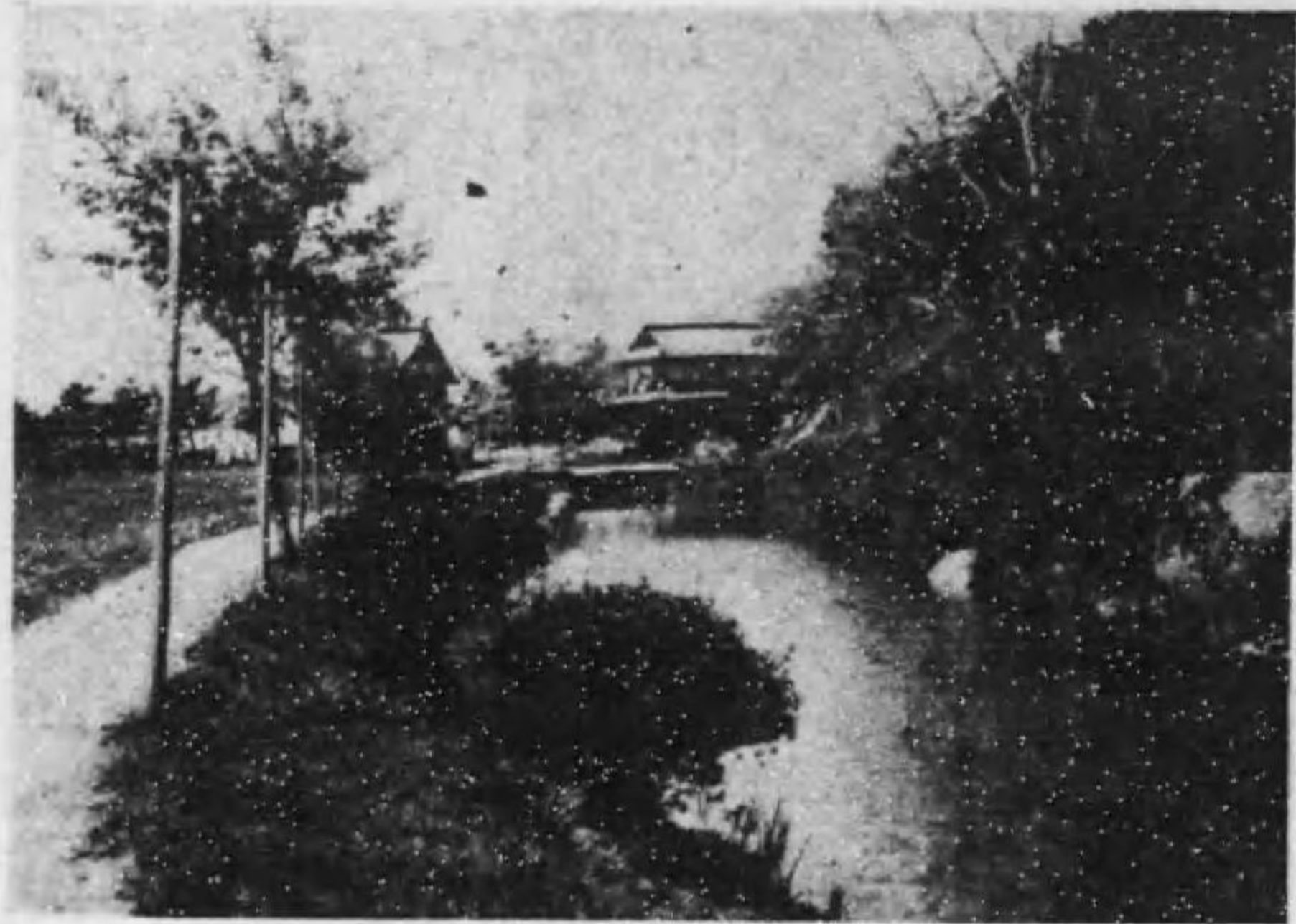
高濱港

り、前面興居島を控へ、港内水深くして、大船巨舶を碇するに足り、商港として殷賑を極む、仰げば洋中藝豫の山々屹然として高く雲際に聳へ、俯せば幾多の島嶼點々として碧水に浮ぶ、山水の調和せる、自然の風情誠に捨て難く、西燧洋の彼方には、鎮西の諸峰を望み見て、其の絶景言はん方なく到底都人士の夢想だん及ばざるところなり。此の地伊豫鐵道の基點にして、海陸物資の集散地なり。

高濱港より、鐵路僅か一時間にて、道後温泉に達すべし。高濱を發し墜道を潜れば、間

もなく右に梅津寺の海邊あり、白沙青松長く連り、風光頗る佳、夏季は海水浴を以て其の名著聞し、此所に遊ぶもの甚だ多しと云ふ、梅津寺を過ぐれば、早くも汽車は三津驛に着く、三津ヶ濱は高濱に比して遙に古く、商港として相當の地盤を有すとか、憾らくは海水遠淺にて、大船を繋ぐに適せず、近來高濱の擡頭せし所以こゝにあり、三津を過ぎ、衣山を過ぐれば古町なり、外側に對し、古町は松山市の舊市なり、御幸寺山を左に仰ぎ、廣漠たる城北練兵場を右に眺めつゝ走れば、汽車は既に道後驛に到着す。

道後温泉は、道後町湯の山の麓にあり、町は四時浴客を以て賑ひ、一ヶ年約二百万の客を迎ふと云ふ、宏壯なる旅館街傍に櫛比し、其の盛況を物語るに充分なり、温泉は、町營のものに靈の湯、神の湯、養生湯、まつ湯、御殿湯等の別ありて、何れも湧出量甚だ豊富、而して胃腸並に皮膚病に効顯ありと云ふ。



道後公園

道後は温泉に於て、單り其名天下に冠たるのみならず、公園に於て亦其名顯著なり、園内の樹木蒼鬱として繁茂し、殊に櫻樹に富み、歩道又よく整へり、曳杖逍遙に適し、風色特に明眉なり、池中に鯉、鮒群をなし、綠濃かなる夏日の清遊には格別の妙味あり。道後の東北數丁にして石手寺あり、弘法大師開基の巨刹にて、四國八十八ヶ所の札所なり、傳へ聞く、弘法大師唐に學び、歸らんとせしに、偶々印度を遊歴して歸りし三藏に會す、三藏弘法に與ふるに印度八靈場の土を以てす、弘法

歸朝後之れに入を増して、八十八となし、其土を四國に分置し、八十八ヶ所を開きしなりと、其の苦行察すべきなり。院内多くの國寶を藏し、且つ特別保護建造物數棟あり、境内香煙ゆるやかに立ち昇りて、大師の偉業は千歳の下に朽ちず、門前の河流清冷にして、一掬克く人を慰するに足り、周域の松樹天を摩し、亭々として佛韻幽嫺、一千百有餘年の響を奏で、清淨無垢の靈域をして、更に一段の莊嚴を加へしむ。

道後より乗車、僅か十分にて、松山市に達するを得、松山市は、伊豫絋の集散地として著名なり、又砥部焼の名によりて、陶業界に傑出す。加藤嘉明築城の勝山城は、今も昔の美を存し、容儀を整へて、市の中央山頂に在り、勝山は今や松山公園として開放し、四時遊覽者其跡が絶たず、近郊一帯、絶頂より俯瞰し得て、風景殊に可し、山間古木蒼然として、幽邃閑雅を極め、東に石槌の靈峰を仰ぎて、展望廣濶、眺望最も雄渾なり、西に伊豫灘を望み、佐多岬の蜿蜒たるを煙波の裡に指呼す

るを得べく、南重信川を隔て、四國山脈土豫の兩國を境し、北方遙かに堀江沖、怒濤の脚下に咆哮するを覺ゆ。

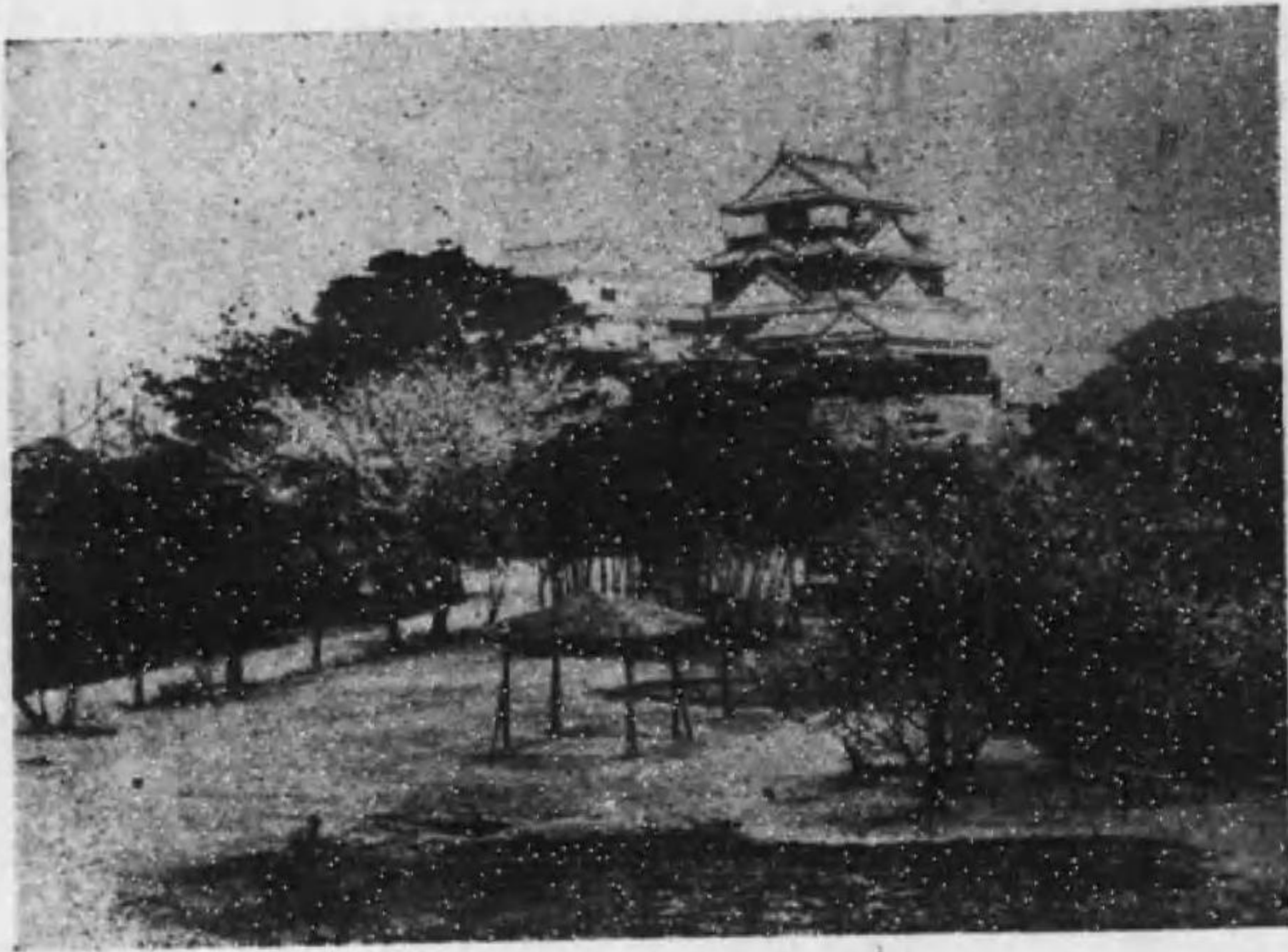
東北の雲間に勇姿を表はすは、史上に有名なる高繩山にして、弘安の役、殊勳を樹てし、河野通有の據りし所なり、通有は伊豫の人、智謀に富み且つ膽略あり、弘安四年五月忽必烈、兵艦三千蠻軍十萬餘を督して我が筑紫に肉迫す、九州の民爲めに震駭せざるなし、時の執權北條時宗特に城盛宗を遣はして軍事を督せしむ、博多海岸の石壘十數里、我軍密集



松山市の鳥眼圖

して防ぎ戦ふ、賊船岸に近づく能はず、我軍進まず、時正に持久戦に入らんとす、通有又石壘を背にし陣してよく戦ふ、一日巨艦の旗幕甚だ華美なるを望見し、伯父通時と密に謀り、手兵數十を小舟に乗せて賊船に迫る、見る人其の大膽なるに驚かざるはなし、賊軍雨の如く亂射して通時重傷を負ふ、通有亦負傷したるも更に屈するの色なく、刀を揮ひて敵に近づきたり、敵艦巨大にして攀づるに難し、通有我が船の帆柱に上り鉤繩を投げて賊船に移り、敵を斬ること數を知らず、遂に賊將を擒にして歸る、我が將士其の勇を賞せざるものなし、歸るに臨み通時重傷の爲め船中に卒す、通有の遺憾想像に餘りあり、此の役我が軍の勝利に歸したりと雖も、實に我國開闢以來、未曾有の大災危なりき、論功行賞に當り通有を第一とす、春風秋雨茲に六百五十年、高繩山頂通有の英靈靜に眠る。

要するに松山は、華麗優美の四字を以て之を表し得べく、何人の清遊にも適する



松山公園と勝山城

所なり、人情又極めて濃かにして爽快なり、道後は四時空氣清朗、氣候溫和、海内第一の溫泉場と稱すべし、此地、國鐵幹線の之に接するものなく、交通不便にして、發達の著しきものを見ず、されど數年後に於て、四國鐵道敷設の曉には、本州との連絡も殊によく、東よりする者は、琴平宮に參詣して道後に一浴し、西よりする者は、道後に一浴して琴平に養し、高松に遊ぶの時代を迎へて、豫讀の地、頓に發展せんとす、其の機運近きを覺へしむ。

避寒と避暑

世に避暑と云ひ、避寒と云ふ、共に中産階級者の獨占物であつて、下級民はこれ等の恩典に浴するを得ない、故を以て下級の人々は、避暑又は避寒する人々を羨望して止まない風がある。

孟夏の候ともなれば、炎熱さながら焼くが如く、人々は涼を逐ふに日も尙ほ足らざらんとするの光景は、相當思慮あるもの、鬱鬱せざるを得ないところである、四時の中において、夏こそ最も楽しき時なるに、一大苦境に逢着せるかの如き恐怖を以て之を迎へ、東に走り、西に逃れて、殆んど身を容るべき所なからんとするは、誠に淺間しき事共である。額に汗して働くほど、世に愉快なるはない、大厦高樓の内に座し、氷柱を四圍に繞らし、風機を用ひて涼を納るゝとも、夏は夏である、炎

熱は刻々として身に迫り、以て逃るべき餘地がない、或は海邊に暑を避け、山間に隠るゝとも、天公益々彼等を追窮して假借せず、斯くして苦惱は益々苦惱を産み、一大惡魔に捉へられたるが如く、聊かの身動きも雷ならざらんとす、其の狀態寧ろ笑殺すべく憫殺すべきである、銷夏の第一は、夏を樂しみてよく働くにある、流汗淋漓、一日の勤勞は一邊の行水と共に清く流れて苦熱去り、涼風爽に袂を拂ふ時、人生の快は譬ふるにものがない、實に滾々として盡きざる涼味は、勞働の賜である、勤勞ありて然る後快樂來り、人生の天地は初めて廣く開かるゝのである。

清泉亭後になくとも、勤勞の後に流るゝものは幽谷の水である、其の清流は汲めども盡きず、以て人生に唯一の慰安と快樂を與ふ、暑を避けんとして、跪けばもかくほど、苦しきは實に孟夏の候である、苦熱將に百度に近からんとし、怪雲山の彼邊に峰起して、一種の物凄き裡、孜孜として勵み働かば、酷暑は忽ち去つて、涼風自

ら至るを覺ゆ、炎光斜に雲を射る時、怪雲浮動して光彩陸離、又自然の大丹精として賞讃し得るものは、一に勤勞の力である、有名な白樂天の詩に

人々暑を避け、走つて狂するが如きも獨り禪師の房を出でざるあり、之れ禪房に熱の到る無きにあらず、唯よく心靜なれば即ち身も涼し。

と云ふがある、誠に斯の如きものである、山に避け、海に遁る、とも、苦熱は必ず到るのである、如何なる茅屋にても、唯心靜かに勤勉なれば、そこには一味の涼風吹き來りて、全く夏の苦を忘れるものである。

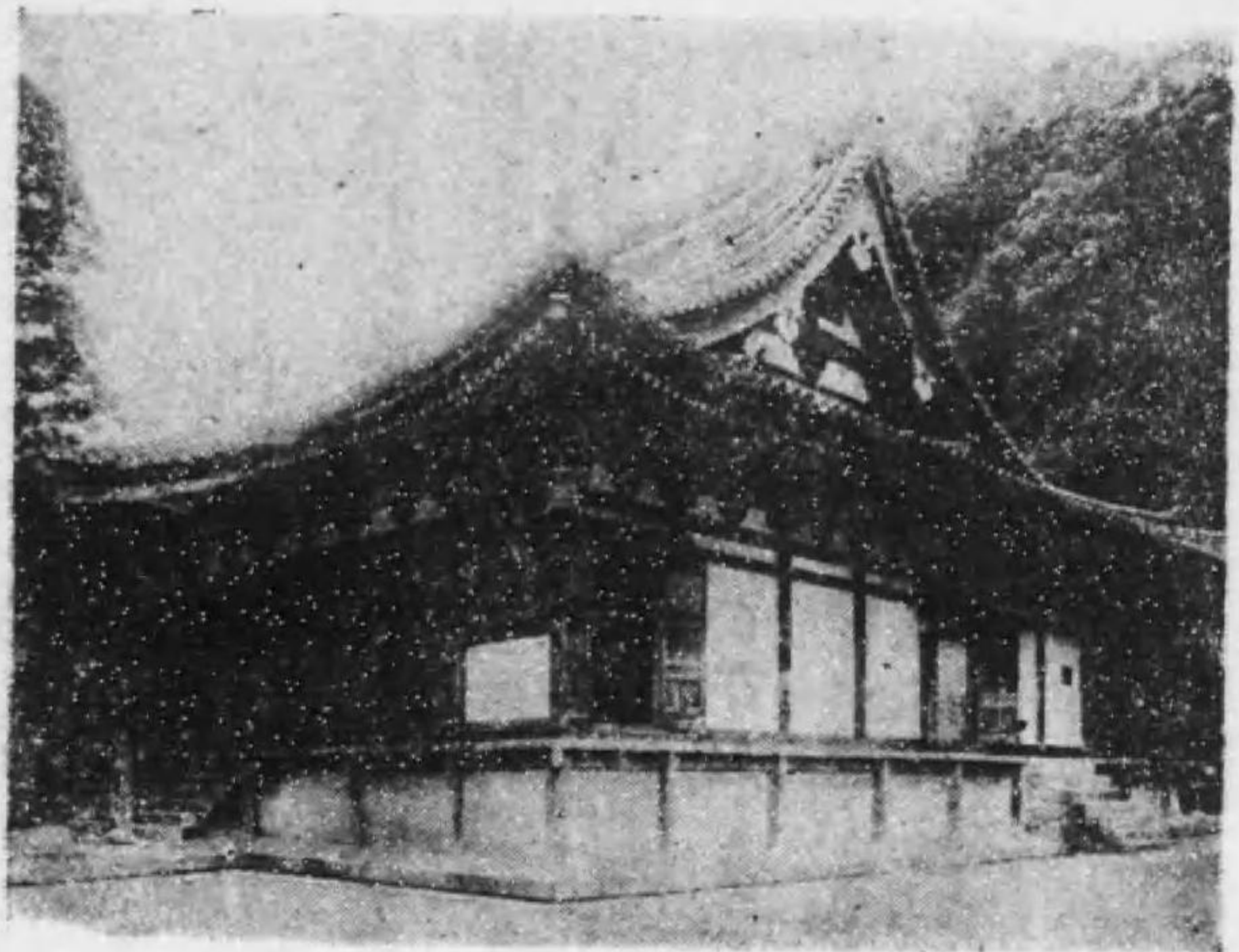
嚴寒の候にありても、亦然りである、いくら寒氣を避けんとしても、冬は冬である、朔風凜烈肌を劈くは、何處にありても同じことである、銷夏法を知れば同時に忘寒の法も亦到るものである、夏來るとも暑さに苦しまず、冬到るとも寒さに惱まされざるものは、唯心を靜かにして餘念なく勤勉なるにある。『暑さをも忘れて走る』

『螢狩』の句は、心の置き所によりて、暑寒の苦惱なきを明かに示して居る。

河南遊記

朝の六時に、大阪汐見橋驛を發し、高野線によりて、長野驛に下る、河南の地に遊はんとするなり、井上米太郎、西村二郎、中島五郎、兼子隆太郎の諸君同行の中にあり、懐かしきかな河南の山水、此邊一帶曾遊の地なり、山や、水や、皆舊知なり。

高野線は、攝河泉の平原を半ば横斷して紀州に入れり、長野に到るまで、概ね平原なり、車中狭山池畔を過ぐる頃、隣座せる古老、頻りに池の由來を語りて止まず、池は今より凡そ二千年前、崇神天皇勅して開かしめ給ひしもの、周圍三十五丁、今にして猶近在數十ヶ村の田畝を灌漑す、蓋し我國水利工事の濫觴なりと。長野驛にて馬車を賃す、田舎に不似合な程贅澤な幌馬車なり、右手に遊園地を眺めつ、諸越



觀心寺本堂

橋を渡れば、道は既に急坂となる、橋は石川の清流に架せるもの、近年新に工成りて中央に菊水の紋を置きたり、石川の清冽永へに楠氏の誠忠を語る。

坂を登ること數丁、河合寺あり、國寶十
一面觀音を拜して、更に登る、長野驛より
二十五丁にて觀心寺に達す、觀心寺は川上
村寺元にあり、南河内第一の巨刹なり、文
武帝大寶年中優姿塞役の開くところ、八葉
自表の靈地にして、初めは雲心寺と號した
るなり、人皇五十二代、嵯峨天皇、當山を

御崇信あらせられ、地を相して寺號を觀心寺と改め、刺願を賜ひ、始めて勅願所と爲し給ひたり、大同年中、弘法大師巡錫の際、北斗七星を勸請し、大師一刀三禮の作觀音菩薩を安置す、天長四年道興大師此に隱棲し、弘法大師の依囑に依り、全く當山の基礎を造り、大に寺門の興隆を計れり、依て大師を當寺建立の開祖とせり、道興大師諱は實惠、檜尾僧都と云ふ。本堂は七間四面、向拜三間、建築學上觀心寺様式として其の名著はる、大阪府下最古の建造物なり、金堂の東に開基上人の廟あり、其の他行者堂、禮拜石、獨鈷の井等何れも一千有餘年の盛衰を語らざるはなし。境内に「建掛の塔」あり、建武年中、楠正成公願主となり、三重の塔を建立せんとす、中途にして湊川の戦役あり、遂に成らず、初重にして止む、有志者之を保存して五百八十餘年後の今日に及ぶ、また痛ましきこと共なり、實慧廟の東方に正成の首塚あり、小堂を設けて、中に石標を建て、『楠正成墓』と刻せり、一行と共に

香を奠して去る。正平十四年十一月楠正儀、和田正武等後村上天皇を當山に奉じ、塔中惣持院を以て行宮とす、觀心寺行宮跡の碑、唯だ寂として往年の衷愁を傳ふ、當時四十六坊、衆徒常に行宮の守護に力を盡したり、天阜崩御し給ひ境内に葬り奉る檜尾御陵と稱す、御陵に參拜して低回すれば秋光天に満ちて、雲影日に薄く、唧々たる蟲聲甚だ悲し。

辭するに臨みて、寶物を拜觀す、其の數計ふるに違なし、中に正成公所持の軍旗あり、白麻地に三幅にて長さ三尺五寸、中央に菊水の紋あり、『非利法權天』の五字を横書す、非は利に勝つ能はず、利は法に勝つ能はず、法は權に勝つ能はず、權は天に勝つ能はず、天は明にして私なし、之れ正成の常に深く信せしところなり。旗面に無數の鏃痕を印す、公の苦戰奮闘思ふべきなり。

傍らに正成、正行。正儀諸公の佩用せし刀劍數振あり、中に梵字にて「カンマン」

の語を刻すものあり、之れ正成公の所用せしものなり、「カンマン」は利劍の意なり



觀心寺行在所

一に之を折伏門シヤラフクモンと云ふ、折伏門とは佛敵を退治する意なり、即ち正宗の「カンマン」を以て朝敵を亡さんとの決心を示したるなり、刀劍に隣りして正成公の書翰三あり其の一に曰く

急投飛檄述思懷候訖然者項尊氏直義起鎮西發蘇軍帥群勇三十萬騎列分於海陸二道

近日改上由風聲流聞於事實者天下大變不可延時因茲馳向兵庫可致防軍之旨勅宣甚以急也正成情傾軍慮度之官軍微卒而何豈當於大敵矣依數雖諫奏君曾無御許容空垂淚痕今日發京師赴戰場訖嗚呼命懸養由矢前義比紀信忠欲致戰死之條無他事將亦元弘年中自天子御勅與之愛染明王爲子孫武運貴院可安置路次仰佛之僧一人至兵庫可被差越候委曲期其節可演說候也不宣

五月十六日

河内守

正

成

觀心寺中院御房

觀心寺中院は正成が八歳にして院主瀧覺御房を師として文學を修めたる所なり、文武兼備の名將たる正成は瀧覺御房の薰陶に依ると稱せらる、右の書翰は正成が將に尊氏の大軍を湊川に邀撃せんとするに際して發したるものなり、正成の戰死したるは五月廿五日なれば、此の書翰を認めしはそれより十日前のことなりしなり。

一旦鎮西に落ち延びたる尊氏は、直義と共に大軍を率ひて、海陸兩道より京師に攻め上らんとすの報急なれば、主上の御驚き一方ならず、直に正成を京師に召され、勅して曰く、急遽兵庫に下り、義貞と協力し、逆賊尊氏を邀撃せよと、正成畏みて奏すやう、足利勢は定めし大軍なるべし、今官軍の兵甚だ寡し、少數の兵力を以て敵の大軍を邀へ撃つこと甚だ覺束なし、主上には畏くも一時叡山へ行幸を仰ぎ奉り敵を一度京師に入らしむべし、正成河内に歸り、義兵を募りて敵を粉碎し、必ず叡慮を安じ奉るべし、正成に聊か策戦あり、縦令一時の耻辱を忍ぶとも、最後の勝利を謀るこそ、得策とこそ存するなりと具に奏しける。時に坊門宰相清忠あり、正成の謀るところ一理あり、然るに征討の詔を奉じ置きながら、一戦をも試みずして此の言あるは頗る疑訝に堪へざるところなり、逆賊討伐の詔は既に下されたり、直に兵庫に下り、朝敵を討つを以て至當とすと奏しければ、廟議忽ち一決し、正成が必勝

の策は茲に一蹴され終りぬ、正成此上は、異議を奏すも詮なしと、恭しく詔を奉じて御前を退出せり。我子正行を櫻井驛に呼び寄せて、訣別したるは此の時のことなり。書中に曰く、しばしば諫奏すれども君曾て御許容無し、空しく涙痕を垂れ今日京師を發し戰場に赴くと、而して又曰く、戦死致さんとす、と。正成は献策を容れられりしかど、少しも君も怨み奉らず、花々しく湊川の一戦に悲壯の最後を遂げたるなり、時に正成四十歳、實に延元元年五月二十五日なり、書翰の其三に曰く

申入候此卷絹一疋從 公拜受具足も祖より我等迄着古候へども長かたみとおくり候以上

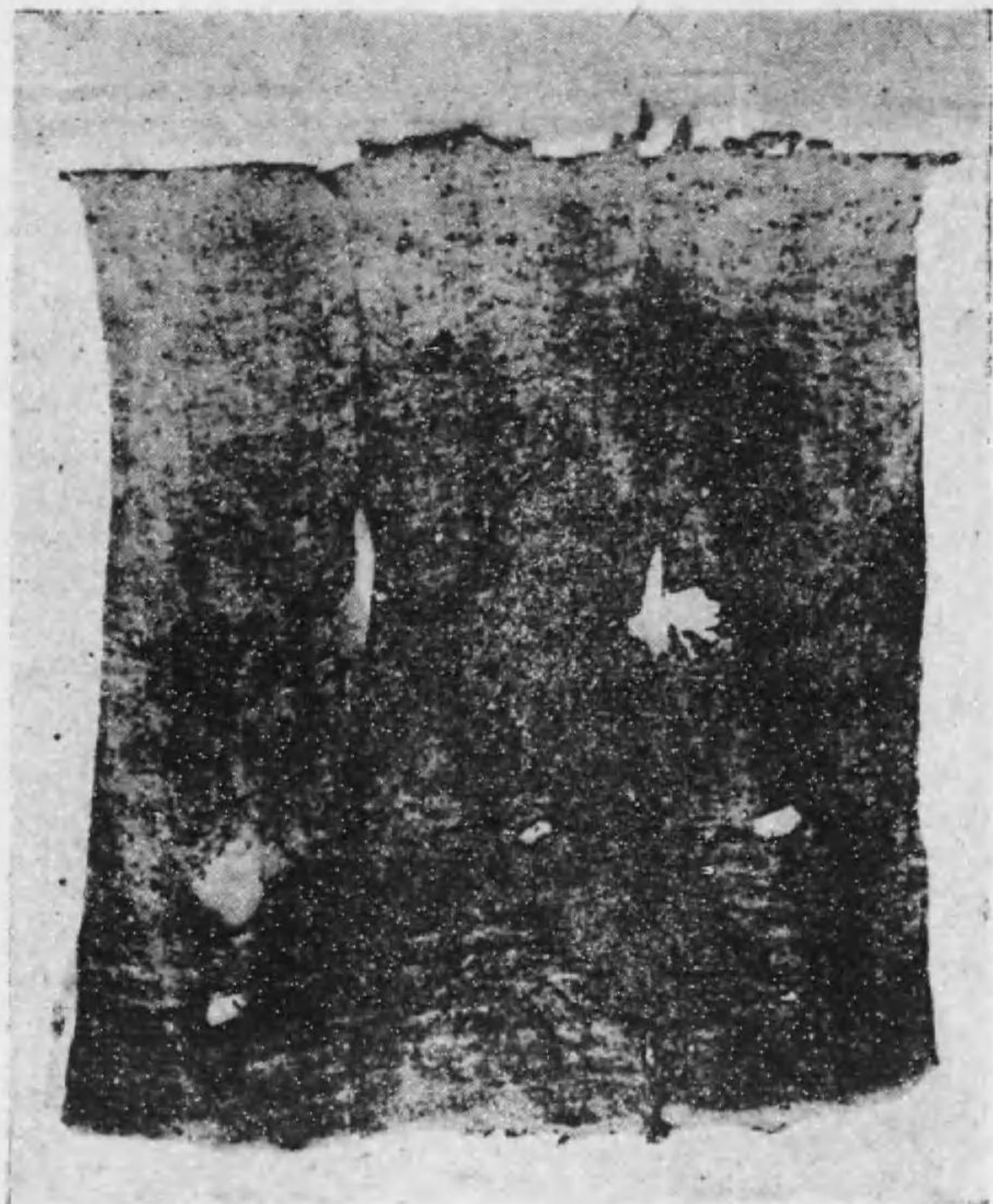
此度隼人差下候事非別事我等最期近々に覺候願貴殿成長之器量見届度候得共義之重所更難遁候彌勤學無怠成長之後我等心中可被察候謹言

建武三正月廿日

同 多門正成

楠庄五郎ごのへ

楠庄五郎とは、正成の嫡子正行卿の幼名なり、建武三年は即ち延元元年なり、正成の戦死したる年なり、この書翰は正成が正行に致したる最後のものなり、我子の成長を見届けたくも戦死を覺悟



楠正成所用の軍旗

したる正成には不可能なり、學を勵みて成長の後には自分の心を察し、君に忠義をせよとの遺訓は、この書翰に溢れ居たり、正成の心中や如何、正行の胸裡や如何なりけん、今眼の當り此の書翰を見、當時正成が胸中を洞察し、涙恨綿々たらざるを得ず、門前にて再び馬車を驅り、千早村西恩寺に向ふ、不動瀧のほとり、秋色殊に絶佳なり、涼風既に身を襲ふて、輕寒漸く至るを覺ゆ。

西恩寺は、大念佛融通宗別格本山にて觀心寺と共に河南の古刹なり僧正塩野泰隆氏吾等を迎へて懇に請す、即ち一行と共に旅装を解きて沐浴す、食後楠子の舊跡史談多くを聞き、益するところ甚だ大なり、明朝は金剛登山をなすべく早く寢に就きたり翌朝星を戴いて院を出づ、小深を過ぐる頃、天漸く明かし、秋風陣々として吹き渡り、木葉瀝々として黄落し、吟蟲草陰に鳴くこと頻なり、道に千早隧道を通過す、千早村人の義侠により、竣工せしものと聞く、長さ二丁餘、千早街道至便のも



正成が行正とへたる最後の書翰

のなり、今や車馬絡繹、村民の功大なるを感ず。午前九時千早城跡に着す千早城は正成の築きし所なり、奇計を用ひて克く八十萬の大軍を惱ましたる處なり、吉野の城既に陥り、護良親王は高野に匿れ給ひぬ、正成單り千早の孤城に陣を張りぬ、賊軍は大軍を恃みとし、唯一揉みにもみ潰さんと攻め寄せたるなり、計略に於て正成は絶世の大將なり、幾度か敵を破り敵を惱ましたり、高時の大軍

にして容易に之を破る能はざりしは、正成の智謀を証明して餘りあり。

千早神社に詣で、金剛山に向ふ、金剛山は大和河内に誇りて、其の頂を雲表に載す、北は葛城山に通じ、南は紀伊見峠に至り、山勢頗る峭峻を極む、全山翠微重疊、

晝猶暗きところ少なからず、甲取坂、屏風坂等の峻

難あり、山頂には金剛山寺あり、寺僧の勸むる苦茗

に渴を醫して暫く休憩す、前に攝河泉、後に大和、

香稻漸く熟して滿眸の田圃殊に麗はしきを見る、遠

くは淡路、播州、紀伊の山々來りて、一眸の裡にあ



師隆泰野鹽

り、吾人をして、吟情を弄せしむ。史に曰く、元弘二年冬、楠正成金剛山に據る、三年二月、關東三軍皆金剛山に集る、西南諸道の兵、徵官に應ずるものまた會す、勢を合して正成を攻む、正成千餘人を以て克く戦ふ、三月圍解く、正平二年足利尊

氏諸將に令し、金剛山を攻めて克たず、元中七年、足利義滿、畠山義深をして更に攻めしむと、松風颯々として轉た當年鞞鼓の音を聞くの思ひあらしむ、山腹に楠正儀の墓あり、其他風呂谷、雲機の跡等名跡多し。山を下り再び千早村に出で、正成の取りし間道を撰びて、また西恩寺の客となる、脚絆掛に草鞋穿き、物々しき扮装に、笑はれたる吾々が、物言ふさへうるさく疲れしに、都人士の纖弱さを一層裏書きしたるも笑止なり。

翌くれば雨なり、四邊烟靄に閉されて、只徒に庭波の多きを眺むるのみ、金剛山は濛々たる裡に姿を消し、和河兩國を境せる諸山、悉く煙霞模糊の間にあり、疲れし身に雨聲は時ならぬ慰安とはなりぬ、井上君は院僧を相手に烏鷺を闘はし、頗る激戦の模様なり、中島君と兼子君は栗を焼きつ、賞味し、西村君は心地よげに獨酌甚だ頻なり。

正午に及ぶ頃、雨漸く霽れたり、一行を促して赤坂に向ふ、秋草雨後の微風に動くところ、野外の秋色一段の光景を呈す、赤坂城跡は赤坂村にあり、名高き赤坂の一本松、惜しむべし、十餘年前焼失し、今は唯新に植へたる松樹にて往年を偲ぶ、城内に正成公の掘りたる井あり。元弘元年、正成笠置の行在所を辭して河内に歸りこゝに築きて勤王の旗を翻せり、笠置陥り、天皇終に賊軍の爲め六波羅に囚はれ身となられたり、賊軍大兵を以て赤坂城に迫る、正成屢々策を繞らし能く防ぐ、數次の計略に敵を殺すこと幾千なるを知らず、然れども衆寡敵せず、遂に手勢百餘騎を引連れて、竊に金剛山指して逃れたり、今城跡を見るに、城は方二丁に足らざる小城なり、一方は丘續きにて三方は平地なり、當時正成の兵五百と稱せらる、かゝる小兵を用ひて三十萬の貔貅を惱ましたるは正成の誠忠と智謀による、今此の地に遊び、徘徊久ふして懷古の情に堪へず、耳底に鼓聲の轟くを覺えざるを得ず。

赤坂城跡を訪ひたる吾等、道を轉じて正成公の誕生地向ふ、正成は水分の出なり、水分河のほとり「楠氏誕生地」の五字を刻せる記念碑、もの、憐れを宿して去るに忍びざるものあり、唯皇太子殿下お手植の松、永へに楠氏の靈を慰めん、今や訪客の爲め、無料宿泊所成り、一夜克く五百名を容るに足る。誕生地より水分神社に參拜す、社は正成公を祭る所なり、名物の茶器、赤坂焼は此所にて産す、悉く赤坂城跡の土を用ひて焼きたるものなり、記念にとて、一行の誰彼何れも之れを求めて歸る。水分神社に詣でたる一行は甘南備に向ふ、道中俗に「彼我の墓」あり、墓は十基を算す、正成赤坂城に戦ふや、敵味方の死者數名あり、死者には最早敵味方なし宜しく彼我共に懇に弔ふべしとて、墓を樹て戦死者の靈を祭りし所なり、正成は武辨一方の士にはあらざりき、慈愛に富めると同時に頗る度量の大なるところあり、「彼我の墓」は正成の如き名將にあらざれば、到底なし能はざるところなり、英志芳

ばしく亦甚だ床し。

甘南備は正成の夫人久子を出せし所なり、此地に南妣庵あり、夫人久子を祀る。今堂宇成り、面目を一新す、久子の盡忠賢母たりしは史上に明かなり、神戸湊川神社の境内に甘南備神社あり、久子の出生地名を取りて社名にしたるなり。夫人々となり温良篤實、正成港川に戦死するや、子正行を勵まして、君の爲め飽迄盡したり。其教訓は千歳の下に垂る、即ち淑徳賢母の龜鑑たり、夫人の庵を訪るもの誰か一掬の涙なからんや。

日漸く西山に傾きぬ、再び道を寺元に取り、長野驛に出づ、河南線によりて、富田林に達す、此邊名所舊跡數多し、富田林町は河南唯一の都邑なり、街路四通八達し、物貨集散、旅客の往來甚だ殷盛なり、歸途道明寺天満宮に參拜す、一に土師神社と稱す、垂仁天皇の御宇の創建なりと云ふ、土地を土師の里といふ、初め野見宿

禰の所領地たりしを以てなり境内梅樹殊に夥し。

道明寺驛より大阪鐵道による、軌道は今春初めて工成りたるもの、乗心地極めて愉快なり、車窓より葛井寺、平野郷などを眺めつ、大阪に歸着したるは午後七時なりき。

嗚呼思ひ出多き河南の地、吾に三遊の希望あり。

努力論

同じ努力でも、努力の方法によつて非常の區別がある、範圍の大なるものと、小なるものがある、自分が贅澤をせんが爲め、自己の或る慾望を満さんが爲めの努力は範圍の小なるもので、國家のため社會のために盡くす努力は範圍の大なるものである、而して社會のためになる努力こそ眞に望ましきものである。

釋迦と云ひ、弘法と云ひ、傳教と云ひ、或は基督と云ふ、何れも世の中の爲めに努力し法を弘めたものである、單に宗教家に限らず、伊能忠敬やコロンブスの如き、又は二宮尊徳、福澤諭吉の如き、何れも大なる努力を以て終始した人である。釋迦が臨終に於て、『汝等努力せよ』と遺した言は、大に味ふべきである。今の人達の多くが運は天にあり、と稱して座して其の幸運の來らんことを希望して居るのは正に唾棄すべきで、彼等は一時的僥倖を夢みて居るに過ぎぬものである。運好く、即ち僥倖にして試験にはパスしても、實際の努力が伴つて居ない以上は、忽ち化けの皮が現れてしまふのは理の當然である。

牡丹餅は棚にあり、と稱して寝轉んで居たのでは、決して其の牡丹餅は口に這入るものでない、その棚にある牡丹餅を、當然口に入れ得る丈けの、準備が必要である、この準備が即ち努力である。

兎角人には常に煩悶があり、懊惱があるが、これ等煩悶懊惱こそ、悉く自我的慾望を充たさんがために生ずるに外ならない、美衣美食を欲し、徒らに宏壯なる邸宅を望む結果は遂に煩悶の種となる、勿論偉人聖者にも煩悶懊惱が無いとは云へない、然かも之等は一に彼等の沒我的努力に伴ふものであるから其努力そのものによつて相殺されてしまふ。人にして常に勤勉努力せば何等の悩みもないといふこと、なる正成が湊川に戦死し、隆盛が城山の露と消へて、更に苦惱の跡を示さないのは、努力の賜である、此の意味に於て、努力は不死の道と稱することが出来る、努力は實に不朽である。

一たび躓けば忽ちにして悲觀し、一たび轉べは起きることを知らぬものは、努力なき人である、七轉八起主義は即ち努力主義である、この努力あり勇氣があつて、初めて大成功を收め得べきである。權勢に諂ひ、者富に媚びて自己の榮達を圖るが